



施術日誌



— 接骨院にクリスチャン —

藤雅道

〈 はじめに 〉

本書は実話を基に構成したフィクションです
実在の団体・人物・事件などには一部を除き関係はありません

作中の批判的な表現は演出であり、特定の団体を非難・否定する意図はありません

作中のキリスト教は教派を特定していません

宗教の解釈は「無宗教の人間」の解釈に重点を置いていることをご了承ください

宗教、医療、その他の説明においては個人の解釈があるため
正確性に欠けている場合がございます
あらかじめご了承ください

【】内の文章は単なる蘊蓄なので
興味のない方は飛ばしてお読みください

〈 注意 〉

著作権は藤雅道に帰属します

購入者の私的使用目的のデータの複製以外で
本書の内容の一部あるいは全部を
著作権者の許諾のない転載・複写・複製・公衆送信(インターネットのアップロード等)
などを行うことは法律で禁じられています

年配の方であれば一度や二度は行ったことのある人は多いと思うが、若い人ではいまひとつ馴染みの薄い場所であろう接骨院とは、捻挫・挫傷・打撲・脱臼・骨折などに対し電気や手技を用いて施術をおこなう健康保険の使える施術所である。

住宅街にある大きなスーパーを中心にいくつかの店舗が並ぶ一画の住居付店舗に目をつけ、その接骨院を僅かな自己資金と金融公庫からの借金で開業したのは三年も前のことだ。

それなりに人通りも多く立地も良い環境に当初は儲ける意欲も少しはあったものだが、免許資格持ちの自分自身と二十半ばの受付嬢が一人、十坪程の狭い院内は規模としては最小の部類、おまけに患者に入れ込み過ぎる性格の為一人あたりの施術時間は長く回転率でいえば非常に悪く、露呈した経営能力の無さは忙しいばかりで経費や給金を支払えば僅かばかりの利益しか残らない貧乏接骨院が現状だ。

それでも潰れず飯が食えればそれでいいかと独身ゆえの気楽さで、とくに何事も無く施術に勤しむ日々を送っていたものだった。

十二月初旬、朝寒い時間帯はまばらな患者も、十時を過ぎる頃にはすぐ近くにあるスーパーの開店時間に併せて用事を一緒に済まそうとする主婦など中高年の女性の来院で幾らか賑わう。

三、四人程座れる狭い待合室と、壁を挟んで施術用ベッドが三台ある施術室にベッド毎をカーテンで区切り、それぞれに電気の機械や赤外線などが備え付けてある。

これにマッサージベッドもある手狭な院内では五人以上も入れればあつという間に満杯だ。

今も待合に二人座っている中、扉を開けた音が聞こえ、受付嬢が順番まで時間がかかると説明する声が壁向こうで聞こえる。

なにしろ一人頭の施術時間が長いので待たせることは確実だ。

この心苦しきはなかなか慣れるものではない。

買い物済ませて再び来るとの声にひとまず胸をなでおろし、改めて目の前の患者に取りかかることにした。

「今日はどうされましたか？」

患者は72歳、女性。

昨日つまずいた時に右膝を捻ったとのことで、ベッドの上で投げ出された膝は全体が腫れ上がり痛々しい。

「だんだん痛くなってきて・・・」

少し体を起こし、その動作が響いたのか顔をしかめ、膝を擦りながら訴える。

捻った直後痛みはあったものの、大したことなく、とりあえず温めればいいのではと夜に風呂で湯船に浸かって一生懸命温めていた、と説明を受ける。

確かに慢性的な痛みに対しては温めることが有効な手段ではあるが、急性、受傷した直後の捻挫などについては例外で、必ず冷やさなければならない。

冷やすことにより腫れが悪化することを防ぎ、痛みを和らげるのである。

温めてしまうとそこに大量の血液が流れ込み、腫れ・痛みともに悪化するのだが、意外にこのことを勘違いしている人は多い。

風呂の所為もあってか翌朝膝は倍近く腫れ上がり、腫脹著しく膝関節の屈曲困難といった症状であった。

簡単な膝のテストをしたあと、膝に電気治療器をまず当てる。

その後は患部を冷やし、施術後には包帯で固定しておいたほうがいだろう。

とにかく関節などは動かせば悪化するものだ。

「家の冷凍庫に保冷剤でもあれば、今日はそれでしっかり冷やしてください。お風呂は湯船に浸からずシャワー程度にしておいてくださいね」

ベッドの脇で努めてにこやかな表情を作り説明を続ける。

人付き合いも悪く愛想笑いも苦手だが、患者と接する時にはそれなりに態度はガラリと変える。

身長百八十の些かゴツイ体躯に、昭和だったら二枚目だったかもしれないと妙齢の女性によく言われる若干強面の顔が乗っている姿を省みてのことだ。

慣れていない相手には不要に威圧感を与えてしまうという自覚がある。

三十路にはいり二年目、いい加減いい歳ともなれば分別というものを覚え、必要以上に愛想を好くしなければならないと努力はしていた。

それでもやはり笑顔を「つくる」時は、未だにどこか顔が引きつっているのは内緒の話としておこう。

「しばらくこのまま置いときますね」

中央のベッドの、膝の患者に笑顔を向けながらカーテンを閉め、両隣のベッドの段取りを考えながら次のベッドに向かう。

変わらぬいつもの接骨院の日常だった。

受付終了時間午後一時の十分前、最後の患者の施術も終わり、やることもないので受付嬢には先に上がって貰うことにした。

「それじゃあ失礼します」

ナース服のまま明るく挨拶をして裏口から出て行く。

歩いて三分程の距離に住んでいるので着替えるのが面倒らしい。

彼女がアルバイト募集に応じて来たのがだいたい半年前になる。

午前と午後の夕方六時までの時間帯に受付に入り、働きぶりに不満はないが、患者の居ない暇な時に溢す旦那ののろけと愚痴には時折辟易する。

新婚だそうで、どうやら今が一番楽しい時期らしい。

とりあえず午前はこれで終わりかと椅子に座り背もたれに体重を預ける。

机の上のカルテのチェックをするつもりだったが、そこそこ忙しかったこともあり、多少身体が気怠くやる気が起きない。

先に煙草でも吸おうかと思った矢先、玄関扉を開ける音がした。

「まだよろしいですか？」

「診療中」の札はかかっているのだが、終わり間際ということで気を遣っているのだろう。

申し訳なさそうに開けたドアの隙間から声をかけてきたのは初めて見る顔、若い女性だ。さしずめ二十代後半といったところか。

「大丈夫ですよ」

気を遣わせないように普段より少し明るく返事をする。

煙草への未練が残るが仕方がない、よくあることだ。

「初めてですね。保険証はお持ちですか？」

問診表を取り出しながら受付を始め、改めてカウンター越しに顔を見る。

とりたてて美人というわけではないが、童顔、丸顔で少したれた目は小動物の様のように可愛らしい。

「あの、交通事故なんですけど・・・」

そうすると彼女は交通事故で追突され首と腰がムチウチになったこと、整形外科に二ヶ月程通っているが症状が変わらず、知人に勧められ接骨院に変えてみようと思いついて来たことを説明した。

「そうになると健康保険ではなく自賠責になりますね。整形からこちらへの変更は保険会社にご連絡されましたか？」

まだ、とのこと。

帰ってから接骨院の名前と電話番号を保険会社に伝えるようお願いしたあと、問診表に必要事項を記入して貰う。

【 第三者により加えられた負傷については健康保険を使用することは出来ない。

交通事故の被害者の場合、相手方の加入している強制保険、正式名称を自動車損害賠償責任保険、俗にいう自賠責や任意保険を使用しての治療となる。

この自動車保険、普通の病院はもちろんのことだが、接骨・整骨院に対しても適用される。この場合整形外科などで診断書を出して貰う必要があるが、あとは保険会社に連絡するだけなので手続きも難しいものではない。

原則、はり・きゅう・按摩マッサージや整体・カイロプラクティックなどは適用外であるが、長期にわたり症状が変わらないなどのケースでは医師が有効と判断した場合に限り適用されることがあり、このあたりは保険会社と要相談になる。】

整形外科の診断書のコピー受け取り目を通す。

女性の名前はユキコ・年齢三十三歳。

年下かと思っていたが意外にも一つ年上だった。

一通りの手続きを済ませベッドに案内する。

横に立つと頭ひとつ分は身長差があり、一般的にみても小柄な部類に属すだろう。

玄関に脱がれたヒールの高い靴はささやかな抵抗なのかもしれない。

とりあえず荷物とコートは備え付けの籠に入れてベッドサイドに腰をかけて貰う。

軀を包むゆったりとした色の淡いシャツに足首まで丈のあるスカートが、太っているわけではないが年齢相応に多少肉付きのよいボディラインを上品に隠し、清楚とでもいえる雰囲気醸し出している。

なんとなく、どこか浮世離れした印象を受けた。

たまの若い女性患者に普段より細かい観察を行いながら整形外科で書かれた診断書に目をやる

。

診断書によれば申告通り首と腰の受傷であり、整形外科でのレントゲンなどの検査で骨に異常が無いことも確認済みのようであった。

ここでは改めて痛みの原因を探る為に筋の緊張状態、神経痛の有無、背骨の歪みなどを診てみることにした。

【 ムチウチとは交通事故の追突などで首の急激な過伸展・過屈曲によりおこる頸椎（首の骨）および筋・靭帯・神経・血管などの損傷を指す。

症状により幾つか分類されるが一般的な症状として知覚異常・頭重感・頭痛・項部痛・上肢疲労脱力感などがあり、神経痛や眩暈を伴うものもある。

症状は数週から数年持続するものもあり、また症状が治まっても周期的に症状が再発することもある。】

背後にまわりこみ背骨の状態を確認する。

一般に背骨と呼ばれているものは脊椎と言い、頸椎・胸椎・腰椎の総称である。

首の上部から脊椎の両脇に沿って指を滑らし歪みを診る。

背部において筋に損傷が起こるとその筋、及び周囲が緊張し、背骨の歪みなども引き起こす。

軽度の場合はマッサージなどで緊張をとるだけでも改善することもあるが、しない場合は歪みを治す必要もあり相応の手技が必要になってくる。

受傷後から変わらず、首を傾げるだけでも痛みが奔るとのこと。

予想通りに下部頸椎に大きな歪みを触知する。

そのまま腰まで指を滑らし胸椎下部及び腰椎部に幾つか歪みを見つけたあと、状態の説明に移る。

【 本来、脊椎の歪みの矯正というものは接骨院の業務ではない。

よく混同されるのだが、脊椎や骨盤の歪みの治療をうたっているのはカイロプラクティックや整体である。

とはいえ日本にはこのような治療の資格は無く、講習を数度受けただけの素人同然の人間がおこなっている場合も多く注意が必要だ。

また業務ではなくとも接骨・整骨院などで治療の一環として取り入れ、自費治療として別個に行なう処も少なくないのだが、その理由から技術にピンからキリまであり、これもまた注意が必要である。

補足として、一口に歪みを治すといってもその手技の種類は多く、ボキボキ鳴らさず、体に負担をかけない手技もあるので自分にあった治療法を探して頂きたい。】

首と腰を前後左右に動かし痛む場所を確認して貰い、とりあえずは腰椎部から始める。

ひとつの脊椎に対して緩やかに力を加え歪んだ脊椎を整えていく。

時間のかかるのが難点だが、弱い力の為、脊椎の関節や周囲の組織に対して負担も少ないのが一番の利点である。

患者自身も軽い圧迫感、歪みのきつい場合でも多少の鈍痛を感じる程度で済む。

痛くはないか、しんどくはないか、などの問いに、大丈夫です、と返事はするがどこか不安げで、初めてこの施術を受ける患者は大体この様な感じだ。

こうやって歪みをとると言っても、ただ軽く押し続けているだけで何が変わるのかといったところだろう。

三箇所ほど歪みを取り、改めて腰を前に倒し、後ろに反って貰う。

「・・・あ」

確かめる様に同じ動作を繰り返す。

「今痛み、無いです・・・」

まだ張ったような感じは残るけど、と言いながらも事故から二ヶ月、変わらなかった痛みの変化に驚きの声をあげた。

もちろん個人差はある。

損傷の程度や症状によっては変化がほとんど見られない場合もあるが、適応する症状であればその場で痛みの無くなることも少なくない。

「それでもまだ治ったわけではないので、時間が経つと元の痛みがでてくると思います。しばらくは続けないといけませんよ」

一度歪むと癖がつく。

その為、繰り返し施術することが必要であるが、特に症状が出なくなればそのまま様子を見てもいいと思う。

歪み自体はあって当たり前なので、そう気にしなくても大丈夫だ。

続けてほかの部位の施術に移る。

安堵したのか全体の筋の緊張が緩んでいくのが触れている指先からも伝わる。

「どうなるかと思ってたんです」

重かった口も、会話をする余裕がでてきたようだ。

「今まで行ってたところだと治療してもかえって痛くなったりして不安だったんです。そうしたらツジさんから紹介されて、あ、ここの大家さんの」

裏手に住む接骨院の店舗の大家は四十代の夫婦と高校生の娘の三人家族で、つい先日、娘が寝違いで首を痛め来ていたことを思い出した。

母親も付き添いでみえられ、その時の会話の中でムチウチのことを聞かれていたことを今更のように思い出す。

「お知り合いだったんですか」

地元ではない為、人間関係の把握はしづらい。

「あそこのご家族とはもう前から、私が学生のころからの付き合いになるかな」

何の接点があるのかが疑問だが地元の間人同士何かあるのだろう。

詮索するほどのことでもない。

「だからよくツジさんのところに来るので、ここは知ってたんです。けど接骨院で何をするとこるかよく知らなかったから入りにくくて」

「確かに、初めてだと不安ですよ」

「たまたま首のことで話していたら教えて貰ったんです」

「まあ、痛いことはしませんから安心してください」

明るく話す横顔を背中越しに見ながら、幾らかは不安を解消出来たようだと感じつつ施術を続ける。

「そういえば先生、知ってます？ここって前は飲み屋さんだったんですよ。その前は・・・なんだったかな、それでー」

気も弛んだのか先程までの無口が嘘のように、よく喋り、よく笑う。

気がつけば施術を終えるまで、他愛もない会話を楽しんでいた。

「はい、そうしたら首と腰、先程と比べていかがですか？」

楽しい会話に名残を惜しみつつ術後の様子を伺う。

始めてから二十分程経過していた。

「だいぶ違います」

首を前後に動かしながら答え、動かした時の鋭い痛みが消えていると申告した。

「とりあえずは痛みがとれただけと思ってください。まだ治ったわけではないので無理するとすぐ痛くなってきますからね。できるだけ安静にしてください」

念を押す。

痛みがなくなると喉元過ぎればナントヤラ、普通に動かしてしまう人が多く、その結果、前より痛みが酷くなる場合も多々ある。

ただでさえ初めての場、刺激の強弱に関係なく揉み返しなどの肉体の過剰反応がでやすく注意が必要だ。

そのままベッドにうつ伏せで寝て貰い、首と腰に電気治療器の端子をあてる。

「しばらくこのまま置いておきます。何かあれば呼んでください」

特に何事もなく、十分程でアラームが終了を告げた。

新たな痛みがでていないか、気分が悪くなっていないかなどを確認し、今日はこれで様子をみて貰うことにする。

「それではこちらが診察券になります。今日は無理せず安静にしてください。」

受付カウンター越しに診察券を手渡した。

【 自賠償の初診の場合、事前に保険会社と病院の連絡がとれていれば問題なく患者の費用の負担は無い。

連絡がとれていない場合は院ごとに対応は違うが、全額、または一部治療費を現金で支払わなければならない場合がある。勿論あとで全額は還ってくるので心配はない。】

「ありがとうございました」

「お大事にしてください」

玄関のドアを開け外に出ると、振り返りもう一度笑顔で会釈をして扉は閉められた。

入ってきた時とは打って変わった表情だったことに満足する。

やはり施術の結果がきちんと出せた時は嬉しいものだ。

心地良い達成感と、やはり初診の患者にはエネルギーを使い膨れ上がった疲労感を共に感じながら白衣を脱ぎ二階に上がる。

これでようやく煙草が吸えるというものだ。

昨今の禁煙ブームのなか、当然ながら院内で煙草を吸うのは論外で、例え誰もいなくても匂いがつく為、吸うこと出来ない。

幸いなことに住居付店舗であった。

二階には六畳の畳部屋と板間の四畳半があり、エアコン・テレビ・冷蔵庫・電子レンジなどに布団を一組と寝泊りが出来る程度には揃えてあり、換気扇も設置した煙草も吸える完全にプライベートな空間を確保出来てある。

休憩や、気が向いた時に寝泊りするなど何かと重宝していた。

独身男にふさわしい散らかり方を見せる室内を横目に、換気扇を回し煙草に火をつける。

吸い込まれる煙を眺めながら、いつしか考えていたのは先程の患者、ユキコのことだった。

かわいい、綺麗、ではなく可愛らしいという形容詞がしっくりくる。

とりたてて顔の造作に際立つものがあるわけではないが、全体の雰囲気から与えられる印象と愛嬌のある笑顔が「可愛らしい」という言葉を選ばせた。

患者には手を出さない、その程度のモラルは一応ある。

しかし以前の彼女と別れてはや一年、日々年配のご婦人の相手をしている身としては、滅多にない同年代の好みの女性に対して食指が動くのは致し方無いことであろう。

それでもそれだけだ、だからといって何をするつもりもない。

相手が未婚かどうかとも判らないし、そもそも次回の来院があるかも分からない。

取り留めのないことを考えている間に火はすでに根元まできていた。

昼飯にしようとして煙草を灰皿に押し付けて、冷蔵庫から祖母の手作り弁当を取り出す。

蓋をとった弁当箱の中身は市販品であれば「特盛」といったところで、若いんだからと作ってくれる料理は弁当に限らず家でも常に油モノ中心の実にボリュームのある中身で三十過ぎの胃には少々重たい。

祖母にしてみれば外見は成長しても孫はいつまでも幼い頃のままらしく、もう歳だからと言っても一笑に付され、量を減らすことすらして貰えない。

残して捨てるのも気が咎める。

これも祖母の張合いになるのならと残さず食べる様にはしているが、徐々に増えていく体重に懸念を感じる今日この頃だった。

現在は父方の祖父母と同居の身である。

両親は県を二つ程またいだ土地に健在であり、自分の育った地元と呼べる場所も当然そこに当たる。

その地元ではなく、土地勘や知り合いがあるわけでも無いこの土地で開業を決めたのは他でもない八十を超えた祖父と祖母の為であった。

場所にこだわりは無かったので四年前、他県で八年程勤めていた接骨院を辞めたことを期に、両親が何かと心配していた一軒家二人暮らしの祖父母のところで開業でもするかと割とあっさり決めてしまった。

「家を継ぐ気はないんだが・・・」

遺産目当てと思われるのは心外である。

相続などは面倒なのでそれだけは事前に断りを入れて同居を提案し、家の空き部屋に転がり込んだ。

これだけ聞けばまるで絵に描いたような孝行孫息子だが、学生時代から高校は全寮制で家を出たのを皮切りに、各県を渡り歩き散々好き勝手して親に苦勞をかけ続けの放蕩息子であった実績がある。

こころでひとつ罪滅ぼしでもしておかないとさすがに寝覚めが悪い、という幾分お仕着せがましい理由もあった。

当初は祖父母の家を接骨院に改装する申し出もあったが、そこまでして貰うつもりも無く家から車で十分程離れた場所にある店舗を借りることにして開業した。

人間関係を含め、家と職場はある程度距離を置いたほうが物事うまくいくものであることもあっての配慮だ。

現状、歳の離れた者の同居はお互いに気を遣うことも多いが、それがまたいい刺激となっているようで二人とも元気なものである。

どうなることかと思った時期もあったが、振り返れば同居して良かったと思える程度に今はそれなりの満足感を持っていた。

電子レンジで温めた弁当を黙々と口に運ぶ。

毎日のパターン通りなら、このあとは昼寝をして午後の診療、終われば家に帰り夕食のあとは祖父母の治療、その後は大抵風呂に入って寝るだけの生活。

考えてみれば週末や休みの日は買い物などの家の用事に付き合い、食事はなるべく一緒に摂るように努めていると、一人の自由な時間など無く、遊ぶことにもとんと縁が無くなったものである。

それでも今はこの平凡で平穏な日常を繰り返していることに、不満を感じることもなく過ごしていた。

二 2004年12月中旬から下旬

まもなくクリスマスだが接骨院には関係ない。

クリスマスセールで施術費半額、とでもやれば患者も倍増するかもしれないが健康保険を扱っている身では出来るわけも無い。

とりあえず気分だけでもと置いてある、待合室の棚のサンタ人形や小物が僅かながらに季節感を出しているに留まっていた。

寒さの所為か、年末行事で慌ただしいのか、やはりこの時期は患者も少なく陽が沈む頃には暇を持て余すことが多い。

今日も夕方六時に受付嬢にはあがって貰ってから暫らくしての院内には患者一人のみと寂しい限りだが、相手の所為か少々浮かれていた。

ユキコ嬢。

初診から二週間経ち、ほぼ毎日のように来ていた彼女とは幾らか打ち解けてきたように思う。

それほど踏み込んだ話をするわけではないが、他愛のない話を感情豊かに話し、笑う彼女に好意を抱き始めたのはいつの頃からだろうか。

一度くらいメシでも誘ってみよう、などとクリスマスの雰囲気流されて、つい不届きな考えが頭をもたげ始めている。

彼氏がいるか直接は聞いておらず定かではないが、左手薬指が空いていることから結婚はしていないだろうということで勝手に判断していた。

それもそろそろ確認してみたい気もする。

とりあえずは今日も外面はあくまで品よく、先生の顔で施術を行っていた。

彼女は首・腰ともにズキズキした痛みは緩和するも、鈍痛・違和感去り難く只今施術継続中であつた。

うつ伏せで寝て貰い、筋緊張緩和の為に首周囲のマッサージを行ないながら話しかける。

「もうすぐクリスマスですね」

待合室のテレビのニュースでクリスマス特集の音が聞こえていた。

「彼氏とデートとかするんですか？」

この流れなら自然だろうと探りを入れながら質問してみる。

「クリスマスは・・・特に何もしません」

少し引っ掛かる言い方だが、質問に気を悪くしたわけでもなさそうだ。

「誘ってくれる相手もいないですしね」

「なら一緒にメシでも行きませんか？」

チャンスは逃さず、断られても冗談で済ませられるよう軽い感じで誘ってみた。

「・・・」

数秒の沈黙、失敗だったか、まだ誘うには時期が早かったかもしれない。

仕方なく戯れと誤魔化そうとする前に彼女の口から予想外の台詞が耳に届いた。

「ごめんなさい。私、クリスチャンなの」

そう言ってキリスト教の一教派の名前を上げる。

聞いたことがあるような気もするが、とりあえずキリスト教という大きな括りでしか理解出来ない。

なにしろ仏教神道も含めて宗教には必要最低限、極力関わらず無頓着に生きてきた。

思いもよらない唐突な告白にどう返答していいか言葉を探す。

地雷を踏んだような気分、頭の中では警鐘が鳴り響いていた。

「ああ」

間の抜けた返答しか出来ない。

「だから未婚の異性と二人きりで会ったりするのはしないようにしているの。お誘いは嬉しいけど、ごめんなさい」

宗教を理由に体よくあしらわれたわけではなさそうだ。

うつ伏せで表情は見えないが本当に申し訳なさそうな声の雰囲気、真摯な答えに軽い気持ちで声をかけたことが今は心苦しい。

「厳しいんだね」

「そう、部屋とかでも二人きりになるといけないからドアは開けっぱなしにしなければいけないとか・・・」

徐々に声がか細く詰まり気味になる。

宗教の話が無宗教の相手には理解され難いこと、反応が得てして好意的にならないことを彼女は理解していた。

だから今迄、あえて話さなかったのだろう。

クリスチャンであること、誘いを断ったことの気まずさ、このあとの状況に対しての不安と緊張は施術中の身体に触れた手からも伝わってきた。

「じゃあ結婚しようか？」

「!？」

驚きとともに顔を上げて小動物のように目をパチクリさせる。

何を言われたのか理解出来ない、そんな表情だ。

「結婚すれば何も問題ない、それからメシを食べに行こう」

あからさまに現実味の無い冗談に切り替える。

道化芝居もいとこだが、この際ノリで誤魔化すのが一番手っ取り早い。

ちょっと呆けた顔があははと大きな声で笑い出し、その身体の緊張が解け緩むのを指が伝えた。

「駄目ですよ。私、同じクリスチャンの人としか結婚しないんだから」

にこやかな返答にわだかまりは感じられない。

「そいつは勿体無い、こんなにかわいいのに」

その言葉にまた、あははと屈託無く笑う。

どうやらこれで余計な気を遣わせずに済む、これからも今迄通りに接していけそうだと胸を撫

で下ろす。

「でも今この状況、二人っきりだけどキリスト教的には大丈夫？」

「それは・・・」

困ったように答えに詰まる。

「・・・だって治療だから」

これは許して頂けるらしい。

受付終了後、シャッターを下ろし煙草を吸いに二階に上がる。

改めて冷静に考えてみようと思いつきながら煙草に火をつけた。

神様はいるかもしれないが興味は無い。

宗教は特に信じていない。

出席した冠婚葬祭での神道・仏教はあくまで慣習としてしか認識していなかった。

経典や聖書なども一種の思想書、罰当たりを承知でいえば空想小説の類として捉え学生の頃には多少なりと目を通したこともあるが、それ以上の興味が湧くことはなかった。

これからもそうだろう。

そんな自分が宗教なぞを真面目にやっている相手と、よしんばつきあったとしてももうまくいく筈もない。

宗教家との交際がいかにか大変かは耳にする程度だが理解はしているつもりでいる。

例え「愛」とやらがあっても生活習慣の違いはともすれば軋轢を生みやすいものだ。

まだ深入りする前に知って良かった。

「ちょっと勿体なかったかな」

理性は諦めを決断させ、呟きと共に煙を吐いた。

一週間が経ちクリスマス・イブを迎え、その夕方。

さすがイベント当日はとみに患者が少なく、今日は夫とお出掛けデートと朝から休みを取った受付嬢の空いた穴も一人余裕でこなせる患者数であった。

午後の開始時にはちらほらいた患者も、陽が沈み暗くなってからは一人もいない。

閑散とした室内を眺める。

クリスマスのようなイベント時に一人でいると、寂しさもまたひとしお身に沁みる。

月末、および年末の近いことからやらなければならない事務仕事もあるのだが、それもこんな日にはやる気が起こらない。

暇を持って余していると玄関の扉が控えめに開いた。

「こんばんは、まだ大丈夫ですか？」

ユキコだ。

「ヒマそうだね」

コートを脱ぎながら悪戯っぽく笑う。

雨降って地固まるというわけでもないだろうが、あれからいつのまにか他に患者がいない時などは友人のように互いにくだけた物言いになっている。

関係はすごぶる良好だ。

「ほっとけ」

いいからさっさと入れ、と言いながらベッドの用意をする。

調子はどうかと尋ねながら首の施術を始めると、外出して疲れたからかいつもより首と腰が痛いと訴える。

確かに筋は緊張気味だ。

「今日は外、寒いよ。天気予報で言ってたけど雪が降るかもね」

「クリスマスの上にそれだけ寒いんじゃ、今日はもう店仕舞いだな」

シャッターを閉めてやろうか、そんな気さえ起きていた。

「やっぱりクリスマスとか暇？」

「まあね、こんな日に来るのはクリスマスに無縁な寂しい人ばかりだな」

寂しい、を強調して言った。

「私は別に寂しくないですよ。だいたい日本のクリスマスって違うもの」

ちょっとむくれたように反論する。

彼女、キリスト教徒にとってのクリスマスは恋人達の聖なる夜でも家族サービスの日でもない

。一般の認識と些か異なることを聞いたのは昨日のことだ。

【 十二月二十五日はイエス・キリストの誕生日ではない。

起源は定かではないが、ミトラ教という太陽神を崇拝する宗教の影響を受けたと考えられている。

元々ミトラ教の影響を受けていたローマでは、一年でもっとも日が短いこの日を太陽の誕生日とし冬至を祝っていた。そのローマにキリスト教が入り、布教する際に土着の宗教であったミトラ教を吸収し「イエス＝真の太陽（神）」とこの日を誕生日として祝うようになったようだ。

クリスマス・ツリーはヨーロッパの民間信仰を起源とし、常緑樹のモミの木は神聖な木とされ枝を悪霊除けとする風習がある。ドイツ中部ではモミの木に住む小人が住人によいことをするという信仰から木を飾りつけその周りを踊る祭りがあり、これが起源といわれている。

どちらもキリスト教以前からの風習がキリスト教と迎合したものであることから、真面目なキリスト教徒にしてみれば「異教的」にでもなるのだろう。】

彼女はどうか「真面目」なキリスト教徒のようで、クリスマスは行事ごとに参加することはなく、家で心静かに過ごすという。

「そういう先生はどうなの？このあと。実は彼女とかいたりして」

「ないない。帰ったら酒飲んで鳥とケーキ喰って寝るだけ」

クリスマスらしくワインと七面鳥、と言いたいところだがビールにから揚げ、日本酒に焼き鳥

あたりが性に合う。

「誰かさんに誘いを断られたおかげで今年も独り寂しくすごしますよ」

「それはそれは」

他人事のようにあしらわれるが、声にはどこか楽しんでいるフシがある。

「でも独りって、今日は家には帰らないの？」

「今日は二階に泊まり。年末近いから事務仕事いろいろね」

月末、月初めには保険の請求などで慌ただしいのはいつものことだが、それに加えて年末年始の用意も加わる為、雑務が夜遅くまでかかる。

最近は寝るのが早い祖父母に気を遣わせない為にも泊まることは珍しいことではなかった。

「独りだと大変だね。私の父も自営業だからなんとなく分かるけど」

「そう、大変なんだ。だから結婚して手伝ってくれる？」

「独りで頑張ってください」

あれからも以前と変わらぬ態度で治療に来ていた。

「結婚」という言葉もネタとして受け入れられているようで普通に聞き流されている。

あわよくば、という思いが無いわけでもなかったが、クリスチャンという壁がある以上そこまで踏み込む覚悟はない。

同世代の少し仲の良い患者、それで十分だった。

「お大事に」

施術が終わり見送ると、時計は午後七時四十分を指していた。

受付終了まであと二十分。

早く閉めたいところだが、そこは我慢して八時までは開けていなければならない。

とりあえずは使っていたベッドの整理をしていると、玄関で扉の開く音がした。

「・・・」

声がしない。

無言で入ってくる患者もいるから珍しくはないが、扉の閉まる音がしない。

手を止め待合室を覗き込む。

「どうした？」

今帰ったばかりのユキコがそこに立っていた。

少しうつむき加減で目を合わせようとせず、そのままゆっくりと扉を閉める。

「何か忘れ物でもした？」

近づきながら声をかけるが返事はない。

さっき見送ってから数分も経っていないから何かがあったわけでもないだろう。

無言のままユキコは靴をゆっくり脱ぎ、目を伏せたまま一歩踏み出す。

そして身体ごと、勢いよく胸に飛び込んできた。

「何を・・・」

予想外の行動にそれでも冷静を保ちながら両肩に手をかける。

肩が震えていた。

体を離して顔を覗き込もうとするが離れようとしない。

すがりつくような姿勢そのままに彼女が顔を上げた。

その想いつめた表情と目が合う。

好意と違う感情が湧き上がるのを抑えきれない。

彼女は患者だ。彼女はキリスト教だ。彼女は・・・、彼女は・・・、彼女は・・・

踏み止まらなければならない。

踏み止まるべき理由が頭をよぎる。

その全てが踏み止まる理由にはならなかった。

奪うように唇を重ねていた。

うつむいていた彼女の顔を両手で挟み、持ち上げ、なかば強引に唇を重ねた。

驚いて離れようとする彼女の腰に腕を回し引き寄せ、片手で頭を後から鷲掴みにする。

止まらなかった。

止めたくはなかった。

情動のままに、荒く、荒々しく唇を重ね、重ね続けた。

抱きしめた腕から力が抜けていくのを感じる。

気がつけば、彼女に抱きしめられていた。

数分、もっと短い時間だったのかもしれない。

立ったまま、抱き合ったまま過ぎた時間は。

「大丈夫？」

少しばかり冷静さを取り戻し始め、抱え込んでいた手でやさしく髪を撫で上げる。

ユキコの行動に疑問がないわけではないが、何故かなど野暮な台詞を言える場面でもない。

「うん、ちょっとびっくりしたけど」

ちいさな声ではにかみながら微笑み、上気した桜色の頬は耳まで赤い。

初めて、愛おしいと想った。

強く抱きしめる。

抱きしめられる。

今はそれだけが想いを伝える術であった。

過ぎた時間は覚えていない。

「・・・もう帰らなきゃ」

名残惜しそうに少しだけ身を引きユキコは呟いた。

「帰したくはないんだけどね」

泊まっていけとはいえない、キリスト教徒だ。

「節度あるおつきあい」などと柄にもないことを考える余裕はあった。

「しょうがない、今日のところは帰してやろう」

何それ、と腕の中で笑うのはいつもの彼女をもう一度強く抱きしめてから離れる。

「患者さん、入ってこなくてよかったね」

備え付けの鏡で身だしなみを整えながら冷静に指摘された。

玄関の扉が目の前の待合室で抱き合うなどと、確かに大胆なことをしたものである。

「さすがにあの状況は言い訳ができないな」

「変な噂が立つよ、あそこの接骨院の先生、女の子に変なことしてるって」

「変なことって、どんな？」

ニヤニヤと我ながら意地悪な質問を返してみる。

「もう」

顔を赤らめながら、照れくさそうにそっぽを向いた。

少しむくれた顔が女性が一番可愛い。

その為ついからかってしまうのは昔からの悪い癖だ。

「じゃあ今日は帰るね」

靴を履いてから振り返りちいさく手を振る彼女は、返事を待つ間もなく扉を開けると逃げるように外へと踏み出す。

「気をつけて、な」

結局はっきりとした気持ちを聞けずに狐につままれた気分のまま、扉の向こうに消えていく彼女には苦笑いしながらも送り出すことしか出来なかった。

電話番号も聞いていないことに気付いたのはその後だった。

ユキコは患者であり更に宗教家である。

女性に不慣れでも奥手のつもりでもないが、つきあう以前に、抱きつかれたとはいえ半ば強引にキスまでしてしまったのは些か軽はずみであったかもしれない。

後悔はしてないがさすがに軽い背徳感と自責の念は感じている。

何もする気がおこらない。

やることは幾らでもある。

片付け、事務仕事、晩飯、風呂・・・煙草も吸わなければならないが、どれもする気が起きなかった。

椅子から立ち上がる気力も無く、軽い脱力感に思考が鈍るが状況を整理してみる。

いつの間にか惚れられたのだろうか。

家が自営業、それなりにいいところのお嬢さん。両親がキリスト教で彼女も子供の頃からキリスト教。学校もミッション系。今は家の事務仕事の手伝い。

彼女について知っていることといえば会話の中で知りえたそれくらいか。

あと年齢三十三歳、恋人ナシ。

男に免疫のない温室育ちの箱入り娘、といっても娘という歳でもない、三十過ぎればそれなり

の人生経験は積んでいるはずだ。

まさか「結婚しよう」などという言葉を受けたわけではないだろう。

そもそもその件に関しても「宗教」を理由に拒否されていた筈だがどういった心境の変化なのだろうか。

どうにも理解に苦しみ、くだらない推論がいくつも頭の中をまわる。

直接聞くのが手っ取り早い。

カルテを見れば住所も電話番号も分かる。

それでも行動に移そうとは思わなかったのは、何故か今はこの気分のままでいたいと心のどこかで余韻に浸っていたこともある。

結局焦らず、ユキコが再び姿を現すまで待ってみようと考えをまとめた。

結論を出して表のシャッターを下ろしに外へ出ると、顔に冷たいものが当たる。

こんな気分と場面には出来過ぎだ。

見上げた夜空にはイブの夜に相応しい粉雪が舞っていた。

クリスマス・イブの日からその後、結局ユキコは接骨院に一度も姿を見せることはなかった。二十九日の仕事納めの日まで多少の期待を胸に抱きながら過ごしていたが、いつもより忙しい年末の接骨院の患者の中に彼女の姿を見ることはなかった。

鬱憤のたまる状況のなか、それでもやらなければならない大掃除や事務仕事を淡々とこなし、家に帰れば家の用事の手伝いなどで年末は過ぎていく。

慌ただしいままに新しい年を迎えていた。

【 正月は歳神様とやらを迎え祝う神道の行事で、門松・しめ飾り・鏡餅なども歳神を歓迎する為のものである。

歳神とは穀物の神らしく、農耕民族である日本人らしい神だと合点もいく。

もとは氏神の風習らしい初詣は神社・仏閣どちらが正しいのか気になるところだが、神仏混合のお国柄らしくどちらでもいいらしい。

明治時代初期に一応神仏分離の政策があったが、それまでの神道と大乘仏教および祖霊信仰が一体化した神仏習合の信仰の形は今でも慣習として残っているようだ。】

正月休みは三十日から一月三日まで。

祖父母の家ということもあり年始には両親や親戚が集まり賑やかなもので、大人数での酒盛りともなれば休みの間も休めたものではない。

ここのところ酒の席で言われることは大概いつも一緒だ。

祖父や父など男衆からは「そもそも商売とはな・・・」「常に腰をひくく、患者のことを考えて・・・」「こつこつと飽きずにやるから商い（あきない）というのであって・・・」などと、皆会社勤めの人間なのだが商売のやり方や接骨院の経営のやり方をこんこんと説き教えてくれる。

商売について語ってくる人間は会社勤め・サラリーマンが多い。

商売や経営に対し経験は無いがこうあるべきという固定概念でもあるようで、患者でも勤めの人間ほど「商売とは」と言いたがる。

実際に自営業や経営している人間はまず商売云々を人に言わない。

経験があればこそ人に対して商売を語ることに、ましてや職種が違えばアドバイスなど出来るものではないことが分かるものだ。

そうはいつでも祖父として、父として心配しての言葉であれば無下にも出来ず、これは肅々と話は聞かざるを得ないだろうと酒の相手をしながら耳を傾けるふりをする。

片や祖母や母など女衆からは「彼女はできたのか」「もういい歳なんだから」「早く結婚して孫（曾孫）の顔が見たい」などとせっつくように、ねだるように、その手の話をしてくる。

気持ちも分からないでもないが、こればかりは一人でどうにかなるものではなく、これはいつものことながら聞き流すことにする。

まだ彼女ではないが、今の相手がキリスト教徒だと言ったらどんな顔をするだろう。

祖母は一応仏教で、いつだったかある親族の葬式に参列した際、キリスト教式だったことから帰ってきた時には「あんなよそさんの宗教はよく分かん」と納得のいかない表情を作っていた。

母は神様はどれも一緒と、神棚に仏像も置いて拝む神仏習合であるが、さすがに十字架は見たことが無いのでキリスト教にまで寛容かは定かではない。

こうみると、もし結婚したら祖母との同居は厳しそうだ。

取り留めのない話題が続き、気の抜けた相槌を打ち続ける。

軽いストレスを感じながら、かなり膨らんだ胃の腑に酒を流し込んだ。

休み明けというのは大概混み合うもので、正月の不摂生に慣れた身体には些か応えた。

施術の間も胃の辺りはムカつき、二日酔いの頭は動作のたびにふらついていたが、休み明けから三日目ともなればようやく身体も慣れ始めてきたところだった。

「正月の片付けでね、腰をやっちゃったのよ」

五十代、少し賑やかな女性。

押入れの中の物を出し入れしていた最中に傷めたらしい。

体を前に倒すと腰に痛みが走ると言うが、まだ動けない程ではない。

「立ったり座ったりする時にちょっと痛むのよ。歩いてる時はそんなでもないんだけどね」

ベッドに腰をかけた姿勢で陽気に喋る。

懇切丁寧に自分の状態状況を説明しながら、興が乗ってきたのか正月に何をしていた何を食べたなど話は拡がり脱線していく。

放っておけばいつまでも続きそうだ。

「じゃあちょっと腰のほう診させて貰いますね」

適当なところで切り上げ後ろに回る。

服をめくりズボンをずらして腰を出し、前に倒すと痛みの出る部位の周辺を指で押す。

「少し筋肉が張ってますね。これから痛みがきつくなるかもしれませんよ」

思ったよりも腰部の筋肉の緊張がきつい。

急性の腰部捻挫・挫傷で痛みの出方から分類すれば、痛みの強弱はさておき、何かをしたその時に痛みが出る場合と、その時はそれほどではなくても時間の経過とともに悪化する場合とがある。

この場合、筋の緊張具合から後者の可能性が高い。

「そんなに痛いと思わないんだけどね」

そういいながら腰を前に倒したり反ったりする。

それを制して説明を続ける。

「どちらにせよ今日一日はおとなしくしておいてください。マッサージとか家ではしてはいけませんよ。炎症が酷くなりますからね」

手首の捻挫などでも腫れている所を揉んだら余計に腫れる。

腰が今その状態だということを理解して貰わなければならない。

「お風呂はシャワーくらいで、湯船に浸かって温まったりしないでください。あと寝る時はなるべく横向きで寝るようにしてください。」

「私、上向きじゃないと寝れないんだけど」

人間、痛みの軽い時はなかなか素直に聞かない。

「その場合は枕か、タオルケットでも丸めて膝の下にかませてください。軽く膝を曲げた姿勢にしておくとも腰への負担が軽くなりますから」

上向きやうつ伏せなど、股関節と膝関節を真っ直ぐにした状態は意外と腰に負担をかけるので、朝起きた時に痛くて起き上がれないということになりかねない。
「先に電気あてて、あとで腰の歪みだけとっときますので、とりあえず横向きで寝て貰えますか」

午後七時半、外は暗く、おまけに冷え込むともなれば今日の患者もこれで終わりだろうと、電気をあてている間はすることもなく受付の椅子に腰をかけていた。

あれから十日以上経ってもユキコは現れなかった。

施術中、玄関の扉が開くたびに彼女ではないかと期待に胸躍らしていた。

その度に軽い失望を味わうことを繰り返している。

今日も同じ、そう思っていた。

「こんばんは」

不意に扉が開いた。

考えごとの最中でまったく意識が扉に向いてなかった。

我に返って人影に眼をやり、一瞬、言葉に詰まって返事をする。

「こんばんは」

間抜けな表情は仕方ない、思い浮かべていた相手がいきなり現れたらこんな顔だ。

ユキコが立っていた。

「お願いします」

表情が硬い。

少しよそよそしい態度が気になるが、まだ一人他の患者がいるので迂闊なことは話せない。

「用意できましたら、こちらのベッドにお入りください」

ベッドへ案内する。

「お加減はいかがですか？」

なんとなく小芝居じみたバカ丁寧な口調で尋ねる。

「あまり良くはないです」

いろいろ聞きたいことや話したいことがあるが、とりあえず仰向けで寝て貰い電気をあて、もう一人の患者が終わるのを待つことにした。

「何かあればお呼びください」

そうやってカーテンを閉める時まで、視線はそれとなく逸らされていた。

「お大事にしてください」

腰の患者を見送る。

受付終了まであと十分程あるが「受付終了」の札に差し替える。

「おまたせ」

カーテンを開けて声をかけるも返事がない。

「久しぶりだけど調子はどう？」

「首と腰、だいぶ痛いです」

これには答え、起き上がり首の辺りを擦る。

「とりあえず軽くほぐしていこうか」

言いながら状態を診ようと首に手を触れる。

一瞬、体が強張るのを指先に感じた。

「・・・大丈夫か？」

改めて正面から顔を覗き込むが、今度はあからさまに眼を逸らされて軽くショックを受ける。

互いの気まずさと気恥ずかしさが場に漂った。

彼女が今日までどのような想いで過ごしてきたのか、どのような想いで今日来たのかを理解するのが難しい。

一般的にこの歳にもなれば今更「キス」に対して格別に神聖視することもないだろうが、クリスチャンある彼女なら別かもしれない。

「純潔」やら「貞節」など色々ややこしいことも考えるのだろう。

キスが挨拶の西洋で流行のキリスト教とはいえ、日本で挨拶になりえる道理はない。

仏教、キリスト教どちらにおいても未婚の異性間の交流に関しては厳しく律することが多く、程度の差こそあれ、そのような環境で育った彼女にとっては交際の宣言すらしていない相手との接吻がどれほどの事態なのか、深刻なことなのかどうかさえ理解の外だった。

どう接すればいいのか分からない。

それでも今日ここに来たという事実を背中を押され、おどけたように普段の軽口を捻りだした

。「とりあえず治療は真面目にするから触ってもよろしいですか？」

ユキコは表情を緩ませクスリと笑う。

つられて頬が緩む。

ようやく眼が合った。

雰囲気は変わり、それだけで気まずさは消えたような気がした。

「ごめんな、たぶん色々悩ませたんだらうな」

それでも最初に出たのは謝罪だった。

「それは・・・でも、嫌じゃなかったから・・・」

思い出したように、恥じらい頬を赤らめ再び目をそらした姿に胸を撫で下ろす。

「それは良かった」

そうやって背後に回り施術の為に首に手を当てる。

今度は少なくとも拒否の緊張は見られなかった。

年末年始は何をして過ごしていたのかなどと他愛のない会話に一区切りつくと、ユキコは本題とでもいうように語り始め、その改めた口調に思わず気持ちが身構える。

「自分でも分からないの、どうしたいのか」

背後にいる為、表情は見えない。

「相手は同じクリスチャンじゃないと駄目なの、そう決めてたから・・・この間みたいなことも駄目・・・だからもう逢っちゃいけないって思ったし来ちゃいけないって思った」

まるで懺悔のような淡々とした告白に、その悩みの元である本人としてはかける言葉を見つけられずに、ただ聞くことしか出来ない。

「だからもう来ないって決めたの。これ以上先生に会わないって・・・決めてたのに・・・私、何してるんだろうね・・・」

自嘲気味に呟く声に次第に微かな震えが混じり始める。

その表情は容易に想像出来た。

「でも俺は来てくれて嬉しいよ」

施術の手を止め、子供をあやすように右手で頭を撫でる。

「思い詰めさせるようなことをして悪かった。でもいい加減な気持ちでしたんじゃない」

「・・・」

無言で振り向いた眼の端に涙が滲んでいる。

「つきあってくれないか？本当に結婚前提でもいい」

いつからか彼女に本気になっていた。

「嬉しいけど、やっぱり駄目。私は同じクリスチャンの人としか・・・」

予想通りの拒絶、それでもその口調には逆の想いが感じられた。

「じゃあ時間をくれないか？」

可能性に懸けてみる。

「答えは急かさない、治療に来た時は治療に専念して極力おかしな真似はしないようにするから、これからも来てくれないか？」

プラトニックなつきあいを覚悟しなければならないだろう。

それでも何より彼女の想いに少しでも希望に沿った形で応えたかった。

その気持ちが伝わったのか分からない。

それでも心の曇も幾らか晴れたのか嬉しそうに頷く。

「・・・はい」

頷き、上目遣いに見上げるその表情に、やはり思わず抱きしめたくなる衝動に駆られた。

おそらくこれが良くないのだろうと自制はしたものの、代わりに軽口が口をついた。

「もっともキスが「おかしな真似」に入るかどうか」

にやり、と笑ってみせる。

「もう、それじゃ駄目じゃない」

少し怒ったような口調も目は笑っていた。

「とりあえず今後は節度をもって口説くように努力するから安心しておいで」

「でも私、やっぱり相手はクリスチャンじゃないと・・・」

「そのへんもお互い話し合っ理解しようとしてもいいんじゃないか？どっかに落とし処がある

かもしれないし」

黙りこくって、悩み、少し困った表情をつくる。

心の葛藤がそのまま顔に表れるのを見るとつくづく素直だと感心さえしてしまう。

同時に、やはりこれ以上踏み込まないほうが彼女にとっても自分にとってもいいのではないのか、と今更ながらに頭の隅をよぎる。

それは常に頭から離れることのない理性の囁きだ。

それでも踏み込むことを選んだ。

背後から両肩に手をのせ、横顔に想いを伝える。

「好きだよ」

抱きしめながら言いたい台詞も「節度」を約束したばかりでは仕方がない。

「だからどうするか、もう少し考えてくれないか？」

完全に納得したわけではないだろう。

それでも一呼吸おいて彼女は無言で頷く。

頬を桜色に染めて、微かに笑みを浮かべながら。

なんとなく嬉しい気持ちで、再びユキコの頭を撫でる。

「なんだか子供扱いされてるみたい」

一寸拗ねたように、上目づかいに見上げられた目がこちらを向く。

「私のほうがお姉さんなのに・・・」

「精神年齢からいえば妥当な扱いではないでしょうか？」

出来るだけ優しく丁寧に答えてみた。

「もしかしたらキスも初めてだったんじゃないかと心配してたんだ」

もしそうなら半ば強引だっただけにトラウマになってないかと、姿を見せない間、実はかなり心配していた。

「残念でした、それぐらい経験あります」

これはこれで複雑な気分になり対応に困ったが、彼女のほうがそれどころではなかった。

売り言葉に買い言葉、勢いで返した発言に、しまったというように口元を押さえてバツが悪そうにこちらに目を向けた。

「あ、でもそれ以上はしたことないから・・・」

慌てて補足した言葉の意味を途中で気が付いたのか、今度は顔を真っ赤にしてうつむく。

「もうっ」

むくれた横顔が可愛い。

それを見たいが為にかかっていると知ったら怒るだろうか、呆れるだろうか。

追及する気も失せ、この三十過ぎの乙女の言葉に、改めてプラトニックはやむなしと心の内で嘆息する。

それでもそう嫌でもなかった。

二人の関係が少しだけ前進したような雰囲気にながら、嫌がる彼女の頭をもう一度撫で

、改めて施術に専念し始めた。

帰り際、彼女はそっとメモ用紙の紙片を差し出してきた。

「はい」

手に取って見ると携帯電話の番号とメールアドレス。

「それじゃあ、おやすみなさい」

声をかける間もなく彼女は扉の向こうに消えた。

あれからほぼ毎日のようにユキコは「体を治す為」とことさら口にして来ていた。

それもおそらくは、そんな理由づけでもしない限り彼女は接骨院に来ることが出来ないのだろう。

そんな彼女に毎回「好き」だと言葉で気持ちを伝える。

柄ではないのは自覚している。

そもそも過去に交際した相手を学生まで遡っても、このような台詞を面と向かって口にしたことなど皆無に等しい。

好きならキスをして、愛していれば抱きしめた。

言葉にせず行動で気持ちを伝える、身勝手だが男としてはしごく一般的な矜持を持っていた筈だった。

それが行動を制限されるだけでこうも変わるものかと自分でも驚く。

気持ちを伝えるのに言葉を使うのは基本とはいえ、行動を起こす衝動を抑える代わりに語る言葉は、後で思い返せば赤面し、背筋がうすら寒くなるようなくさい台詞ばかりだった。

それでも柄にもない台詞を繰り返していたのは、その時の彼女の照れくさいながらも嬉しそうな表情が対価以上に値するものだったからだろう。

望めるなら彼女の口から同じ言葉を聞きたかった。

自惚れではなく彼女自身が恋愛感情を持っていることは態度で分かるのだが、言葉で表現されたことがない。

「今日も可愛いね、好きだよ」

受付嬢は帰り、他に患者がいなくなったのを見計らって声をかける。

軽佻浮薄な物言いなのは照れ隠しも入っている所為である。

「どこまで本気なんだか」

初めの頃にあった拒否感や抵抗感もなく、今では受け入れ、聞き流し、冗談で返すことも出来るようになっていた。

変わらないのは髪の間から覗く耳が真っ赤に染まるところだ。

「端から端まで本気ですよ。こんなにも僕は真剣なのに」

芝居気たっぷりに返す。

あははと彼女は笑ったあと、少し困惑した表情をつくる。

「どうした？」

こんな表情は大概何かを言い出しかねている時だ。

「あのね、先生・・・ごめんね」

唐突な謝罪に心当たりがない。

「先生がいつも好きって言ってくれるのは嬉しいの。でも・・・」

思い詰めたような真剣な表情に、何かまた深刻な告白でもされるのかと思い緊張が走る。

「私、好きって感情がよく分からないの」

一気に脱力感を感じる。

腰砕けとはこのことだろう。

「先生に会いたいと思うし一緒にいると落ち着くの。でもこれが好きってことなのかよく分からなくて・・・」

今更ながらの中学生、いや小学生のような台詞に眩暈すら感じそうだが、真剣な眼差しで見られると茶化すわけにもいかない。

「やっぱり私、変かな」

自覚はあるようだ。

【 旧約・新約聖書の「約」は神との契約を意味する。人が救われる為に守るべき元の契約が旧約であり、モーゼの十戒などで知られる。

- 1 わたしをおいて、ほかに神があってはならない
- 2 いかなる像もつくってはならない
- 3 神の名をみだりに唱えてはならない
- 4 安息日を心にとめ、これを聖別せよ
- 5 父母を敬え
- 6 殺してはならない
- 7 姦淫してはならない
- 8 盗んではならない
- 9 隣人に関して偽証してはならない
- 10 隣人の家、妻、奴隷、持ち物をほっしてはならない

これが守られるべき契約の代表的なものであるが、その他レビ記などに記される様々な「律法」と呼ばれる決まりごとがある。

イエスがこれに対し完成・成就させる為に唱えたものが新約聖書、決まりを守ることによって救われるのではなくイエスを信じることによって救われるという新しい契約である。

とはいえ新約聖書においても信じるだけでなく、書簡集などには信仰や生活がどうあるべきかが記されているようである。】

十戒の「姦淫してはならない」などのような男女間の規則制限は宗教のお家芸で、その他にも恋愛・結婚観に関する決まりごとは数多く存在している。

そんなキリスト教のなかで、三十数年真面目に励んでいた彼女には本来確固とした「教え」に基づく恋愛の形があるに違いない。

であれば無宗教の相手との口づけや抱擁は容認出来るような行為ではないだろう。

そう考えるとキリスト教の規律に背き逸脱した現状の形が、彼女の恋愛感情の自覚を抑えこみ、鈍らせているのかもしれない。

「あんまり難しく考えないほうがいいんじゃないか？」

口で丸め込むのは簡単なような気がしたが、おそらく彼女は納得しないだろう。

「嫌いな相手にキスされたらあんなに嬉しがってないだろ？」

とりあえず冗談めかして事実を突きつける。

「そうなんだけど」

反論するかと思いきや素直に肯定された。

言ったこっちが照れくさい。

「大丈夫、ちゃんと大人になったら分かるからね」

そういってごまかしながら頭を撫でる。

成長を見守る親の気持ちだ。

「もう大人です」

少しむくれて彼女は答えた。

施術が終わってからの帰り際、ユキコは受付の机の上に放り出してあったアクセサリーに目をとめた。

「それは何？」

カウンター越しに指差したのは銀製の腕輪、バングルだ。

「ホピのシルバーのバングル」

何それ、といった顔で小首をかしげる。

【ホピとはネイティブアメリカンの一部族で、アメリカ大陸最古の住人を自認するホピ族のことである。

彼らの言葉でホピは「平和」を意味し、その生活様式は農耕と祭儀を中心とする。

現在ではある程度の一般社会への迎合があるだろうが、彼らはアリゾナ州北部の居留地やコロラド川沿いのメサと呼ばれる砂漠地帯にそびえる高さ一八〇メートルに及ぶ三つの岩石質の高台の上に住み、その荒涼とした不毛な台地で、彼らは主食であり祭祀に欠かすことの出来ないトウモロコシを主とした農耕をおこなう生活をしているという。

ホピの宗教的な神話や祭祀儀礼は口伝として伝えられる。

最初の世界はトクペラ（無限宇宙）といい、そこには創造主タイオワ以外に何も無い無の世界だった。

やがて無限は有限をはらむ。タイオワはソツクナングを創造し、宇宙を整え生命を造る計画を命じる。

ソツクナングは九つの宇宙を整えた。一つはタイオワ、一つは自分、そして七つの宇宙は後の生命の為である。

その宇宙のひとつに地球と人類を創造する。その後世界を三度造り変える。それぞれ三つの世界は人類に芽生えた邪心によって滅びた。創造主の教えに忠実だった少数の人々が必ず警告を受け救済され、次世界に移された。

そして第四の世界を完全な世界、ツワカキといいこれが今の世界である。】

この世界を造り変える時には火と氷、大洪水によって滅ぼされるくんだりがあり、その過程で人々を混乱させる蛇の姿を持つ者の話もある。

こういった神話は聖書でのノアの方舟や、エデンの蛇などに共通するものが見られる。

また仏教の大日如来や神道の天照大神などのように、神を宇宙や太陽と同一視することは他の宗教・神話にもよくみられる話であり珍しくもない。

様々な神の定義や天地創造の逸話などは各文化や民族の解釈の違いとしてとらえるとする、始まりである最初の神は皆本来同一として考えていいのではないかとさえ思う。

「ホピってのはネイティブアメリカン。その伝統工芸品」

伝統、といってもそれほど古いわけではない。ネイティブアメリカンに銀細工の技術が取り入れられたのは千八百年代半ば、スペイン人からナバホ族に伝えられて他の部族に拡がっていった。

「おもしろい模様だね、かわった造りだし」

手にとって興味深げに幾何学的な模様を観察する。

ホピの銀細工に特徴的な技術に、「オーバーレイ」という技法がある。

オーバーレイとは二枚の銀板を貼りあわせて造る技法で、下の板の貼りあわせる面を黒くいぶし、上に重ねる板をモチーフなどの模様のカッティングして貼りあわせることにより模様の凹凸が強調されエッジの効いた立体的な仕上がりになる技法をいう。

「腕輪の模様がメイズ、首輪のトップがサンフェイスって言うんだけどね」

そう言って白衣の胸元からペンダントトップを取り出す。

メイズは人生や第四の世界で安住の地に辿り着くまでの道程を現し、サンフェイスは太陽で創造主タイオワが地上を見る顔を表すらしい。

由来と柄が気に入って購入したもので宗教を意識して身に着けているわけではないが、どちらかというとな宗教的な意味合いの強いモチーフになる。

キリスト教の他神信仰や偶像崇拜の禁止規定に引っかかる恐れがあるのではないかと、相手のことを思えば考えないわけでもない。

「一応他の神様になるわけだが、その点については大丈夫か？」

嫌悪感のようなものがあるか気になった。

「それは別に、先生がそこまで気にしなくて大丈夫だよ」

言葉の通りさして気にも留めない様子でバングルを手にとって眺め、汚れを見つけたのかご丁寧にティッシュで拭き始めた。

「それでも今度は十字架に替えてみようか」

ペンダントトップを指でつまみながら二十代の頃を思い出す。

シルバーアクセサリーを色々物色し、有名ブランドのクロスのトップのデザインを気に入るも、その時はクリスチャンでもないのに十字架などと思い購入には至らなかった。

「もしかしたらクリスチャンの気持ちが分かるかもしれない」

勿論キリスト教徒になるつもりはない。

見透かされていた。

「んー、形から入ってもね」

もっともな意見だ。

【 仏教には「五戒」がある。

在家、出家をしてない普通の一般的な生活を営んでいる信者に与えられる基礎的な「戒」である。

- 1 不殺生戒
- 2 不妄語戒
- 3 不偷盜戒
- 4 不邪淫戒
- 5 不飲酒戒

これらは守らなくても罰則などは特になく、自発的に守るべきものといった意味合いを持つ。

】

不飲酒戒とは「酒を飲まないようにする」といった意味だろうか。

これでも弱くなったが酒はよく飲むほうである。

例え罰則が無くてもこのような戒めがあるのでは絶対に仏教の信者にはなりたくない、元々なる気も無いが改めて思う。

週末の休日、祖父母と囲む食卓の晩酌で、祖父が一合を飲み終わる頃には一升瓶の半分近くは空けていた。

ほどよく酔いが回ったあとはそのまま布団にもぐりこみたいところだが、祖父母が寝る十時をまわるまでは居間でテレビを見るのに付き合い、簡単な会話やマッサージなどをして過ごす。

年齢三十を過ぎ丸くもなれば、こういった時間も大事なのだろうと漠然と思うようになる。

二人が寝たあとがようやく自分の時間だ。

部屋に戻り独りになると、酔っていることも手伝ってか無性に人恋しい気分になる。

傍らの携帯電話に手を伸ばす。

十回コールして出ないようなら切るつもりが、九回目で出た。

「もしもし」

ユキコの寝ぼけた声、もう寝ていたようだ。

「ごめん、起こした？」

「うん、だいじょうぶ・・・」

時間は午後十時過ぎ、朝が早いらしく、彼女はいつも夜寝る時間は早い。

その為いつもは電話をかける前にメールをしておくのだが、酔っているから気がまわらずに遠慮がなかった。

「どうしたの？」

「なんとなく声が聴きたくなったんだけど、駄目？」

「いいけど・・・酔ってる？」

些かろれつのまわらない口調に気付いたようだ。

「うん、ちょっとだけ。そういえばお酒って飲めるんだっけ？」

一緒に食事に行ったことや飲みに行ったことなど一度もない為、飲食に関する嗜好は聞いたことがない。

キリスト教にはそれなりの制限があったりするのだろうか。

「少しだけなら」

「そうか、なら今度ふたりで飲みに行かないか？」

話のついでに誘ってみる。

「・・・やっぱり人の目があるところはちょっと・・・」

前にも昼食を誘ったことがあるが同じように断られた。

地元であれば街中で知り合いや同じ宗教の人間に出会う確率が高い。

そのような時、今の関係をどのように説明していいのかわからないと言う。

関係性を考えればつきあっているといっても過言ではないように思えるが、未だに恋人とは認めて貰えてないようだ。

「ごめんね、先生」

「いいよ、そのうち堂々とデートできる日が来ることを楽しみにしてるから」

内心落胆はあるものの、前向きでないとやってはいられない。

「そういえば、その宗教的に食べちゃいけないモノとかはあるの？」

一応聞いてみるのは、未定とはいえ将来の食生活に関わることでもある。

「とくには無いよ」

あっさりした答えが返ってきて些か拍子抜けする。

仏教に精進料理あるように、出家者は肉を食べてはいけない、といったイメージがありキリスト教でも何かしら制約があるのではないかと思っていたからだ。

【 インド仏教において飲食に対する制約は五戒の「不飲酒戒」にあるとおり酒に対してだけである。

出家信者は修行の為、托鉢により在家信者から食物を得、在家信者はこの布施により功德を積むことになっており、この為出家信者は差し出されたものは肉でも選り好みすることなく食していた。

ただし「見・聞・疑の三肉」は食べてはいけないとされる。その動物が殺された現場を見た時

、自分の為に殺したと聞かされた時、自分の為に殺された疑いのある時の肉を指す。

肉食禁止は中国あたりから広く定着したようで、日本では六七六年に天武天皇が仏教の精神に基づき肉食禁止の詔を発したことから始まり、その後明治四年に解禁するまでの長くに続いた。こういった歴史からみれば仏教は肉食禁止と誤解するのも無理はない。】

【 聖書の旧約聖書、レビ記には食物に関する細かな禁止事項が記されている。

これが新約聖書、キリスト教になると違うようで、

『「口にはいるものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである」マタイによる福音書 第十五章』

『「すべて外から人の中に入ってくるものは人を汚すことはできないことが分からないのか。それは人の心に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される」「こうしてすべての食べ物は清められる」マルコによる福音書 第七章』

といったイエスの言葉があり、何を食べてもよいことになっている。】

「そうなんだ」

「うん。だから友達とイタリア料理のお店に行ったり、あ、このあいだ父と一緒にうなぎ屋さんに行ってきた・・・」

そう言って最近開店したらしい近所のうなぎ屋の批評を始める。

こんな会話をしている時は普通の女性と変わらない。

そんなことを思いながら、大事なことを聞いてみた。

「肝焼きどうだった？」

「それは知らない、私食べられないから・・・」

クリスチャンにも好き嫌いはあるようだ。

もう三月になる。

状況は何一つ変わらないまま時間だけが緩やかに過ぎていく。

接吻を交わした去年のクリスマス以降、肉体的接触は施術以外では一度もない。

そんなプラトニックな恋愛に意外と馴染んでいるのは妙な気分だった。

それでもこのままでいいとは思わない。

互いの宗教に対する考えは今も平行線のままだ。

良好な関係は互いの領域に踏み込まず、一定の距離を置いているからこそ保っていられることに気付いていないわけはなかった。

毎月第二水曜日の午後を休みにしているのは平日にしか開いていない銀行や郵便局やらでの用事をする為だ。

それでも今日は用事が特に無く、昼からビールでも飲んでのんびり過ごそうかと患者相手に施術をしながら考えていた。

半日で受付終了する日は混み合うもので朝からそれなりに忙しい。

「ベルトはね、いつも着けるようなものじゃないですよ」

このベルトとは腰痛用のベルト、コルセットなどのことである。

腹巻のように腰に巻く、背中側には背骨に沿うように細い鉄板が縫い込まれており、両サイドにあるゴムの副ベルトできつく締め上げると腰への負担がかなり軽減される。

取り外しもマジックテープで簡単だ。

整形外科や接骨院で腰を痛めた時に出されるものだが、説明不足のことが多い。

四十代男性で昨日腰を痛めたとのことだが、触ってみたところ腹筋・背筋がやけに弱そうで、聞いたところ十年以上前にぎっくり腰をやって以来、不安でいつも腰痛用のベルトをしていると言う。

「確かにこのベルトは筋肉の代わりをしてくれるから、着けていれば楽だと思います」

だいぶ痛みも治まってきているようなので施術をしながら説明する。

「ただ着けっ放しだと、自分の筋肉を使わなくなるのでどんどん腰は弱くなっていきます。そうになると腰の骨も変形して神経痛も出やすくなりますよ」

腹周りの筋力の衰えは骨の変形や内臓器官への悪影響を及ぼしやすい。

「そんな説明されなかったから、今までずっと着けてたな」

「まあ、いきなり外して生活するのも不安だと思いますので、仕事以外では外すとか、重いものを持つような時だけ着けるとか徐々に慣らしてみてください」

一通りの処置を終え様子を見ることにする。

「とりあえずこれで今日は終わります。腰のベルトはまだ痛みがある間は、寝る時以外着けるようにしてください」

「お大事にしてください」

最後の患者を見送ると、時計は午後一時をまわり、いい加減腹も空いた。

受付嬢は帰し、シャッターを閉め煙草を吸いに二階に上がるとテーブルの上に放ってあった携帯電話が何か点滅している。

ユキコからメールが来ていた。

今日の午後、空いてますか？

特に用事は無い。

メールを打つ動作が面倒なのでそのまま電話をかける。

「もしもし、何？」

「あ、先生。今日このあと夕方まで時間は空いてる？」

「それは平気だけど」

「行きたいところがあるの」

今まで人目を気にして外で会うのを拒絶していた筈が、どうした風の吹き回しだろう。

「分かった。とりあえず迎えに行くから、家でいいか？」

カルテを見れば住所が分かる。

「家じゃなくて違うところ。先生の車にカーナビは付いてる？」

古いが一応付いている。

自慢じゃないが方向音痴の為、無ければまず目的地に辿り着けない。

「待ち合わせの場所はメールしとくね。先に行って待ってるから」

電話を切るとすぐにメールがきた。

車でおおよそ二十分。

指定された住所の場所は隣町の市営体育館だった。

それ相応に広い敷地は平日の昼ともなると利用者もまばらで閑散としている。

他に周りには工場らしき建物と田んぼが見えるくらいで大したものがあるわけでもない。

彼女はすぐに見つかった。

有料駐車場の前にちょこんと立っている。

寒さの所為か身を縮こませながら、自分の軽自動車はもう中に停めたと助手席に乗り込んで来た。

「また変な場所を待ち合わせにしたね」

「前に何度か来たことがあるの、ここなら知り合いに会うこともないと思って」

やはり人の目は気になるようだ。

「ごめんね、先生。親はまだ何も知らないから家の近所は駄目だし、先生の近所も知り合いばかりで、ここしか思い浮かばなかったの」

ここまで用心しなくてもよさそうな気もするが、それでも接骨院から彼女の家までは二キロも離れていないことを考えれば近場だと人目につきやすいのは間違いなく、そのうえ接骨院の店舗の大家であるツジさんも同じキリスト教の仲間だと聞かされていたことを思えば仕方がないのかもしれない。

「それはいいんだけど、行きたいとこってどこ？」

「あ、森林公園・・・」

聞いたことのない地名の森林公園。

地元でない土地では、未だに市内も把握していない。

場所の見当もつかずに近所か尋ねると首を振る。

それこそ市外はさっぱり分からず、素直に地名をカーナビに入力することにした。

予想到達時間が九十分。

「山の中の国道を抜けていくから一時間くらいだと思うけど、いい？」

「俺はいいよ、デートできるならどこでも」

「デート・・・なのかな？」

ここで首を傾げられるからたまらない。

「違うの？」

「よく分からない」

相変わらずの答えに脱力感を感じつつ、とりあえずアクセルを踏んだ。

中古で買った特に高級感もない三ナンバーのセダンの長所は静粛性と室内の広さくらいだが、今日はその広さが運転席と助手席の間、二人の距離を肘掛が隔てさらに遠くに感じさせていた。

「オートマだから左手が空いてる」

肘掛に載せた左手を軽く振る。

意図は察しているようだが無反応。

「つながない？」

そうやって掌を上にして置いておく。

国道に出るまでは入り組んだ小道を走る為、視線は前を向いたまま、左手はしばらく放置されていた。

躊躇する気配は伝わっている。

ここで恥ずかしがられるとこちらも照れる。

赤の信号で彼女のほうを向き、改めて手を差し出した。

「どうする？」

答えが分かっている聞き方に少しむくれた表情を見せる。

それでもそこは素直に、ユキコは自分の右手を重ねてきた。

考えるまでもなく接骨院以外の場所で会うことは初めてである。

待ち合わせも、ドライブも、手をつなぐことすらも初めてである。

その割にこれといった盛り上がりや新鮮味が無いのはいかなものかとも思うが、過度の期待を持てる相手ではないことからもやむを得ない。

「そういえば仕事は？」

いつもならこの時間は家の仕事を手伝っている筈であった。

「今日は父と母が用事で出掛けて休みなの。帰ってくるのも夜九時過ぎくらいだからその前に帰ればいいし」

言い訳せずに出てこられる状況に偶然今日なっただけらしい。

それでも彼女にしてみれば珍しく思い切った行動だ。

「毎年行ってるところなんだけど一度先生と行って見たかったの。ちょうど時期もいいし」

山や自然が大好きだと彼女は前から話していた。

田舎育ちの身の上としては、わざわざ森林公園などと造られた自然に行くなどは考えたこともないが、こういった相手のあることであれば否応もない。

天気もいいし、絶好の散歩日和だった。

「水曜日はいつも空いてるの？」

今後のことも考え聞いてみた。

「ううん、こんな日は珍しい。今日は仕事の付き合いで行かなきゃいけなかったみたいで母はそれのお供」

「仲良いな。そういえば両親も同じ宗教だったけ」

ふと気になっていたことが口をつく。

「やっぱり親がそうだから結婚相手は同じ宗教限定なのか？」

相手はクリスチャン限定なのは、なんとなくキリスト教だから、で納得していたので理由を聞いたことが無い。

「それもあるのかな」

推奨はされているが戒律などで決められているわけではないとのことだ。

それだけならそこまで拒絶しなくてもよさそうなものだが、話は続き、他にもやはり理由はあった。

クリスチャンとそうでない者との結婚もそう珍しいことではなく、知人にも数人いるそうだが色々問題があるらしい。

当人同士だけでなく嫁姑、親類縁者、結婚は当人だけの問題では済まない。

争うつもりはなくても波風は立ち、形だけとはいえ意に沿わぬ他宗教の慣習に付き合わなければならぬことも多々ある。

結婚後に初めて気付く価値観の違いや相手の本性も有り、後悔しても宗教上の理由から離婚出来ないともなれば慎重になるのも無理はない。

「それでも私、普通の人とつきあったことはあるんだよ」

普通の人、これは勿論無宗教の人間のことで。

告白されての交際はやはり価値観の違いから長く続かなかった。

それだけで済めばまだ良かったが別れを告げたあとに執拗なストーカー行為を受け、恐怖で心的外傷を負った。

今でも少し男の人が怖い、そう言って辛そうに笑う。

そんな背景があれば結婚はおろか交際を躊躇うのも納得せざるを得ず、無理強いなど出来る筈もない。

過去の男に無性に腹ただしさを覚えると同時に、それでも彼女が今隣にいることの意味を考えれば嬉しくもあった。

気長に待とう、そう思いながらもまだ何か言いあぐねているような彼女の表情にどこか不安を覚えていた。

目的地の森林公園に着くと、やはり平日の所為か駐車場の車もまばらだ。

「あんまりゆっくりできるか分からないけど」

時刻は三時をまわっていた。

夕方になれば陽が落ちるのはまだ早い。

「とりあえず行ってみようか」

長袖のTシャツとジーンズ姿に肌寒さを感じて後部座席から取出し羽織ったのは、膝下まであるダボツとした形が気に入って着古している大きめな灰色のワークコートだ。

街中なら少々小汚い格好だが山に入るには問題ない服装だろう。

対照的に車から降りて改めて見る彼女の姿は随分洒落た小綺麗な格好だ

ベージュのーフコートと、その下の薄い藍の足首近くまであるロングスカートはよく似合い、街中であれば申し分ないだろうが山歩きには些か不向きに見える。

「山だと歩きにくくないか？」

「大丈夫、靴はスニーカーだから」

そう言った足元には着ている服には不似合いな年季の入った運動靴を履いている。

まあ本人がよければそれで良しとしよう。

梅は少し遅く、桜にはまだ早い時期だろうか。

それでもこここのところの暖かな日和は木々や草花の芽吹きを誘い、景観に彩りを添える。

造られた自然とはいえ鬱蒼とした木々の合間の木洩れ日や葉を揺らすそよ風を感じれば、そこに郷愁にも似た奇妙な感慨が呼び起こされるような気がした。

緩やかな斜面の歩道を順路通りに、どちらともなく手をつないで歩いていた。

つなぎ方が年甲斐もなく初々しい。

恋人みたいに見えるかな、と彼女は笑う。

その姿が、無理をして明るく振舞っていたように見えたことは気付かないフリをした。

奥へ進むと木立が途切れ、見通しの良い、大きな池が見える開けた場所に出た。

休日ともなれば池のほとりで弁当を食べる親子連れが見られるのだろう、簡素な木製のベンチが景観を損ねない程度に配置されているのを見つけた。

「少し休憩しよう」

屋外のベンチにそのまま座らせるのもいかなものと思うが、ハンカチを持ち歩く習性は残念ならなかった。

おざなりに表面を手で払う。

そう大して綺麗になるわけでもないが気分の問題だ。

「どうぞ」

とりあえずはレディファーストで、続いて横に座る。

周りを見ると人影は無い、そう確認して身を寄せてきたのはユキコからだった。

初めて口づけを交わしたイブの日以来、プラトニックを貫いてきた。

目が合った。

躊躇う理由もなく肩に手をまわし、抱きしめるように身を引き寄せ口づけを交わす。

求め合っていた。

離れ、そして重ねる。

息をするのも忘れるほどに長い、長い間。

不安定だった体勢を変えようと、ベンチに跨る様に座り直し、改めて抱き寄せようと彼女に手を伸ばす。

まわそうとしていた腕が宙で止まった。

顔を上げた彼女は口を一文字に結び、目から涙がこぼれないように耐えていた。

幼子が懸命に泣くのを堪えているように見える。

そのまま抱き寄せ顔を胸に押し当てた。

人の目から隠すように、こんな時大きなワークコートは便利なもので、包み込むように彼女の上半身を覆った。

外界から遮断されたコートの中から微かに嗚咽が漏れる。

「いいよ、泣いとけ」

堪える理由を失い、彼女は堰を切ったように大きな声を上げて泣き始めた。

不器用な泣き方だった。

泣くことに慣れていない泣き方だ。

言葉に出来ない想いを訴えるかのように大きな声で泣いた。

声を聞きつけたのか、少し離れた木々の合間から、路を歩いてきた老夫婦が何かとこちらの様子を窺っているのが視界に入る。

困ったことに、確かに素通りしにくい状況だ。

近寄りかけた老夫婦に、コートの下に彼女を抱きかかえたまま、努めてにこやかに苦笑しながら会釈する。

なんとなく雰囲気を感じてくれたのだろう。

誤解無く理解して頂いたようで「邪魔したね」というように片手を挙げ、無言で立ち去ってくれたのはありがたい。

あとはただユキコの背中を擦ることだけ。

今は他に、胸のなかで嗚咽を繰り返す彼女に出来ることはなかった。

陽が朱く染まり始める頃、ようやくユキコは落ち着きを取り戻した。

「もう大丈夫、ごめんね」

そう言って笑う顔は「クリスチャンであろう」とする顔だ。

結局そうやってぎこちない仮面をまた被る。

それでもそんな彼女がたまらなく愛おしかった。

彼女の髪をかきあげ顔を近づけると、拒否するように一度だけ顔をそむける素振りをする。

抗いきれないのは弱さなのだろうか。

そして唇を重ねる。

また一筋、彼女の頬には涙が流れていた。

帰路につく車の中、距離が近くなったような、遠くなったようなユキコ相手に会話はいつしか途切れ、また彼女を追い詰めるかもしれないことを知りつつ、いつもの質問が口をつく。

どこか焦りがあったのかもしれない。

「やっぱりまだ相手は同じ宗教限定で結婚前提のつきあいしか認められないか？」

資格に結婚が必要なだけならそれは受け入れられる。

障害である宗教に関しては愛さえあれば大丈夫、などと言うつもりは無いが、それでもなんとかなるだろうと前向きに考えていた。

「俺じゃ駄目か？」

ユキコの小さく頷く姿にいつも通りの失望と後悔を抱きながら、やはり納得はいかず、意地になり再び説得を試みていた。

「それでももう一度考えてみてくれないか？俺も理解できるように努力はするつもりではいるから。もしかしたら妥協できるところも見つかるかもしれないだろ」

自分に対する好意以上の、恋慕の感情を彼女が持っていることを確信している。

それだけにこのまま二人の関係性をあやふやなままにしていることにも限界も感じていた。

「どうなのかな」

困ったような、悩むような、何とも言えない表情をつくり思いあぐねながらしばらく沈黙をついていたユキコは、やがて意を決したように口を開いた。

「聖書について・・・聞いてくれる？」

初めての申し出。

これまで「宗教上の理由でできない」ことの説明くらいでしか意図的には宗教について語らなかった彼女であった。

彼女が、いや互いに踏み込むことを恐れ意識して避けていた領域。

「構わんよ」

今でも宗教に興味は無く、勧誘されるつもりも無い。

それでも話を聞けば共感や理解出来るものがあるかもしれず、互いの主義主張に落とし処を見つける為にも対話は必要とは考えていただけに異論は無かった。

何から話そうかとユキコは言葉を選ぶように宙を仰ぐ。

「先生は神様を信じてる？」

「どうだろうな」

本音を言えば信じる以前に興味が無い。

あえて考えるのなら自然崇拜などの事象や物事に対しての擬神化のように、畏怖や感謝の対象として捉えるのであれば「あってもいい」と思う程度である。

少なくとも「救う」「導く」などをお題目にした、人に都合のいい神様の存在は信じない。

それでも今は真剣な語りのユキコ相手に反論し混ぜっ返すことはさすがに憚られ、ここは理解に勤めようと素直に耳を傾ける。

「まずね、見えないものでもきちんと信じることができないといけないと思うの」

『「私達は見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」 コリントの信徒への手紙2』

だから信じなければならない。

「そうか」

「こうやって人が生きていけるのも主がこの世界をお創りになられて、見守ってくださるからで、だから私達はその教えを守っていかなきゃいけないの」

『「心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、隣人を自分のように愛しなさい」 マタイによる福音書22』

だからそうしなければならない。

「そうか」

「聖書はどれくらい古くからあると思う？そういう古い本が世界でもこれだけ広まっているのは、書いてあることが本当に正しいことだからなの」

『「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ・・・」 テモテへの手紙2』

だから信じる事が出来る。

「そうか」

そしてユキコは延々と聖書を語る。

だから信じられる、信じるべきだ、教えは守られるべきだと、それが真実正しいと語る。

頷きながら次第に彼女を遠くに感じていく。

会社帰りの渋滞に巻き込まれたようで車の流れが遅い。

信号待ちの間、熱を帯びた様に語り続けるユキコと目が合った。

「死ぬことで終わりじゃないよ。イエスを信じなかった人達は地獄で永遠に苦しみ、最後まで信じていた人たちだけが救われて天国で永遠に生きていくことが許されるの」

完全に死後の世界がある、信仰に疑いを持たない宗教家の目に、いつの間にか服の下の肌は総毛だった。

「私は・・・先生も救われて欲しい」

向けられた懇願にも似た痛切な願い。

それでも初めて間近に見る、宗教家として聖書を語る彼女の雰囲気を目を逸らさずにいられなかった。

この時点で彼女とはもう本当に終わりにしたほうがいいと思わなかったわけではない。

「神様を信じるってだけじゃ駄目なのかな？」

それでも宗教を差し引いてもまだ、彼女を諦められない往生際の悪さを自覚しながら活路を見い出そうとしている自分がいた。

「まだ聖書は理解できないし入信は無理だ。でもキリスト教の神様を信じて拝むぐらいは努力してみる」

仏教の在家信者のようなもの、出家した者と違いとりたてて宗教活動はせずに自由に日常生活を送るやり方くらいしか思い浮かばない。

宗教の枠組みにのちに入り聖書の教えを守ることは難しいが、拝むくらいなら出来る、精一杯の妥協案だ。

「入信はしなくてもお祈りには付き合うしボランティア活動とかなら参加もする。あとは清く正しく善いことをして、お天道様に恥ずかしくないよう真っ当な生き方をするってことでどうだろうか」

無宗教者にとって、現状では最大限の譲歩のつもりだ。

「それじゃあ駄目なの」

ユキコは首を横に振り、寂しそうに答える。

「その気持ちは本当に嬉しいんだけど・・・」

正しい信仰とは神と聖書に疑いを持たず受け入れ教えを守ることにある。

祈ることも善行も、洗礼を受けクリスチャンになり聖書に基づいたものでなければならない。

でなければ神に認められることはなく救われることも無い。

うつむきながら静かに語るユキコの言葉に、それ以外は認めず妥協を許さぬ揺るぎない意志を感じて頑固なものだと辟易する。

「やっぱり先生には理解できないよね」

否定は出来ずに無言で答えた。

沈黙は続き話題も思いつかないまま、気が付けばカーナビが目的地への接近を伝える。

「結構遅くなったな」

陽が沈み、時計は七時をまわっていた。

市営体育館の敷地は夜間の使用者がある所為か、体育館やグラウンドの照明でそれなりに明るい。

念の為に人目につかないよう照明や街灯の光を避けて、有料駐車場入口近くの暗がりに車を停める。

シートベルトをはずし、大きく一つ深呼吸をしてからユキコは口を開いた。

「先生、私今日でもう終わりにするね」

台本を読むような台詞と作り笑いはぎこちない。

「今日は会う前から決めていたの。最後にするって」

驚きはなかった。

今日の唐突な誘いに予感がなかったわけじゃない。

彼女が最後の思い出作りをしようとしていたことになんとか気付いていた。

ただ気付かない振りをしていただけだった。

もし帰りの車の中で、彼女の宗教の話に理解を見せていたら結果はどうなっていただろう。

今でも考えを変えることが出来ない以上、確かめる術は無い。

「我儘に付き合わせてごめんね」

それでもそう言って寂しそうに笑う彼女に手を伸ばした。

もう一度触れれば、抱きしめれば何とかなるなどと思い上がりもあったかもしれない。

そんな心を見透かしたように少し身を引いて彼女は言葉を続けた。

「もう接骨院にも行かないし電話もしない。勝手なのは分かってる。でもね、もう・・・決めたの。いままで・・・ありがと・・・」

暗がりに浮かぶ表情はいつしか強張り始め、覚悟を決めた一方的な宣言は次第に涙で濡れていた。

「分かったよ」

「ありがとう、今日は楽しかった」

ユキコは助手席のドアを開け、涙を滲ませた顔で最後に笑顔をつくる。

「気をつけて帰れよ」

引き留めることは出来なかった。

「先生も・・・じゃあ」

自分の白い軽自動車に向かう後ろ姿を見送りながら、ようやく一人になった車内で煙草に火をつける。

駐車場の出口で料金を精算して出てきた車が目の前をよぎった。

ガラス越しに彼女と目が合う。

小さく手を振る姿を最後に、ユキコは未練を断ち切るようにアクセルを踏み走り去っていった

。

どこか肩の荷が下りたような気がするの、やはり無理をしていたからかもしれない。

これで終わりならそれもいいと思っている自分もいる。

冷静に状況を判断すればむしろそのほうが互いの為だろう。

案外あっさりとした別れに少しばかりの寂しさが煙とともに車内を満たす。

半ばまできた煙草の火を見つめながらシートにもたれかかると、ニコチンに刺激されて空いた腹がぐうと鳴いた。

ユキコを見送ったあと、家に帰らず接骨院に戻っていた。

出掛ける前に、遅くなることを見越して接骨院に泊ることを祖母に伝えてあったから気が楽だ

。

机の上に出しっぱなしの、多少なりとも理解するつもりで買った三冊のキリスト教解説本が目に入る。

昨日までは面倒ながらも少しずつ読んでいたものだが、終わったことを思えば不要に、無性に邪魔になり、どう処分したものか思案する。

ふと脱ぎ捨ててあったコートからメールの着信音が聞こえたような気がした。

今日はありがとうございます。

先生と一緒にいられて幸せでした。

ずっとこのままの関係でいたいとも思いました。

先生の言葉を素直に受け入れられればどれだけ幸せでしょうか。

それでも私の信じる教えに従えば、一緒にいられないのです。

交際は結婚を前提として、また結婚は同じ神の教えを信仰する者以外考えられないのです

。

自分がこんなにも弱い人間だとは思いませんでした。

先生に会って、話して、触れられると、心がゆらぎます。

その優しさが私を苦しめます。

こんな気持ちではもう会えるはずありません。

今でもあなたを思うたび涙がでます。

先生が愛してくださったことは忘れません。

さようなら。

ユキコからのメールは、無理に距離をおこうとする気持ちが痛いほど伝わる、堅苦しく、ぎこちない文章だった。

分かってはいたが、やはり宗教を理由に別れを言われたことには多少の腹立たしさを感じる。

それでも今この時も思い詰め、泣いているであろう彼女を想えば、仕方がないと自分自身を納得させ自嘲でもするしかない。

分かった。

それでも考えが変わったら会いにおいで。

今もお前が大事なことは変わらない。

当分の間は待ってる。

少し未練がましいだろうか。

後腐れ無い様にも考えたが、僅かばかりでも心変わりを期待していないわけじゃない。無理だろうかと改めて文面を読み返してから送信する。

一時間程待って返信が来ないことから再び終わりを実感した。

それでもいい。

あとはもし心変わりした彼女が来れば、その時考えればいい。

一応振られたことになるのだろうか、そう思うと妙に孤独を感じ、人恋しさが増した。

もう一度携帯電話を開き新たな番号にかける。

「今度の週末、暇か？」

振られた直後に新しい女のあてがあるなどと準備のいいこともなく、約束を取り付けたのは高校の同級生、無論残念なことに男である。

高校には寮があり日本全国各地の人間が寄り集まっていたが、同室で、出身地が自分の父親の実家と同じというこの男と妙に馬が合ったものだった。

卒業後、互いの住処が他県ともなれば疎遠になりがちであったが、その父の実家に移り開業の折からは何かと世話になりっ放しである。

接骨院の店舗改装は全てこの自称建築関係のなんでも屋、ノリヒコの手配だった。

「まあ、こういったワケだ」

五分もかからずに終えた失恋話の間に、ウイスキーグラスになみなみと注いだ互いの日本酒も空となる。

相変わらずペースが早い。

土曜日はいつも通り午前で終了し、患者がいなくなってから丁度のタイミングでノリヒコは姿を見せた。

普段から力仕事に従事する身長百八十センチに体重百二十キロ、その体格に五部刈りのとぼけた顔は、気のいい熊を連想させる。

接骨院の掃除やは明日やるから飯を買いに行こうとさっさと着替えてシャッターを下ろし、スーパーで買い物を済ませ今に至る。

最近ではわざわざ外に飲みに行くのが面倒になり、つまみを買ってきては接骨院の二階で飲み明かすのが通例になっていた。

刺身と惣菜を一メートル四方のテーブル一杯に並べ飲み始めたのが午後二時をまわったところ、やはり昼から飲む酒は旨い。

「なるほど。キリスト教の女の患者を口説こうとして振られたわけか。三十路男の失恋話てのは笑えないねえ」

そうってカカカと笑う。

こういう男だ。

「いかんよ、患者に手えだしたら」

言いたいことを言われるが反論のしようがない。

「少しは慰めようという気は起こらんか？」

「ぜんぜん」

そうって酒が無いぞと空になったグラスを振る。

元より慰めて貰うつもりも無いが、優しさの欠片も無い物言いにとりあえず懨然とした顔を作りながら、傍らの一升瓶を片手で持ちグラスの淵ギリギリまで酒を注いでやる。

今日の日本酒はとある酒造の生酒だ。

【 日本酒にも「生」がある。

一般的な日本酒の場合、醸造した酒を加熱して酵母などを殺菌処理する「火入れ」という工程が二回あり、この工程により酒質が安定し、常温での長期保存が可能となる。

この火入れを一回もしない酒を生酒、本生酒と呼ぶ。

火入れを工程の中で一回だけした酒を、どの過程で火入れしたかによって生貯蔵酒（先生）、生詰酒（後生）と呼ぶ。これらは厳密に言えば「生」ではないが、それに準じたものである。

これらは酵母が生きている為、香りや甘みが非常に高く新鮮な味わいである。

反面、保存に難しく味が変わりやすい。開封前から冷蔵保存は必須であり、開封後も出来るだけ早めに飲みきってしまうほうがよいだろう。

混同しやすいものとして、「原酒」は醪を搾ってから水でアルコール度数を下げる加水調整をおこなっていないもの、「無濾過酒」は濾過せず淡い琥珀色で雑味を残した酒本来の味に近いものなどがある。

例を挙げると「無濾過生原酒」と表記してあるものは濾過、火入れ、加水調整をしていない酒ということになる。】

「しかしいつ来てもここで飲む日本酒は旨いな。こいつも親父さんが送ってくれた奴か？」

酒に関しては無類のこだわりをみせる呑兵衛の我が親父殿は、ちょくちょくお薦めの酒を送ってくれる。

そんな酒の一本であった。

「深い甘みがあって香りもフルーティー、それでいてくどくなく後味もすっきりしとる。うん、いい酒だ。こいつは飲み過ぎちまうな」

分かったような台詞をのたまいながら、二杯目をグラスの半分近くまで一気に空けた。

空いた自分のグラスにも注ぐと鼻孔に鮮烈な香りが漂う。

この「生」の香りと味は酵母菌により短期間で薄れていく為、開封後は最低でも1週間以内と極力早めに飲むように努めている。

だがそんな心配も今日はいらない、まず残らないだろう。

樽の様な体に勢いよく肉や魚を詰め込みながら、ついでのように聞いてくる。

「で、何か落ち込んでるのか？」

「未練はあるけど、落ち込んでるってわけでもないな」

強がっているつもりもなく、言うほど感傷的にもなっていない。

そもそも宗教が理由で振られただけで嫌われたわけではない、あえて言うなら感情の大部分は宗教への腹ただしさが占めていた。

「そうか、泣いてくだでもまかれるんじゃないかと心配だったんだ」

「するか、馬鹿」

酒には記憶を定着させる作用がある、という説がある。

嫌なことを考えながら飲めば忘れるどころか逆に記憶にこびりつくらしい。

やはり酒は楽しく飲まねばならず、旨い酒を目の前にして自棄酒など勿体無いことこの上ない

。

「本当に落ち込んでたら貴様は絶対呼ばん」

そんな時に一緒に飲めばもっと落ち込みそうだ、などと効かないであろう皮の厚さを持つ面にとりあえず毒づく。

「キリスト教ってのはあれだろ？教会行って拝んだり、神父やらシスターがいて、ついでに歌って踊りまくったりする奴。詳しくは知らんけど」

そういえばこいつはアメリカのコメディ映画が好きだった。

前に面白いから見ると言われた讃美歌をロックやソウル調で歌うシスターの映画を思い出した

。

「映画の知識しかないのか、おまえは」

それでも宗教に無関心な一般人の認識など、映画やテレビ、本などのメディアからもたらされる断片的な情報によるもの程度だろう。

特にキリスト教は、仏教や神道のように日常の行事毎に積極的に関わってくるようなものではない。

「その映画にでてくるのは多分カトリックだな。分かるか？カトリック」

本で得たばかりの知識をひけらかす。

【 キリスト教の三大教派にカトリック、プロテスタント、東方正教会がある。

カトリックとはギリシア語を語源として「普遍・公」などの意味を持ち、一般にはローマ教会を中心としたものを指す。

このカトリックの共通原理に行為義認・伝承主義・階位制度がある。

行為義認は善行によって神に義として認められるもの。

伝承主義は、教会はイエス・キリストの神秘体という分身のようなもので、その教会がまずあって「聖書」を聖書とするとの考えから、聖書の解釈は教会でし、聖書以外の神の啓示などとして伝わる教会のつくり定めた「教え」も信仰の対象に含んでいる。

聖職者と平信徒の区別があり、ローマ教皇を首長として司教や司祭、神父やシスターなどの聖職者がいる。ちなみに聖職者は結婚出来ない。

その他に、祈りの対象はキリストとマリア。日曜日にミサを行う。ロザリオを持ち祈りの後には十字を切る。司祭が罪を許す「告解」がある。

プロテスタントは十六世紀、教えを歪め財政確保の為に免罪符を売るなど墮落したカトリックに対する批判により生まれ、語源に「抗議・抵抗」などの意味がある。

このプロテスタントの共通原理は、信仰義認・聖書主義・万人祭司主義である。

信仰義認は、人は善行ではなく、信仰のみによって神から義として認められるという考えである。

聖書主義は、当時のカトリックの伝承主義を否定し、聖書のみを信仰の根拠として解釈を個人に任せる。

万人祭司主義は、聖職者も平信徒も、神の前では等しく祭司であるということを意味して、代表の形で牧師がいる。また牧師は結婚が出来る。

その他に祈りの対象はキリストのみ。ミサは無く礼拝。告解やロザリオは無い。

東方正教会はギリシア正教とも呼ばれ、中東、東欧、ロシアを中心に十八の自立教会からなる連合体である。

日本では馴染みは薄いですが、発生はローマカトリックなどの西方教会と同じ、十一世紀に相互破門し分離した教派であり歴史は古く、ローマカトリックよりも古代教会の姿に近い。】

一口にキリスト教といっても聖書などの解釈によって細かく教派が分かれているようだが、拝む神様は一緒であるのに面倒なことである。

なにしろ信者でない者にとっては一括りに「キリスト教」で大した区別はないものだ。

それでも一般的な「キリスト教」のイメージは大体カトリックになるのだろうか。

「あんな映画みたいなやつなら、まだとっつき易い」

思い出しながら煙草に火をつけ、煙を目一杯吸い込み、溜め息と共に吐き出した。

「いい娘だったんだけどなあ・・・」

「未練があるなら今からでもキリスト教に入信しちまえばいい」

毎度のことながら酔うと出す答えも大雑把だ。

「だからその宗教が受けつけん」

宗教などは神を名目に集団としての権利の行使・既得権の確保・利益の追求やらを行う活動の為に組織されたただの集団に過ぎず、経典の教えとやらは運用を円滑にする為にこじつけて造り

上げられたただの決まりごとに過ぎず、信仰は特権階級意識を持たせ縛りつけるためのただの精神論に過ぎないと、それ以上の感想は持てない。

神はいないとは言わないが、その輪の中で拝むことは違う。

好きな女の話聞いてなお今でも考えが変わらない以上、入信に関して一考の余地も無かった。

「その娘が宗教から足洗うように説得してみたら？」

何度か試みたことがある。

「駄目だな、宗教をやめる意志は欠片もない」

「それじゃあ仕方がねえな、あきらめろ」

決まっていた結論を改めて言われれば苦笑するしかないものだ。

「それに奇跡的に彼女が説得に耳を傾けたとしても環境的に難しいな」

両親も筋金入り、接骨院の店舗の大家を含め周囲一帯にキリスト教のお仲間がいる環境では、今更抜けることなど出来ないだろう。

それこそこの土地を離れることから始めなければならない。

「厄介だな」

「ほんと、困ったもんだ」

完全にお手上げの気分になり、グラスに残った日本酒を一息に飲み干した。

六月に入りとりたてて代わり映えの無い日々が続く。

土曜日は休みの前の日、午前中だけということもありいつもながらの混雑具合だ。

忙しさに追われながらも、午後は事務仕事を片付けるか掃除を先にするか、それともとりあえずは酒でも飲んで寝るかなどと密かに悩みながら愛想よく施術をこなす。

終わった時点での疲れ具合で決めようと呑気に考え、同時にそれぞれの施術の段取りを頭の中で組み立てる。

受付嬢も忙しく動き回っているが、混み合う時には手際が悪いとすぐに手が回らなくなる、人手の足りない零細接骨院の辛いところだ。

何かしらの損傷、捻挫やらで筋や靭帯などを損傷した場合の処置としての基本原則は、安静・冷却・圧迫・挙上（心臓より上に挙げること）の四つが挙げられる。

「冷却」を間違える人は多い。

「今朝、運動してたら手首捻りましてね、湿布貼って冷やしてたんです」

初老の男性、とりあえず受傷直後に冷やすことは知っていたようだが方法が違った。

「湿布に冷やす効果は無いですよ」

きちんと冷やさなかった為か腫れ上がってきている手首を診る。

「でも冷湿布って書いてありましたけど」

確かに表記にも問題があるのかもしれない。

「湿布に温めたり冷やしたりする効果は無いんです。冷やす時は氷できちんと冷やさないといけませんよ」

端的に言えば「冷湿布」は冷たく感じる湿布、「温湿布」は温かく感じる湿布であり、効能に変わりはなく痛みや炎症を抑えるだけだ。

どちらを使うのも本人の気分次第で構わないが、温湿布はカラシチンキなど、かぶれやすい成分が入っているのでお薦めはしない。

「腫れや痛みがある時は湿布も必要ですけど、まず冷やしてあげることが大事です。ですからまず、氷や保冷剤などを使ってしっかり冷やしてください。もちろん凍傷にならない程度にですけど」

【慢性疾患などで温める場合は湿性のもので、風呂などのお湯で温める方法を薦めるが、日中は使い捨てカイロなどでよいだろう。しかしカイロは直接密着させたりすると低温火傷を起しやすいので十分に注意が必要だ。】

もうこの患者で終わり、いつの間にか受付終了の午後一時まであと五分。

手首に電気をあて、保冷剤で冷やしたあと、改めて患部を診る。

まだ動かすと痛そうだが、それほどひどくもないようだ。

あとの処置をどうしようかと考えていると、扉の開く音と受付嬢の愛想のいい挨拶が聞こえた。

どうやら患者が入ってきたらしい。

掃除も含め全て片付き昼飯にありつけるのは三時近くになりそうだと覚悟を決め、とりあえずもうすぐ終わる目の前の患者の処置に専念する。

今日は用事もないとのことで湿布を貼って安静に、患部にまだ熱や痛みを感じるなら氷で冷やすように指示した。

問題は明日少し手を使うとのことで、痛みが引いていなかった場合のことを考えテーピングの方法を覚えておくことにする。

四センチ幅の非伸縮性のテーピングを手首に一周、くるっと巻く。

この時締め付けたり引っ張ったりしないように置く様に貼る、これだけだ。

かぶれやすい体質の人はアンダーラップというテーピングの前に巻いておくものがあるので利用してみるといい。

単純なので一人で出来るのが利点であり、そこそこ痛みが和らぐ程度からそれなりに効果が見られる場合もある。

他には慢性疾患だが親指の腱鞘炎などの痛みも幾らかマシになる。

とにかく動かしていたらいつまでも治らないので、少なくとも痛みがひくまではなんらかの形で固定するのが望ましい。

説明している間に午後一時は越えていた。

ベッドから送り出した患者の会計を済ませた受付嬢が、新たな患者のカルテを持ってくる。

名前を見て宙を仰いだ。

受付嬢には多分時間がかかるから今日は掃除をせずに帰っていいと伝える。

嬉しそうに素早く帰り支度を済ませ裏口から出ていく姿を見送り、待合室を見ると久しぶりに見覚えのある顔がそこにちょこんと座っていた。

「こんにちは」

声をかけると椅子に座ったユキコは複雑な表情でこちらを見上げた。

「ごめんね、遅くに」

「構わんけど、とりあえず治療でいいのかな？」

目を逸らして小さく頷く姿に、未だに気持ちが変わっていないことを強く自覚する。

何を想って来たのか分からない、それでも何かを期待せずにいられなかった。

「ベッドにどうぞ」

そう招き入れベッドに促し、外の表札を「受付終了」の札に替えてくる。

これで今日の「仕事」は終わりだ。

中に戻るとユキコはベッドの端に腰をかけて待っていた。

「最近の調子はどう？」

うつむきあまり視線を合わせないようにする彼女に声をかける。

「うん、まだ痛みがでることも多いけど、なんとか大丈夫」

久しぶりの所為かどこかぎこちない雰囲気のまま、うつ伏せに寝かせて首や腰の状態を診る。

筋の緊張と圧痛の箇所を確認しながら、とりあえずは緊張緩和の為のマッサージを始めた。

「また、来ちゃった」

少しの沈黙のあと、うつ伏せの姿勢の彼女は口を開いた。

「おう」

「・・・迷惑？」

「待ってる、ってメールしたろ。今でもまだ受付期間中だ」

厄介な相手には違いない。

それでもまだ、彼女ことを好きでいた。

その彼女の答えは予想外、ある意味予想通りの答えだった。

「待たれても・・・困る」

相変わらずの報われない言葉。

「先生の考え方、やっぱり私たちの教えに合わないの。根本的に違うもの。幾ら折り合いをつけようとしても無理だと思う。だって先生、頑固だから」

否定をする気も起きずに失望を味わう。

再び現れたことに何らかの心変わりを期待していたが、何度も聞いたことのある台詞でまるで意志が変わっていないようだ。

期待からの落差の所為もあり無性に腹ただしく思えてくる。

「だから結婚とかも考えられないから待っていてくれても意味の無いことなんだよ。だからもう私のことなんか待たないで他の女の子見つけて・・・」

「わざわざそんな話をしに来たのか？」

乱暴に言葉を遮る。

放っておけばいつまでも聞かされる「つきあえない理由」に早々うんざりしていた。

そんな台詞を聞く為に待っていたつもりもない。

「俺は迷惑だとか無駄だとか思っちゃいない。それもお前が嫌なら来なけりゃいいだけの話だ」

感情の制御は出来ずに苛立ちを隠せない。

知らずにどこか突き放した物言いになっていた。

「・・・嫌なわけじゃないけど・・・」

返事は小さな声で聞こえた。

久々の再開をこんな雰囲気にするつもりは無かった。

苛立ちと声を荒げた気不味さに無言のまま施術を続ける。

ユキコが何を考え、何しに来たのか分からない。

彼女と自分の心をもつて余したまま、ようやく出たのは施術の終わりを告げる言葉だった。応じて体を起こし、ベッドの横に腰をかけたユキコがおずおずと口を開いた。

「ごめんなさい」

見上げるように向けられた腫らした目。

下を向いていた施術の間、声を殺して泣いていたのかもしれない。

「もう・・・帰るね」

胸に熱いものが込み上げ、ベッドから降りたユキコの小さな身体を知らず抱きしめていた。

「こんなこと・・・いけないのに」

されるがままに呟く彼女の葛藤が一筋の涙に変わる。

「だけど会えないと辛いのに」

本当に変わってはいない。

未だに感情と宗教の理性の間でユキコの心は揺れ動いている。

天秤の相手は神様だ。

目に見えず、姿の無い、決して手の届かぬただの偶像が彼女の心を縛り付けて離さない。

「もう宗教なんか辞めて俺のところに来い」

たかが宗教に彼女がそこまで拘る理由が見つけられなかった。

「こうやっているとお安心できるし、ずっとこうしていきたい」

想う気持ちは同じだ。

「だったら」

もどかしさで両の腕に力がこもる。

「・・・でも先生を選べない」

腕の中で少しだけ身を引いた彼女の答えは決まっていた。

「私にはキリスト教のほうが大事なの」

抑えられない怒りにも似た感情が身を包む。

彼女か宗教、どちらに向けられたものなのか自分自身分らないまま、それは短絡的に暴力的な衝動を引き起こした。

腕を掴み覆い被さるようにベッドに押し倒す。

「いっそ抱けば踏ん切りでもつくか？」

とまどいながら怯えた顔で、それでも抗おうとする力を力で抑え込む。

「大きい声、出すから・・・」

確かにその気になれば隣近所に声は届くだろう。

それも今はどうでもよかった。

「そうしたけりゃ、すればいい」

信じているなら神にでも祈り救いを求めればいい。決して届かぬ声が、神が何の役にも立たぬ偶像に過ぎないことを理解させるだろう。神などいない、それを思い知るよう、彼女に無力であることを自覚させてやる。

左腕で彼女の両腕の自由を奪うように強く抱きすくめ、右腕で頭を抱え込みそのまま唇を重ねる。

愛を確かめる為の口づけではなかった。

貪るように、息すらさせないように、あたかも屈服させ、服従させるかのような荒々しく暴力的な口づけだった。

腕のなかで、もがき抗う彼女の力が徐々に失われていく。

腕の拘束を緩めても、もう抵抗することはなかった。

唇を離しても、声をあげて助けを呼ぶことも拒絶を言葉にすることもなかった。

ただ、少しだけ悲しそうな顔をしていた。

横たわる彼女から身体を離し、視線を避けるよう傍らに背を向けて腰をかけた。

「悪かった・・・」

出来る筈がない。

一時の衝動に駆られたままこれ以上の行為を行うなど、本気で惚れた相手に出来る筈も無かった。

それでも最低な行為の自覚と後悔に、言い訳にもならない言葉が口をつく。

「頭に血が昇った。ごめん」

起き上がった気配。

乱れた着衣を直す衣擦れの音。

「・・・いいの」

振り向くとユキコの両手は何か祈りを奉げるように胸の前で組まれていた。

気まずい沈黙が流れ、先に口を開いたのはユキコだった。

「穢れてるよね、わたし」

「そこまではしてないだろ」

嫌味を言われた様な気がして、まだ気の昂ぶりが収まっていない所為か、無愛想な声で応じてしまう。

「そうじゃないの」

落ち着いた声で言葉を続ける。

「結婚前にそういう行為は許されることではないし、するつもりは無かった。でも思わなかったわけじゃなかったの、先に結ばれてしまえば何か変わるのかなって」

静かな口調は懺悔でも受けているようだった。

「いつも抱きしめられていた時、それ以上のことも望んでいた気がする。教え通りならもう純潔

なんて言えない」

「「姦淫するなかれ」と言えることあるを汝らきけり。されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懐きて女を見るものは、すでに心のうち姦淫したるなり。・・・」 マタイ伝、山上の垂訓より。

実際していなくても心の中で考えたら姦淫したことになる。

そんな例えの一つに過ぎない話も、彼女の宗教に染まった固い頭には融通の利くことも無く、言葉通りの意味として捉え悩ませていた。

「考えただけで駄目なんだから、私なんかとっくにきれいな身体じゃないよね」

現実には口づけと抱擁。

それだけでも彼女にとっては姦淫として、今迄も自分自身を責めていたのかもしれない。

確かに倫理や道德の観点からみれば特に間違ったことは言っていないのかもしれない。

だがそれは自分を貶め、責める為の教えではない筈だ。

救いの無い彼女の解釈、そうさせる聖書の教えに無性に腹が立ち、爆発した。

「お前はまだ処女だろ」

改めて確認した事実ユキコはたじろぎ、恥ずかしそうに頷く。

「ならお前の純潔は俺が保障してやる」

原因が自分であろうが断言する。

聖書が何を言おうが知ったことではない、彼女の価値は俺が決める。

論理の破綻も構わず、暴論だろうが捲くし立てた。

「例えそうじゃなくても穢れたとかきれいな身体じゃないとか口にするな、俺はそんなこと思いやしない」

彼女の、自分自身を貶めるような台詞を聞きたくなかった。

「だいたい、やろうとしたのは全部俺のほうからだ。おまえは断りきれなかっただけで責任は全て俺にある」

「教え」に縛られた彼女が感じている負い目は、決して負う必要がないことを伝えたかった。

「大丈夫、お前はきれいな身体のままだ」

「それで・・・いいのかな」

迷い、何かに赦しを求めるような目に力強く断言した。

「おう」

その言葉を抛り所にでもするかのように、ユキコは自らの身体を抱きしめ小さく呟いた。

「ありがと」

目が合うと、緊張が緩んだ所為かわけも無く互いに笑みが浮かぶ。

照れくさい雰囲気払拭するように口を開いたのはユキコが先だった。

「でも先生、よく止めれたよね」

トラウマになりかねなかった押し倒した件について、ユキコが普通に話せていることに安堵し

、時間と共に膨れ上がってきた罪悪感を心の隅に追いやる。

「男の人は我慢できないって聞いたけど」

大概この年齢ともなれば耳年増もいいところのようで、経験は無くても知識はあるようだ。

「あれは男が使う言い訳みたいなもの、我慢くらいできるに決まってるだろ」

我慢「できない」のではなく「したくない」と言ったほうが正しい。

「でも続けたほうがよかったか？」

おおきく首を振り、わざとらしく胸の前を手で隠すユキコに苦笑する。

「もう合意の上でしかするつもりはないから心配するな」

「でも私、結婚するまではそういうこと・・・」

「分かってるよ。婚前交渉はナシ、結婚するまで我慢したらいいんだろ？」

宗教の貞操、貞節に対する考え方については嫌いではなかった。

「お前の気が変わって、俺と一緒にいる決心がつくまで待つことにするから安心しろ」

健全な三十代男子にとっては些か酷ともいえる宣言だが仕方がない。

「でもやっぱりキリスト教じゃない先生との結婚は考えられないし、時間を無駄にすることになるよ」

「いいよ、気長に待つだけだ」

再び繰り返される問答にも、今は落ち着きを取り戻し答えていられる。

「だから待たないで、先生にこれ以上迷惑かけられないから」

対照的に、再び本心を押し殺すような言葉と表情のユキコは感情の昂ぶりを見せ始めていた。

「構わんよ」

「もう私のことなんか忘れて・・・」

「でも今日、おまえはここに来ただろ」

矛盾を指摘され、ユキコは言葉に詰まり視線を逸らす。

「惚れた相手と相思相愛なのに諦めるほど、残念ながら人間ができちゃいない」

「でも・・・」

「だからまた少し時間をかけて考えてみないか？」

言葉の意味に返答を躊躇いながら、それでも答えは決まっていると彼女は呟く。

「それならそれでいい。今後来ないならそれがお前の答えと受け入れることにする。俺からは逢いに行かないし連絡もしないようにする」

ユキコと会うこと、彼女の宗教観が変わること、彼女が結婚することを決意すること。

この時から、全てに於いて「待つ」ことを選んだ。

宗教に入信出来ず、彼女を突き放すことが出来ず、関係を断つことが最良であることを理解しながら出来ない。

そんな自身が出来た唯一の「行動」が「待つ」ことだけだった。

「先生はそれでいいの？」

「それなりにお前のことは理解しているつもりなんだ。これからお前がいっぱい悩んで、どうするか答えを出して、そこにどうしても俺の居場所が無いなら諦めるし恨みはせんよ。ただ今はちょこっとだけ希望を持って勝手に待たせてくれればそれでいい」

宗教の絡む意志に無理強いすることはもう出来ず、あとは根気よく時間をかけて気が変わるのを待つより他は無い。

それでも彼女にだけ選択を任せるこの形が、男として無責任かつ卑怯と言われても仕方がないのも自覚している。

だからこそ、せめてその結果には必ず従おうと決意をすることに迷いはなかった。

帰り際の彼女を引き寄せ、別れを惜しみ抱きしめた。

「本当に、ずっとこうしていたい」

応じるように腕の中で彼女が呟く。

「でもいつまでも先生に甘えてばかりじゃいけないよね。頑張って吹っ切って、もう来ないように努力するから」

本気なだけに始末が悪い。

「そっちの方向には努力しなくてもいいんだけどね」

つくづく天秤は宗教に傾いたままだ。

「まあ気が向いたらいつでも来い。ずっと待ってるから」

「・・・ありがとう、先生」

また、いつ会えるのか。

次があるのか。

このまま離したくはないと想いながら、最後にもう一度だけ強く抱きしめて唇を重ねた。

「お見合いしてみる気はない？」

休みの日の昼過ぎ、久しぶりの母親からの電話だった。

友人からの紹介でそれなりにいいところのお嬢さんなんだけど、と期待と好奇心に溢れた声が電話越しから伝わる。

とりあえずやってみたいのだろう。

「ない」

きっぱりと断る。

「そう言わずに一度くらい」

よほど楽しみにしていたのか、あきらかに落胆した声に変わる。

最近はお会い度に孫の顔を早く見たいなどと要求していたが、まさか見合いまでさせようとしていたとは思わなかった。

「今、おつきあいしている人もいないんでしょ？」

難しい質問だ。

確かに正式につきあっていると公言出来ないその相手は、隠す程のことではないが説明がしづらい。

それでも面倒だが、今の内に伝えておけば今後見合いの話などはしなくなるだろうと思い話しておくことに決めた。

「つきあっているとはいえないけど、それらしい相手はいるよ」

「あら、本当？」

予想外だったのか驚きの声をあげる。

声にとことなく楽しげな響きを感じるのは、やはりこの手の話題が好きなのだろう。

「どんな娘なの？」

「まあ、いい娘だよ。ただちょっと問題があって、今後進展があるかどうかは不明で今は様子を見てるところ」

あまり「結婚」などと期待されても困る。

予防線を張りながらの現状報告であるが、その少々思わせぶりな言い方が気になったようだ。

「何？問題って」

「大したことじゃない、ちょっと宗教的な問題で・・・」

「宗教？」

あからさまに声の調子が変わる。

「宗教ってどういうこと？」

詰問するような口調に、やはり「宗教」に関してはまだ伝えるべきではなかったと軽く後悔しながら説明する。

「彼女がキリスト教をやってる。それでどうしようかと考えてるわけで・・・」

「母さん、宗教だけは反対だからね」

日頃は温厚な母親の、そのあからさまな拒絶の物言いに面食らう。

「とくにキリスト教は絶対に嫌」

ある程度の抵抗や反対は覚悟していた。

それでも神棚に仏像も並べて置いて「同じ神様だから」とこだわり無く拝んでいた母が、許容出来ないどころか明確な拒絶の意志を示したのは意外だった。

「何かあった？」

「私の兄さんのこと、覚えてる？」

「ヨシオ」という名の、少し神経質だが人のいい伯父がいたことは覚えている。

子供の頃に母の実家で会ったことを思い出し、同時にもう十数年も会うことなく話題にすら挙がっていない理由を思い出した。

「ああ、確か勘当されたって話じゃなかったか？」

嫁姑の確執だったと思う。

結婚後、長男であったヨシオ伯父は両親と同居していたが、嫁と姑との板挟みに悩み一年程度で家を出た。

知っているのはそれくらいだ。

「その伯父さんがどうかした？」

「兄さん、去年がんで亡くなったんだけどね・・・」

寝耳に水だった。

「聞いてないよ」

「言っていないもの」

結局ヨシオ伯父は両親や他の兄弟と和解すること無く疎遠のまま亡くなり、訃報が届いただけで葬儀に呼ばれることもなかったという。

去年の出来事であり心の整理はついたと「ついで」の様に語ってはいるが、多少の語気の荒さが見え隠れするのはやはり納得はいかずに溜まったものがあるのだろう。

「それで？」

なんとなく察し始めた答えを促す。

「兄さんの奥さんがキリスト教だったの」

それから三十分以上、母の実家で起こったことの顛末を聞くことになる。

母の実家は仏教の、それほど儀式行事にうるさくない宗派であり、日頃やることといえば仏壇の遺影を拝むくらいである。

そんな家庭で育った伯父は無宗教であったが、交際相手がクリスチャンだった為、結婚を機に形だけでもとキリスト教の洗礼を受けた。

キリスト教といってもそれぞれ教派があるが、伯父が入信したそれは一般的にもあまり評判のよくない教派の一つだった。

結婚を機にの同居は金銭的に余裕のない伯父夫婦が老後の世話を名目に親に頼み込んでのことで、これは長男でもあることから他の兄弟も反対する理由は無く、ここまでは何事も無く進んでいたのだが問題はその後であった。

同居直後から嫁は自分の宗教に関して妥協はなく、仏壇を拝むことは拒否、仏教・神道関連の行事すべてに不参加という態度をとっていた。

宗教に対して融通の利かない性格を、それでも好意的に解釈し、それなりに折り合いをつけていこうと初めは両親も寛容であった。

しかし対立が表面化するのは早かった。

宗教活動を理由に家事をおざなりにして昼間外出することが多くなり、また家庭内においても折を見ては執拗に入信への勧誘を行う嫁に辟易した姑がまず我慢の限界を超えた。

家の中で宗教の話や活動を二度とするなという姑に対し、私はキリスト教であるからと態度を変えることなく振舞う嫁は平行線のまま、対立は激化の一途を辿る。

決定的になったのは家の生活費として共有していた、本来は両親の通帳から多額の金銭を引き出し布施や寄付にあてていたことの発覚である。

最終的に舅が同居の解消と勘当を宣言することで一応の決着をみせることになった。

おそらくその当時だろう、頻繁に実家に帰っていた母の姿を思い出す。

「その後もしばらく大変だったのよ」

落ち込む両親の見舞いに行き、愚痴を聞き、時に兄との仲立ちをし、時に金銭的な援助をしたことを母は語る。

それでも関係は最後まで修復しなかったことも。

「もうキリスト教には関わりたくないの」

疲れたように心情を吐露する母に反論する気は起きなかった。

よりもよって身内に最悪の部類に入るモデルケースがあった。

煙草の煙と共に倦怠感が体にまとわりつき、電話を切ってから随分時間が経っていたことに気付く。

考えがまとまらないのは考える気が無い所為だろう。

どうしたものかと布団にもぐり、昼寝を決め込んだ。

翌日、父から短いメールが届いた。

話は聞きました。

母さんのことは気にせず、そちらの思うようにしてください。

母のフォローか応援しているつもりか定かではないが、その心遣いになんともなく面映ゆい気持

ちになった。

自分の意志で「待つ」と宣言した以上、誓いを反古にするつもりはなく週単位、長い時では一ヶ月近く姿を見せないこともあったユキコを辛抱強く待つ日々は続いた。

肚をくくればこの状況にも慣れてきたものだ。

相変わらず数回続けて来ては「もう会わない」と来ることを辞め、その後悩み煩悶し、寂しさの限界を超えた辺りで再び姿を現すことを繰り返す。

言いたいことはあるものの、今ではそんな彼女が微笑ましくもあった。

たまの逢瀬は遠距離恋愛のような昂ぶりを見せ、幾らか心の許した彼女の肉体的接触の許容範囲が抱擁と口づけだけとはいえ、他に患者や受付嬢のいない時などは逢わない時間を埋めるようにと自ら求めてくる姿もあった。

もっともそのことが宗教倫理に縛られた彼女にとってあとで陥る自己嫌悪の対象であることは理解していたが、これは合意の上でもある、宗旨替えのきっかけにでもなればと些か勝手な言い分で放置することにしていた。

土曜日、目のまわる忙しさも受付終了時間の午後一時を過ぎて残る患者はあと二名、受付嬢は帰って一人になったとはいえ充分こなせる人数だが、終わる頃には一時半をまわりそうだ。

施術に取りかかると扉の開く音が患者の追加を知らせた。

受付時間終了後の来院には溜め息の一つもつきたくなるが、こればかりは仕方がないと気分を入れ替え受付に向かう。

そこに五日振りのユキコの姿を見て途端に頬が緩む。

現金なものだと我ながら思う。

久しぶりの再会に早く二人きりになりたい気持ちを抑えながら、手抜きにならないようには気をつけつつ、いつもより手際よく残りの患者を片付けることに勤しんだ。

それでも意外に手間はかかり、最後の患者が帰ったのは予想より遅く一時五十分をまわっていた。

「調子はどう？」

ベッドのカーテンを開けて尋ねると、仰向けで低周波をあてながらまどろむ彼女の疲れた顔が迎えた。

「・・・あんまりよくない、かな」

最近眠れない、と原因を容易に想像出来る悩みを訴える。

交通事故で負った首や腰の痛みも多少出ていることも口にする。

かなり回復してここ最近痛みは治まっていたようだが、それでもやはりムチウチの後遺症は天気などの外的要因や体調・疲れなどでも度々現れる。

加えて体調が悪くても素直に来院出来ない所為か、症状はなかなか治まりにくい。

交通事故の自賠償についてはかなり前に示談し終了した。

一般的に保険会社が定める治療期間は三ヶ月間、まだ症状が残っていればそれ以上の通院も認められる。

症状はまだ残っており保険を使い続けることにも問題はなかったのだが、施術者との間に生まれた特別な感情に倫理的な面で問題でも感じたのかもしれない、ユキコは早々に自ら終了を決め示談に応じ、接骨院としても症状固定、これ以上症状の改善はみられないということで施術を中止とした。

そのため彼女は示談が済んでからは自費で通院するつもりの方だったが、これは断り、以降は保険も使わず施術費は一切受け取っていない。

【 自賠償の慰謝料の計算方法は、

- ① 治療期間 (入院期間+通院期間)
- ② 実治療日数×2

この①と②の日数を比較し、少ないほうの日数に4200円かけた値が慰謝料となる。

こういった計算方法なので症状のある間は可能な限り治療を受けに通院したほうがいい。

下手に我慢などして通院せずに示談してしまえば数万程度の慰謝料になり、その後、例え痛みが残っていると訴えても相手にされず、結局泣き寝入りするしかないことも少なくはない。

ちなみに自賠償の上限は百二十万円。慰謝料・施術費・その他車の修理費や休業補償など諸々合わせての保障額で、この額を超えると各保険会社の計算式に変わり、慰謝料の一日当たりの額が低く計算される。】

会話は少なく、施術を受けながら時折眠りに落ちるユキコ相手に、穏やかな雰囲気のまま小一時間ほど時間は経過した。

「はい、終わり」

あまり色艶のある展開が無かったのが名残惜しいが、どこことなく思い詰めた雰囲気に刺激を与える行為は諦めることにする。

大概このあとの別れ際は、もう来ない、会わないと宣言し、未練を断ち切るかの如く、悲しい顔で立ち去る彼女の後ろ姿を見送るのが常であった。

「ねえ、先生・・・」

今日もそうだろう、と妙に慣れたもので、いい加減腹も減ったこともあり昼飯をどうするか考え始める。

「今日は夕方まで一緒にいたら駄目かな？」

素直に喜べないのは今迄の経緯から、理由ならそれで充分だろう。

「何かあった？」

先立つ「心配」に理由を尋ねる。

「父と母が今日、二人で出掛けて家に誰もいないの。それで家に独りでいるとなんとか不

安で・・・落ち着かないから・・・」

若干、情緒不安定気味な答えが気になるが、それもなんとなく彼女らしい答えに思われ妙に納得してしまう。

どちらにせよ一緒にいる時間が増えることに否応もない。

「分かった、とりあえず昼飯に付き合ってくれ。もう食べた？」

土曜日だがこの時間ならそれほど混んでないだろう、と幾つかの飲食店を思い浮かべる。

「食べてないけど、外はちょっと・・・」

今も二人の関係は周囲に隠したままだ。

一緒にいる姿を人に見られたくない、公にしたいくはない気持ちを尊重すると接骨院の外には出られない。

「じゃあ宅配のピザでいいか？」

頻繁に郵便受けに入っているチラシは普段は鬱陶しく思う時もあるが、こんな時は大いに助かる。

適当に選んで電話で注文をすると一時間はかかると言われた。

「二階に上がれる？」

住居付店舗、二階の六畳と四畳半にはエアコン・テレビ・冷蔵庫など、住もうと思えば住める程度に家電用品も揃っている。

くつろぐつもりなら二階に上がったほうがいい。

上がれるか聞いたのは汚いけど大丈夫か、などの意味ではない。

なにしろ今迄彼女を二階に上げたことは無かった。

加えて彼女の信じるキリスト教の教えでは婚姻前の異性が部屋などの密室で二人だけになってはいけないとされ、やむなくそのような状況になる場合は部屋の扉は必ず開けておく、といった決まりごとがあることを聞いていたからである。

【サムエル記十三章に、仮病を装った兄が誰もいない部屋に妹を見舞いに来させて辱めた話がある。このことから異性と密室で二人きりにならない、相手をその行為に走らせる状況に身を置かないことを聖書は説いている。】

今のところ接骨院の施術室内であれば彼女の許容範囲であった。

拒否されれば味気ないが待合室の椅子か施術用ベッドでも利用して、飯なり何なり時間を過ごせばいいかと考える。

「・・・へんなことしない？」

一瞬、詰まる。

下心も無いことはない。

「まあ、嫌がることはしないつもりだけど」

どの辺りまでの行為が「へんなこと」なのか、一度はっきり聞いてみたい。

「信用してもいい？」

「あんまりしないほうがいいかもしれない」

「・・・」

困った顔がポーズなのか本気なのか、他の相手なら疑うところだ。

この手の冗談が通じない彼女の思った通りの反応に吹き出すのを堪えながら、その子供のような脳ミソの詰まった頭を軽く撫でる。

「嫌がることはしない。約束する」

見栄を張るわけでも見られれば困るものがあるわけでもないが、少し片づけると先に二階に上がり、とりあえずビールの空き缶やらコンビニの弁当の容器など袋に詰め込む。

埃が舞い掃除機も考えたが、疲れた体にさすがにそれは面倒だと思いやめた。

階段を上がって六畳間、入って右手に四畳半、物置代わりに段ボールの山が半分を占めている四畳半に無理矢理ゴミの類を放り込むと足の踏み場が心許無い。

次に問題は六畳間の奥に敷いてある布団だ。

万年床そのままの状態を女性を部屋にあげるのはいかがなものかと一応は考えてみたが、置き場所も無く面倒な為、まとめて二つ折りにして端に追いやる。

見渡せば随分雑な片づけだが、格好つけて取り繕う程の若さも今は無い。

こういった男の部屋に入った経験が少ない、もしくは皆無であるかもしれない彼女の反応が不安に思わないことはなかったが、この際これで良しと諦めることにした。

待合室の椅子で少し緊張した面持ちで座って待つユキコを呼ぶ。

まだ抵抗があるのか、幾らか躊躇いがちに階段を上がりながら「へんなことしない？」と念を押すようにもう一度聞いてくる彼女に苦笑しながら頷き返すと、観念したのかようやく部屋に一步踏み入った。

「意外にきれいにしてるね」

雑然とした部屋を見渡しての一声は、それこそ意外な感想だった。

「弟の部屋なんてもっと散らかってるもの」

免疫はあったようで部屋の汚い弟に心の奥で感謝する。

安心したところで座椅子に座るように勧め、四畳半にある冷蔵庫からビールを取り出しながら聞いてみる。

「飲むか？」

首を横に振り断られる。

自分が飲むことの許可を頂いてから彼女の飲めそうなものを探すが、ビールばかりが冷えている冷蔵庫の中は気の利いたものは無く、それ以外だとペットボトルのお茶しかない。

とりあえずと客用の湯呑に冷たいお茶を注ぎユキコの前に置いてから、満を持して缶ビールで喉を潤した。

考えてみれば二人きりで、向かい合って会話を交わすのは森林公園以来だった。

施術中などは後頭部と話しているようなものだし電話では声だけ、落ち着いて正面から見据えての会話に柄にもなく気恥ずかしさを憶える。

それでもさして盛り上がりがあるわけでもない他愛のない会話は時が経つことを忘れるくらいには十分なもので、ピザの宅配の到着を告げる呼び鈴の音で一時間近く経っていたことに気付かされた。

食事を終える頃、ビールは500の缶を三本空けていた。

人心地つくと急に眠気が襲ってくる。

どうにも瞼が重たい。

食べ残しを冷蔵庫に入れゴミを袋にまとめる、それが限界だった。

「少し寝るからテレビでも見てて」

そうやって席を立つ。

「どこ行くの？」

「下のベッドで寝てくる。何かあったら呼んで」

「・・・待って」

階段を下りかけたところで声をかけられた。

「ここで寝ればいいのに」

そうやって二つ折りにしてあった布団を、ご丁寧にシーツも綺麗に整えて敷きなおす。

そうしてまたちょこんと座椅子に坐り直した。

「一応、気を遣ったんだけどね」

拒否する理由も見当たらず、確かに独りにして放置するのはどうかと思い直し御言葉に甘える

。

何しろ眠いので思考も鈍い。

布団にもぐりこみ、三十分後に目覚ましのアラームをセットした。

「ああ、気にならないからテレビはつけたままでいいよ」

遠慮してテレビを消した彼女の姿を見上げながら、心と欲が出た。

手を伸ばし、すぐ横に座っている彼女の腕を引っ張る。

少し驚いた気配を無視して手を握る。

「おやすみ」

これで満足出来るささやかな欲だ。

握り返された微かな力に、何事もなかったようにテレビをつけた彼女の顔を想像しながら抗えぬ眠りに落ちていった。

寝過ぎた。

普段から遮光カーテンを閉め切っている室内は常に暗いとはいえ、太陽が昇っている間はその隙間から光が洩れている。

その光も今は感じる事が出来ないことを考えれば、少なくとも夕方の六時はまわっているかもしれない。

目覚まし時計は気付かぬうちに消してしまっていたようだ。

まだ酔いが残っている所為か状況の把握がいちいち遅い。

横向きに寝ていたその背側に人の気配を感じたのはしばらく経ってからあとであった。

上体を起こし、振り返る様に体の向きを変える。

「ああ、おはよう・・・」

動いた気配で起きたのか元々寝ていなかったのか、目が開いているのが暗がりでも視認出来る。

行儀よく上向きの姿勢で寝ているユキコに、いまひとつ状況が呑み込めぬまま間抜けな挨拶をした。

「俺はここで寝ててもいいのかな？」

勿論この状況だけなら「誘っている」と判断し、「据膳食わぬは・・・」などと考えるのが妥当だ。

それでも相手が相手なだけに余計な期待はせず不粹とは知りつつ尋ねた問いに、小さな顔きと釘を刺す言葉が続いた。

「へんなことはしたら駄目だからね」

自分からもぐりこんできたわりに、一杯一杯の表情と予防線を張る言葉がいかにも彼女らしく、なんとなく毒気を抜かれた気分になる。

「まあ腕枕はしとこうか」

多少調子に乗って、返事はまたずにユキコの頭を持ち上げ枕を滑り込ませる。

大きめの枕はつめれば二人分の頭をのせることが出来る。

そうして隙間の出来た首の後ろに右腕を差し込むと、彼女は驚き、感心したように呟く。

「腕枕ってこうやってするんだ」

「どうすると思ってた？」

「腕にそのまま頭をのせるのかと思ってた・・・」

「それじゃあ腕がしびれちゃう」

顔を見合わせ小さく笑う。

この状況で目の前にある頬に口づけをしたところで誰が咎めよう。

「！」

驚いた表情で少しだけ身を離す。

「そんなに逃げなくてもいいだろ？今更ほっぺにキスしたくらいで」

「・・・だって・・・いつもと状況が違うし・・・」

明るいところで見れば耳まで真っ赤になっていることだろう。

恥ずかしさととまどいの入り混じったような感情がよく伝わるが嫌がってはいない。

「へんなことしたら駄目なんだからね」

一線を守る為の言葉も、おざなりのように繰り返せば効果は無い。

真面目一筋と思われていたユキコの大胆な行動に、やはり彼女自身も興味や願望はあったのだろうと都合よく解釈する。

待たされた分、他の事情を斟酌する気は無かった。

過度の期待は禁物とはいえ、合意の上でならとりあえずは流れに任せて、嫌がる様ならやめればいいのか、などと安易に考え行動に移る。

体を抱き寄せ、上半身を覆う様に強く抱きしめた。

長袖のシャツとロングスカートの薄手の生地は、その下の体温をやけに感じさせる。

腕から少し緊張が伝わるが、それは決して拒絶の反応ではなかったことが次の行動へと背中を押す。

交わす、というより奪うような口づけに対して真一文字に閉じられていた口元は、その唇へのかい愛撫だけで抗うことなく舌の侵入を許した。

初めてした時に比べれば上達した、それでもどこかぎこちなさの残る舌の動きに愛しさを覚え、貪るように求め弄い、抱きしめる腕には徐々に力が込められる。

柔らかな胸は狭まる二人の間に押し潰され、ユキコは声を漏らす。

絡ませる舌の音が次第に高く響き、まるで理性により抑圧された本能への枷がひとつひとつ解放されるようにその動きもまた荒々しく勢いを増していく。

たかだかキスだけの行為が飽きもせず延々と、執拗に繰り返されていた。

受け身なだけの彼女でもなかった。

手持無沙汰におろしていた細い腕は不慣れさを感じさせながらも抱きつくように、離れないようにと背に手をまわし、唇を離そうとすれば追い離れず、ともすれば自ら舌を絡ませることも厭うこと無く求め、応じた。

混じりあった唾液がのどに絡まったのか、ユキコはたまらず咳き込む。

「大丈夫か？」

返事を期待するのは酷のようで、しばらく落ち着くのを待たなければならなかった。

横向きの姿勢を確保し、手をまわしむせ続ける彼女の背中を擦るが、裾のめくれたシャツはともすれば引っかかり、邪魔になるのがもどかしい。

せっかくなのでいっそのことと遠慮がちに邪魔なシャツの下に手を滑り込ませ、素肌に直接触れて擦ってみた。

施術以外で初めて触る肌の感触に調子に乗り過ぎかとも思ったが、さして抵抗もお咎めもなく、それどころではない彼女は息を整えることにいそしんでいた。

「だって息継ぎのタイミングが分からないから」

落ち着いての第一声がこれだった。

「先生がずうっとしていて離れてくれないから・・・」

「素直に鼻で息できなかつた？」

驚いたように目を開き、一度瞬きをしてから初めて気が付いたようにそう、そうだよ、と呟く。

その姿につくづくこの手のことに関してはお子様であることを思い知らされる。

この状況では父性愛にでも目覚めそうだ。

背を擦ることそのまま「よしよし」とあやしてみる。

「あ、ごめんね、擦っていてくれて。疲れるでしょ？もういいよ、ありがとう」

落ち着きを取り戻すと、やはり背とはいえ素肌に触れられることに恥じらいがでてきたようだった。

「嫌か？」

「そういうわけじゃないけど」

「肌の感触が気持ちいいからこうしていたいけど・・・駄目か？」

堂々と正直に言ってみると「もう」と呆れながら、それでもまんざらではないらしく「別にいいけど・・・」と諦めたように呟く。

易々と許可を与えられると凶に乗るのが男の生態であることを彼女はまだ知らない。

「さて、じゃあ次からはもう少しゆっくりしてみようか」

仕切り直すように、始めは軽くふれるように唇を愛撫し、舌で弄い相手の動きを誘う。

「こんなこと・・・」

そう言いながらも、求めて絡める舌の動きから少しずつ躊躇いとぎこちなさが消えていく。

慣れてきた頃合いを見計らい、背を擦る手の動きに変化を加えてみる。

手の平ではなく五指の指先が軽くふれる程度に背中を這わすと、僅かに身を固く震わせ声を漏らす。

「なんか・・・いやらしい・・・」

「やめる？」

都合の悪い問いには無言で答えるのが彼女だ。

ゆっくりと這わす指の動きに合わせて口づけを繰り返すと次第に息は荒く、唇の隙間から熱い吐息が洩れはじめる。

ゆっくりと足を絡ませ、顔をずらし耳元に口を近づけ息を吹きかけるとびくんと体を震わせる。

腕に抗う気配を感じるも耳の中と裏を交互に舌を這わせ、噛み、弄ぶように責めるとたまりかねてか喘ぐように声を漏らす。

慣れてないわりに、いやその所為か耳と背を責めての過剰ともいえる反応は、絶頂に達するかのように痙攣と弛緩を繰り返し、止まることのない感覚に身を委ねているようだった。

調子に乗って今度は首筋に舌を移す。

「・・・もう・・・これ以上は・・・」

切なげな、か細い声も拒絶の意志がなければ構うことなく、どころか淫虐心を震わせた。

いきおい舌を這わせ、また唇を密着させかるく吸う。

「・・・痕が残ったら困るから駄目だよ・・・」

キスマークは知っていたらしい。

「これくらいなら大丈夫」

こんな時に駄目など逆効果だ。

何か理屈をつけているうちは本当に拒否する気持ちのないことが透けてみえる。

本当に嫌がるのなら止めるつもりも、まだそうではないようだと言われ舌を這わせる。

場違いに明るい曲が鳴り響き、驚き数瞬二人の動きが固まる。

傍らの彼女のバッグから無遠慮に鳴っているのは携帯電話の着信音だった。

行為の背徳感に、何か見つかって咎められた気分になったのは彼女も同じだろう。

「たぶん、母から・・・」

申し訳なさそうに目を伏せる。

着信のメロディーで分かるようだ。

切り上げ時だと判断して身を起こした。

「出たほうがいいだろ」

「・・・うん」

そうやって起きようと身をよじる彼女の動きが止まった。

「・・・先生、どうしよう」

顔だけ向けて泣きそうな声で訴える。

「手がうごかないよお・・・」

ユキコは完全に取り乱していた。

上半身を起こして座らせ、手を動かせるか聞いても首を振るばかりでどうしようと繰り返すばかりであった。

今にも泣きだしそうな勢いであり、携帯電話の着信音がそれに拍車をかける。

「大丈夫、すぐ治してやるから」

意外と冷静でいられるのは、たまに発作を起こしたり、意識を失ったり、呼吸が止まりかけたりする患者を少ないとはいえ診て場馴れしていたことがある。

脈を取り、知覚はあることを確認し、眩暈・吐き気・頭痛の無いことや明瞭に話しが出来ることを確認する。

専門ではないが考えられるのは一時的な心因性のショック症状か過換気症候群だろうか。

【 過換気症候群とは若い女性に多く、精神不安など何らかの原因で過呼吸、息が荒くなるなど過剰に呼吸を行うことにより血中の二酸化炭素が減少し引き起こされる。

症状は呼吸の激しさにより強くなり、息苦しさ・胸部の圧迫感や胸痛・動悸・眩暈・手足や唇のしびれ・痙攣・意識混濁、その他脈が一分間に百を超える頻脈がみられる。

数十分から数時間程度で自然に軽快はする。

緊急的な措置として紙袋を口に当て呼吸を繰り返し自分の息を吸うことにより血中の二酸化炭素濃度を上げる方法もあるが、他の酸素を必要とする傷病の場合は逆効果で死に至ることになりかねず、相手が過換気症候群であることが確定している場合のみ行うことを覚えておきたい。】

両方の肩から先、腕が全く動かさないようだが、他に取り立てて症状の無いことから対応を決め、落ち着かせる為に深呼吸をさせ背後にまわる。

やることは単純だ。

些か乱暴だが強い刺激を与えればいい。

肩井というツボがある。

首と肩関節の真ん中辺り、乳頭を垂直に上る線上の筋肉の盛り上がっている辺り。肩こりなどでよく紹介されるツボである。

両肩の肩井を親指でゆっくりと、強く押す。

「少し痛いけど我慢してくれ」

いつもの施術より強い刺激も、それどころではない為か文句は出ない。

親指の圧を一定に保ち一分ほど経ったところで動くか聞いてみる。

「・・・動く」

まだ思い通りとまではいかないようだが、なんとか指や肘を曲げられるようだ。

「まだこのまま肩を押し続けるから、もう少し我慢して」

その後は数分と経たずして腕は元通り動くようになり、他に異常のないことの確認を終えてひとまず安堵した。

明かりをつけて布団の上に座ったままの彼女を後ろから支えるように抱きしめる。

「お子さまには刺激が強すぎたかな」

「・・・私のほうが年上なんですけど」

むくれてはいるものの、さすがに照れくさいのか耳が真っ赤だ。

目を閉じ、疲れが出たのか身を預けるようにもたれかけてきたユキコの頭を撫で、しばしまどろみ時が過ぎた。

思い出したかのように携帯電話の着信音が再び鳴り始める。

ひとつ大きな深呼吸をして身を起こし、ユキコは躊躇いがちに電話に出た。

会話の間傍らにいるのもどうかと気を遣うと同時に、煙草が恋しくなり、身を離し換気扇の下へと移動した。

数時間ぶりの、騒動後の一服はひとしお旨く感じる。

吸い終わり戻ると、通話も終わり着信履歴を眺めているところだった。

騒動の最中、気付かなかったが何回かかけ直していたらしい。

「母が家に電話してもでないから心配してかけていたみたい」

出掛けていたから、と説明していたのは聞こえていた。

嘘ではないが本当のことは言えないバツの悪さが彼女の表情を曇らせるのを見ると、さすがに良心の呵責を感じる。

「帰りが十時過ぎになるから、ってことだけだったんだけどね」

時計は八時十五分、結構時間が経っていた。

「落ち着いたら送るよ」

横に座ると甘えるように抱きついてきた。

「最後に抱きしめて貰ってもいい？」

遠慮がちに囁く彼女が愛おしく、強く抱きしめ優しく唇を重ねた。

「帰したくないな」

「・・・帰りたくない・・・」

時が許さないことを知りながら、最後にもう一度強く抱きしめた。

翌日昼近くに目覚めるとユキコからメールが届いていた。

冒頭の親とは特に問題が無かったこと、揉み返しで肩が痛むことの報告に続き、綴られた自戒や懺悔の文章に変わらずクリスチャンとして生きる確固とした意志を確認することになる。

さようなら。

また泣きながら綴ったであろう思い詰めた文章は、何度も目にした、耳にした言葉で締めくくられていた。

謝罪と再び待ち続けることを伝える返信をする。

またしばらくは姿を見せることは無いだろう。

雰囲気流されずプラトニックを貫くべきであったと反省し、頭を掻いた。

祖父が入院した。

脳出血だった。

先日、朝の散歩中に転んだことは知っていた。

どう転んだのかだいぶ派手にやらかしたようで、禿頭と顔面の右半分を傷だらけにしていた。

転んだ直後、倒れたまま動けずにいたところを通行人に助けられ、幸い意識はあったことから救急車は呼ばず、とりあえず連れ添われながらも近くの医院で傷の手当だけして貰い帰ってきたと聞いていた。

その二日後、祖父は入院した。

入院を知ったのは夜、仕事を終え接骨院から家に帰ってからだった。

玄関を開けると見覚えのない女物の靴があり、こんな夜遅くに誰だろうと居間に行くと祖母と、久しぶりに会う叔母の姿があった。

父の妹で数年前熟年離婚をし、子供は無く、隣町で気ままに一人暮らしをしている叔母だった。

ことによれば遺産相続などの問題で対立もあり得る間柄ではあるが、家に入る際に継ぐつもりはないと明言していたおかげか、それなりに仲良くやっている。

小遣い稼ぎのパートは時間の融通が利きやすらしく、仕事の無い日は昼間などに度々顔を出し、たまに泊っていくので珍しいことではないが、祖父の居ないことにも気づきどうかしたのかと尋ねる前に叔母から先に口を開いた。

「じいさん、入院したのよ」

それほど驚きはなかった。

祖父の喋り方にろれつがまわっていないことに気づき、脳の障害と考え病院で精密検査を受けるようには勧めていた。

それでも孫の言葉など聞かないとでもいうように「大丈夫」の一点張りの祖父を、二・三日様子を見て、眩暈や吐き気が出る様なら接骨院を休みにして無理矢理にでも病院に連れて行こうと思っていた矢先であったからだ。

叔母によると、転んだことを聞き見舞いに来た午前十時頃、祖父は具合が急に悪くなったと布団で寝ていた。

聞くと吐き気がする、気持ち悪いとの答えにさすがに異常を感じて救急車を呼び、叔母が付き添い市民病院へ搬送、検査の結果即手術、入院となっただけらしい。

叔母は一度家に戻り、着替えなどを用意し、祖母を連れて再び病院へ向かい、それから入院の手続きや何やらで家に帰ってきたのも夕方遅くとのことだった。

「連絡してくれればよかったのに」

事後報告に些か慄然とする。

「あんたの連絡先知らないもの」

接骨院と携帯電話の番号はメモ用紙に書いて祖母に渡してあるはず、と言ってはみたが、見当たらなかったと言われれば仕方がない。

「脳出血とか言ってたけど命に別状は無いみたい」

【 脳出血とはその名の通り脳の血管が破れて出血することで起こる。

祖父の場合は老化により脆くなった血管壁と転倒による外傷が原因だが、一般的に高血圧性によるものが多く、高血圧の影響により脳内の小動脈に発生した小動脈瘤などが日中活動時などになんらかの原因で破れ発症する。

出血部位にもより異なるが、症状は頭痛・嘔吐・麻痺などから始まり時間の経過とともに急速に悪化、意識障害や昏睡になることもある。

今回のように二・三日経ってから症状が出てくる場合や発症から数分・数時間内で進行する場合があります、どちらにせよ異常を感じたら早期の対処が必要となる。

似た言葉で脳梗塞があるが、これは血管内に出来た血の塊である血栓などが脳に行く動脈で詰まり、血管が閉塞・狭窄することにより酸素などの栄養が不足し、脳の組織が壊死などを起こす病変である。

またこういった脳の血管の病気の総称を脳卒中と呼ぶ。

こういった脳血管障害では麻痺や半身不随など損傷した脳の部位により症状が残ることは少なくなく、老人では寝たきりや痴呆にも繋がりがねないといった心配もある。】

「そうか、よかった」

先々は不安だが、とりあえず命を取り留めたことに安堵する。

それにしても祖母はかなり取り乱していたのか、今はすっかり放心状態に陥っていた。

これではこちらのほうが心配だ。

叔母も同じ気持ちのようで今日は泊っていくことにしたようだった。

当分は出来る限り来て祖父の着替えやらの面倒も見るとの言葉に感謝しながら、こんな時自分に嫁でもいたら便利だろうなどと呑気に考える。

こういったことは仕事があると手が回らず、女性に頼らざるを得ない。

とりあえずは自分に出来ることと、祖母に安眠の為にマッサージを始めた。

晩飯の用意をするとは言っていたが、あとは温めるだけでいいようなので祖母と叔母には寝て貰う。

何しろマッサージが終わって夜も十時近い。

台所の灯りをつけ冷蔵庫を開けると、おかずは今日も山盛りで用意されていた。

祖母なりの愛情と好意的に受け止めてはいるものの、やはり自分の健康も考え、残して申し訳ない気持ちを抑えつつ何品かを皿に取り分け、電子レンジで温めながら待つ間に日本酒をちびり

ちびりとやり始める。

このあと、おそらく何らかの障害を抱えるだろう祖父の介護、身の回りの世話やその他日常での問題に対応出来るかを考えると、日中祖母一人では荷が重く、現状ではやはり厳しいものがあり不安を感じる。

僅かな希望は叔母の存在だが、別居ではその対応にも限度はある。

ここに来た当初はそのうち嫁でも貰い、何かあれば任せる、など漠然とごく一般的な対処法を考えていた。

それが未だ嫁どころか恋愛の過程で躓き、足踏みばかりの状態であるから話にならない。

なまじ元気であった祖父母の姿に問題を先送りにしていたこともあり、改めて予想していた筈の現状を迎えると準備不足に代替案さえ無いのが悔やまれる。

酒の所為もあってか、いつか自虐的な気分には陥っていた。

鬱な気持ちに入ったところで電子レンジが温めの終了を告げる。

古い機種は時間がかかり余計なことを考えていけない。

なるようにしかならない。

とりあえず明日は昼の休み時間にでも病院に行く、話はそれからだ。

疲れた体に軽く酔いのまわった頭では大して考えのまとまる筈も無く、飯を詰め込み早々に風呂に入り寝ることを決め込んだ。

翌日、午前の施術を終え昼の休憩時間、接骨院から車でおおよそ十五分の距離にある市民病院へと向かう。

「きてくれたか、ありがとう」

そう迎えた祖父の言葉はろれつがまわらずどこかたどたどしい。

点滴を打つ姿はまだ上体を起こすのは辛いようで、顔だけこちらに向けて笑いかける。

転んだ時に打った顔の傷が痛々しい。

「大丈夫か？大変だったな」

そう言って傍らの椅子に腰をかける。

病室は個室だった。

部屋の空きがないとのことで個室にまわされたらしい。

六畳ほどの部屋にベッドとテレビ、小さな冷蔵庫があるだけの殺風景な部屋で、窓ガラスの面積を多くとり光が差し込む明るい雰囲気であるとはいえ、一人の時などは少し寂しそうだ。

入口を入れてすぐ横にトイレとシャワーが付いており、これは身体の不自由となった祖父にはありがたいことである。

「ばあさんたちがさっきまでおったよ」

医師から色々と説明を受けたあと、しばらくしてから帰ったという。

「シュジュツっていっても、ちょこっとアナあけたくらいだよ」

そうって禿げた頭を見せるように体を動かそうとする。

「そんでアナからチをすいとるカンタンなモンだったらしいわ」

出血の部位や量によっては頭を開くことなく、小さな穴を開け管状の器具を挿入し血腫を吸い出す手術があり、この方法であれば負担も少なく手術の傷の回復も早い。

おそらく頭のガーゼの下には手術痕があるのだろう。

見ている分には痛々しく感じるが、本人は大して痛みも無い所為か気にしていないようである。

九十手前だが、社交性もあり、元気な時などは一日中外に出て喫茶店やらゲートボールなどに興じていた祖父にとって、さすがに独りでいることは退屈だったらしく喋り始めるとろれつが回らないながらも話が尽きることはない。

声に張りのないのは入院したてということもあり心配するほどでもなく、多分に空元気もあるだろうが落ち込む姿を見せないことには感心した。

途中看護師が入ってきて簡単に状態の説明を受け、大事は無さそうとのことで改めて一安心する。

横から大丈夫だといっとろう、と口を挟む祖父が早速小憎らしい。

時刻はいつのまにか三時をまわっていた。

「午後があるから、そろそろ戻るわ」

後ろ髪を引かれながらも席を立つ。

まだ少しは心配だ。

「明日もこれくらいの時間に来るから」

「べつにムリせんでええよ」

また来る、ともう一度言い部屋を出た。

午前の施術が終われば昼飯を喰い、腹がこなれてきたら雑務を済ませ、十五分前後の昼寝をしたあと、用意をして午後の施術を始める。

これが今までの日課だったが、祖父が入院してからは午前が終われば病院へ行き、午後の施術の前に戻ってくるといったパターンに変わった。

昼の行動に制限の無い自営業ならではだが、やはり限られた時間のなかではやれることにも限度はある。

昼飯は病院へ向かう車の運転中に野菜ジュースと握り飯を食べることで済ましているが、問題

は昼寝の時間だ。

長年の習慣で、昼寝をしない日などの午後は眠くて頭が働かない。

【 昼寝は作業効率をアップさせる。

十五分から三十分程度の短い昼寝をすることにより疲れた脳を回復することが出来る。

これが三十分以上であると深い睡眠に入る為、目覚めた後の脳の覚醒に時間がかかり逆効果となるので注意が必要である。

またどうせ長い昼寝をするのであれば、生体のリズムを考えて九十分程度がいいといった説もある。】

病院に行き、やることといえばマッサージだ。

着替えや手続き、生活面などは祖母や叔母、看護師さんに任せているので、それくらいしか出来ることもない。

寝てばかりいると腸の働きが悪くなり栄養の吸収や便通などにも影響がでる為、二日目からは腰を中心に揉みほぐす。

首・肩を控えるのは脳の血管の出血があった為、血行がよくなり再び血管が破れないとも限らないからだが、経過を見ながら上半身のマッサージも行っていった。

ボケ防止も兼ねて一時間ほど会話などもしながらマッサージをし、終わると仕事に戻るといった生活を送る。

そして二週間後、祖父は無事退院の日を迎えた。

些かやり過ぎた件から一ヶ月以上経つ。

音沙汰の無いユキコが気懸かりだったが、退院した祖父の世話に追われ慌ただしいことを理由に、とりあえずは静観を決め込むことにしていた。

そのうち姿を見せるだろうと、そこはまだ楽観的に構えていた。

予想外だったのは久しぶりに接骨院に姿を見せたユキコが女友達と連れ立ってきたことだった。

「お久しぶりです。今日は彼女も一緒にお願ひできますか？」

他人行儀な物言いは隣に人がいる所為か。

どことなしか疲れたような顔をしている割には妙に明るく振舞う彼女に違和感を受けながらも、それなりに元気な姿に安堵する。

相変わらずの来院時間は受付終了間際午前一時の五分前、受付嬢には新しい患者の受付を済ませたら帰るように告げ、他に患者もいないことから先に外の札を「準備中」に替えた。

友達、ケイコは今風の、かしましい女集団のなかに見かけるようなごく一般的なタイプの女性であった。

受付にいる間から傍らのユキコ相手に賑やかに話しかけている。

聞こえてくる会話の端々に表れる単語から同じキリスト教関連の友人、保険証を見ると二つ年下だが、あまり敬語らしい敬語を使っていないところをみると、それなりに親しい間柄のようだった。

気懸かりなのははユキコと自分との関係をケイコがどこまで知っているかである。

周囲に知られることは避けてきた関係も、友人であれば話している可能性は大いにある。

ユキコがまた二人きりになった際、お互いがやり過ぎる行為に走らないように友人を連れて来たことにはなんとなく察していた。

それでも単に誘っただけなのか、頼んでついてきて貰ったのかではニュアンスも違い、勘ぐれば時折こちらを見るケイコの視線に値踏みでもされ、監視されているような気もしないでもない。

とりあえずは「ユキコとは少しだけ仲のいい気のいい接骨院の先生」あたりの路線で接していくのが無難だろうと予防線を張っておくことにした。

「丁度こないだ片づけしてて肩とか腰痛めてたのよ」

問診にケイコが痛いところと理由を答える。

二人ともそれぞれベッドに入って貰い、ユキコには低周波をあて、ケイコの施療に取りかかった。

施療に関する会話はともかくあまり迂闊なことを言えない立場である。

気が重いながらも自然な会話を心がけようなどと考えてはいたが、マッサージを始める頃には隣同士のベッドで遠慮なく雑談を交わし始める二人の姿に、自意識過剰だったかと思い始めていた。

男の側から見れば女性同士の会話などやかましいもの以外何物でもなく、例にもれず二人の口を挟む間もない騒々しい会話には辟易し、少しだけ疎外感を味わう。

内容などは大したことも無く、服や飲食に関するとりとめのない事柄ばかりであったが気になるのはその話し方であった。

自分の知らない、初めて見る「友人と会話するユキコ」はいつもより何オクターブか高い声で、その笑い声も妙に甲高くはしゃいでいる様に聞こえる。

何を舞い上がっているのかと思いながら「先生はどう思う？」などと唐突な問いを苦笑いで受け流し、いつもと違い早く終わらないかと願う自分を自覚した。

騒々しく楽しくない時間は過ぎ、二人が帰ったあとは異様に疲れが噴き出した。

前回の件を考えれば仕方のないことだが、他人行儀で部外者の様な扱いにはストレスも溜まった。

立て続けに煙草を二本吸う。

吸い過ぎた気持ち悪さの混じる倦怠感に自虐的な気分を味わいながら身を浸す。

気持ちを落ち着けるにはもう少し時間が必要のようだった。

夜、携帯電話に着信があった。

「今日ごめんね」

「いいよ分かってる。独りじゃ来にくかったんだろ？」

引きずってはいなかった。

「うん、独りだとなんとなく行きにくかったから」

妙に気怠げな声が気になる。

「疲れてるのか？」

「どうして？」

「随分昼間と違って大人しいから」

「そうかな・・・」

返す言葉もなんとなく気が抜けている。

「・・・そうだね、昼間はあれからもケイコちゃんとずっと話していたから疲れたのかな」

ランチを食べ、買い物に行き、帰ったのは夕方だったらしい。

確かに疲れもするだろう。

納得出来ないことはないが、昼との落差の激しさに何かが胸に引っかかる。

「そんなに昼うるさかった？」

「まあ・・・」

違和感を思い出し言葉を濁らせる。

「友達と話す時はあんな感じだよ」

確かに彼女の日常を知っているわけではなく、以前も聖書の話に熱弁するいつもと違う彼女の姿を目の当たりにして驚いたこともある。

今回も宗教絡みの友人である為の違和感なのだろうか。

まだ引っ掛かることはあったが、昼間のストレスもあり、友人の話に煩わしさを感じて話題の転換を計る。

「それより大丈夫なのか？身体は」

腕が動かなくなるほど取り乱していた、その後が気懸かりだったが、施術中のあの状況ではさすがに聞けなかった。

「あのあとから、今でも他に身体の異常は無かったか？」

「大丈夫、何も無いから心配しないで」

元気だともいうように明るい声を出して答える。

例え何かあってもユキコは心配かけないよう素直に話しはしないだろう。

「それでもごめん、ちょっと調子に乗り過ぎた」

「・・・べつにいやじゃなかったからいいよ・・・」

まるで独り言のように呟く小さな声は、それでもはっきりと耳に届いた。

それから週に一、二度と来るようになったユキコは、終わり間際ではなく午前中なら十時や十一時、午後なら五時や六時と受付嬢や他に患者がいる時間帯を狙って、もしくはケイコと連れ立って接骨院に来るようになった。

あの件以来、乱れた反動で宗教倫理が強く働いてでもいるのか、たまに抱きしめようとする身をやじる様に逃げ「もうそういうことはしません」とけんもほろろの態度で取り付く島もない。

本人としては「施術を受ける為だけに来ている」といった意思表示を示しているようである。

それでも彼女の明るく振舞い親しげな表情を見せるいつも通りの接し方は変わることはなく、しこりを残していないことは救いだった。

また前と変わらぬ関係の日常が始まる、そう思いながらも奇妙な違和感は依然付き纏っていた。

身体の異常も無いと言い、わだかまりも感じられない。

何も心配することなど無いように見えるユキコと接する度に、どこか不安定な感覚に陥る。

どこかおかしい。

それが何なのか気付くのに時間はかからなかった。

もっとも初めのうちは時折見せる挙動不審なおかしな態度も、今までの経緯を合わせてみれば

、照れ、羞恥、背徳感、恋愛感情の裏返しなどが含まれる感情の起伏で片づけていられた。

それでもひと月と時が経つにつれ、その異常性を認識せざるを得ないところまで彼女の症状は進行していた。

躁鬱病、それが今のユキコの症状だと判断する。

【 躁鬱病、今では双極性障害・気分障害などと呼ばれているらしい。

気分が異常に高揚した状態の「躁」と抑うつされた状態の「鬱」が周期性の経過をとり、または混合して表れる精神疾患で、統合失調症と並ぶ二大内因性精神病のひとつである。

遺伝性が高いことが指摘されており、初発年齢は思春期以降で女子に多い。

原因としては家庭や仕事場、人間関係のストレスやショックなどにより引き起こされる。

躁鬱病になりやすいタイプというのもあり、肥満型に多く性格は循環気質であるとしている。

この循環気質とは

1. 社交的・善良・親切・温厚
2. 明朗・ユーモアがある・活発・激しやすい
3. 寡黙・平静・陰鬱・柔和

などがあり、その他に思い込みが激しく頭の切り替えが難しい、真面目で几帳面、組織など整った状態に密着して生活しているなども指摘されている。

躁状態の症状は、興奮・高揚・大声で話す・多幸福感・自己中心・過度の要求・情動不安定・誇大性・我慢出来ないなどの特徴があり、悪化すると支離滅裂な会話・判断力の欠如・金銭感覚の欠落・無秩序・妄想・幻覚などがみられる。

鬱状態の精神的症状は抑うつ気分・興味や喜びの喪失・易刺激性・不安・快感消失症・感情減弱・引きこもり・死へのとらわれ・自己批判・無価値観・罪悪感・悲観・絶望・集中力の欠如・記憶障害・うつむきかげんでゆっくりした動き・涙もろい・悲しげな顔がみられるなどで、身体的症状は不眠または過眠・食欲不振または亢進・体重減少または増加・口や皮膚の乾燥・便秘・動悸・息切れ・眩暈・発熱・冷感などの自律神経の失調を伴う。

治療は気分安定剤などを用いる薬物療法が主体であり、その他再発防止・疾患教育・ストレス管理などを含むカウンセリングも重要である。

予後は良好で自然治癒もあり、正常に戻る時にはほとんど障害を残さないが、一部には鬱の症状が長期にわたり持続する「難治性鬱病」などもある。】

ユキコは接骨院に来るとよく喋った。

大きな声で頬を紅潮させひっきりなしに話しかけてくる。最近は買い物や食事に外へ出ることが多いらしく、友人とどこそこへ行った、何を食べたなどの話をよく聞く。聞いているうちにいつのまにか違うことを話しているなどざらにある。言動が気になることもある。話題のニュースなどに対して批判的・攻撃的な言動が多い。宗教的な話になれば妙に高揚して熱弁をふるう。ドアの開閉が乱暴である。思いつきで即行動に移そうとする。宗教などの活動に積極的で異様な充

実感を持つ。「私は本当はこうじゃない」と理想を多く語る。

躁状態であることを考えるべきだった。

ユキコが姿を見せず、時折電話やメールで連絡をよこす時は大概落ち込んでいた。

疲れたように、眠たげに話す。何もする気が起こらないという。話の最中に突然泣き出す。食欲がない。クリスチャンである自分への批判・罪悪感を独り言のように呟く。理由も無く不安を口にする。出会ってからの記憶に曖昧なところがあり、完全に忘れていることもある。動悸がするようになったという。眠れない時があるという。最近体重が減った、と初めのうちは少し嬉しそうだった。

鬱状態だろう。

奇行が若干目立つものの、元々持ち合わせていた宗教倫理のおかげで極端に無軌道な行動に奔るような事態にはならず済んでいるのは不幸中の幸いだった。

もっともその倫理観が原因の一つでもあるからとりたてて宗教を肯定する気は起らない。

そして原因のもう一つは自分にあることも自覚している。

積み重ねていた二人の関係と想い、引き金になったのは接骨院の二階での行き過ぎた行為かもしれない。

少なくとも今のユキコを真っ当な状態に戻すのであれば、「宗教」と「恋愛」の取捨択一は必須だろう。

すでに「宗教」を選択しているとはいえ彼女は「恋愛」に関しては捨てることが出来ずに先送りしている。

両立を目指していれば少しは前向きな考えも出来ていたかもしれないが、相手が改宗するか関係を断つかの二択しかなかったことが自分自身を追い詰める結果になったのだろう。

厄介なことになったと思う。

突き放し、関係を断つ選択肢を選ぶべきだと理性が囁く。

それでも彼女の病が癒えるのを見守り、彼女の答えを待ち続けることを選んだ。

失いたくはない、身勝手な只の我儘を抑えることが出来ない。

気付けば何よりも深くユキコを愛していた。

躁鬱は周期的に症状を変え、症状の初期を認識したあの友人と共に接骨院を訪れた日からおよそ二ヶ月を経過した。

今は躁状態に入っているようだ。

「ちょっと落ち込んでただけで、もう元気になったから大丈夫」

そうやって目の下にうっすらと隈をつくり、随分とやつれた姿で陽気に笑う。

出会った頃はぎりぎり肥満未満であり、少しふっくらして健康的な印象を持つ彼女であったが

、その頃と比べて三キロ以上は痩せている。

BMI法の計算 標準体重 (kg) = 身長 (m) × 身長 (m) × 22

22を標準、25以上を日本では肥満とする。

お世辞にも健康的とは言い難く病的な翳を色濃く落としていた。

「一度だけでも病院に行ってみたら？」

本人にはまだ「病気」の自覚は無い。

「母にも言われているけど、今はもう元気だし・・・」

躁状態は高揚し、やる気や充実感を感じる為に本人が病気であることを自覚出来ない場合が多い。

鬱の時は「疲れ」や「ちょっと落ち込んだ」程度に考えていたり、悩み過ぎくらいの気持ちでいるのかもしれない、これも病気であるとは考えていないようだ。

それでも初期の頃と違い症状が進行した今、母親も気にしているように素人目にもどこかおかしいと感じるだろう。

「どこか悪いのかもしれないし検査だけでも行っておいで」

内科だろうと外科だろうと、医者なら診れば何かしらの精神的異常に気が付いてくれると期待していた。

そこで精神科なり専門医を薦めて貰えば、ある程度は彼女も納得して行き易くもなるというものだ。

やはり「精神科」だと名前だけで敷居が高い。

「先生がそう言うなら考えてみるけど・・・」

なにしろ専門外であり当事者であるから、確信があるとはいえ「躁鬱病だ」と告知するのは問題があるように思えて未だに言い出せない。

もっとも彼女に言ったとしても躁鬱病を病気と認識せず「そうかな」で終わってしまう可能性も少なくない。

やはりここは専門医を訪ねて診断を受け、病気であることをきちんと受け止め、真摯に向き合って貰うことが望ましい。

「あまり行きたくないな」

「どうして？」

「だって先生以外の人に触られたくないから・・・」

人の心配を余所に呟いた台詞に、少し嬉しい気分になった。

そしてまた暫らくして鬱状態に入ったのか、姿を見せなくなってから一週間、二週間と過ぎて一ヶ月が経った。

気にならないわけがない。

それでも出来ることは、ただ、待つしかなかった。

「先生、今から会いに来てくれる？」

時刻は深夜十一時半、およそ一ヶ月ぶりのユキコからの電話だった。

「眠れなくて...」

鬱状態の暗く、思い詰めたような声。

病状が今尚継続していることを伝えている。

「十五分で行く。着いたら携帯に連絡するから待ってろ」

こんな夜遅くにどうしたのか、不安と心配に駆られ上着だけ羽織り家を出て車を走らせる。

寝静まった年寄りを二人だけにして置いて行くのは気になる。

たまに祖父がベッドから落ちて自分で起き上がれなくなるからだが、最近は体調もいいことだし大丈夫だろうと考えることにした。

慌てていたようで、風呂から出たばかりの髪の毛は濡れて乱れたまま、服は寝間着代わりのスエットと久しぶりの再会にしては何とも格好のつかない姿のまま、煙草を吸うことも忘れアクセルを踏み続けた。

十分程で着いた。

夜はさすがに速く着く。

わりと古そうな住宅街の並びに、一軒家の一階を工務店の事務所に改装してあるのが彼女の実家だ。

家族も寝るのが早いのか、家の灯りは消えている。

携帯電話で着いたことを知らせると、足音を忍ばせながら家の右横、死角になって見えないが勝手口からだろう、彼女は出てきて周りを気にしながら助手席に乗り込んだ。

「ごめんね、わがまま言って」

久しぶりに見たユキコの姿に綺麗だと思った。

鬱状態が続いていたのは見れば分かる。

暗闇のなか街灯に照らされたその貌は最後に会った日と比べても尚一層痩せ、その病状の翳を色濃く落としている。

かつての健康的な澆刺とした姿は見る影もないが、そのことが逆に大人びた淑やかな雰囲気醸し出しているようにも見えていた。

伏せ目がちなその表情はどこか悲しげで、散り際の花のように儂いものの美しさを思わせるなどと言ったら不謹慎だろうか。

「どうしたの？」

見とれていたとは言えない。

何でもないと誤魔化して言葉を濁す。

「ねえ、とりあえず移動しよ」

さすがに家の前では落ち着かないらしく近くの公園へと案内のまま車を走らせた。

「こんなことしたの初めて」

深夜、親に黙って、外出。

学生の頃なら誰でもしたことがある、学生の時くらいにしかないようなことだが、ユキコにとっては冒険にも等しい行為だったようだ。

両親が寝るまで待っていた。

正面から出るには事務所を通らねばならず、玄関にはセンサーがあり入り口を開けるとチャイムが鳴る。

だから裏口からこっそり出てきた。

鬱による低くゆっくりした声は相変わらずだが、その初めての行為にやや興奮気味に抜け出す時の状況を説明した。

町内の公園は街灯も少なく、この時間は時折車が通る程度で完全に人の気配は無い。

それでも一応は人目につかないようにと、街灯から少し離れた路肩に駐車した。

表情が分かる程度の暗い車内にアイドル状態のエンジン音だけが静かに響く。

「随分久しぶりに会うな」

責めたつもりも無い挨拶代りの質問に、躊躇いがちに理由を話し始めたのはしばらくの沈黙のあとだった。

「母にね、行かないようにって言われてたから・・・」

「二人のこと、話したのか？」

申し訳なさそうに小さく頷く。

「こんな相手じゃ親も反対するか」

卑下するつもりもないが好感を持たれていないことは容易に想像がつく。

クリスチャンの両親にしてみれば娘に寄りつく悪魔くらいに思っているもおかしくないだろう。

。

それでもこれから理解して貰えばいいと、口で言う程気にしていない。

「理由はそのことじゃないの」

考えを遮ぎったユキコの訂正に早合点に気付く。

「先生とのことは母もそれほど反対はしてないの。そうじゃなくて今は外に出掛けることを止められているから」

それなりに喜ばしい情報は、続く不可解な理由に打ち消された。

「何かあった？」

切り出した問いに顔を、身体を強張らせる。

再び訪れた沈黙のあと、精一杯の勇気を振り絞ったように彼女は告白した。

「私・・・パニック障害になったの」

【 パニック障害とはその発作を特徴とする精神疾患の一つで、原因としては単純なストレスや気にし過ぎなどといった安易なものではなく「脳内の神経伝達物質の異常」などの説があり医学的に対応が必要な「病気」である。

症状としては「パニック発作」が繰り返し一ヶ月以上持続するもので、「予期不安」や「広場恐怖」を伴う場合がある。

パニック発作とは、①心悸亢進・心臓がドキドキする・心拍数の増加、②発汗、③身震い・手足の震え、④呼吸が速くなる・息苦しい、⑤息が詰まる、⑥胸の痛みまたは不快感、⑦吐き気・腹部の嫌な感じ、⑧めまい・不安定感・頭が軽くなる・ふらつき、⑨非現実感・自分が自分でない感じ、⑩常軌を逸してしまったり狂ってしまうのではないかと感じる、⑪死ぬのではないかと恐れる、⑫しびれ感やうずき感などの知覚異常、⑬寒気またはほてり、などの症状が突然発症するもので、多くの場合は数分から数十分持続して消失する。

予期不安とは、パニック発作がまた起こるのではないかと強く恐れることで、そのことがさらに症状を悪化させることになる。

広場恐怖とは、パニック発作を恐れてすぐ逃げ出せないところや助けがたやすく得られない状況を嫌い、外出や乗り物を回避するようになることを言う。

発作のない時でも自律神経系の症状が持続的に現れるほか、パニック性不安鬱病なども現れる。

パニック性不安鬱病とは、気分の浮き沈みが激しい・理由なく泣く・時に自傷行為・食欲亢進・幾ら寝ても眠い・体が怠い・言葉に敏感に反応して切れたり落ち込む・逸脱行動などの症状が現れる。

一般的な治療法は発作を抑える為の「薬物療法」と、併せて医師が病気に対する理解や対処法を教育する「精神療法」により発作の減少・消失への有効性が確認されている。】

「先生はパニック障害って知ってる？」

「一応はね」

過去、パニック障害の患者を診たことがある。

勿論他の症状での、確か足首の捻挫で来院して施術の途中でたまに発作が起きていた。

「パニック障害なので心配ない、すぐに収まる」と言われ、事実十分前後で発作は収まっていたのだが、さすがに気になり調べたこともあった。

「急に息ができないくらい苦しくなって内科に行ったの。でもそこでは異常は無いって言われて・・・」

精神病の分野はまだ新しく、高齢の医者は習っていないこともあるので見過ごされることがある、とどこかで聞いたことがある。

「母が精神的なものじゃないかって精神科に連れて行ってきて、それでパニック障害って言われて・・・」

初めて病を自覚したことを告白する。

治療は今尚継続中だが症状は変わらず、突然起こる発作に怯える日々が続いていたことをユキ

コは語り、その貌に泣きそうな笑顔をつくった。

「先生だってもう嫌だよね、こんな・・・わたし・・・」

病により変わった日常に、変わるかもしれない関係に、悩みすり減らしていた心は限界に達したかのように声と身体を震わせる。

「だからもう・・・」

「愛してるよ」

次の言葉を聞く必要は無かった。

「大丈夫、今も愛してる」

身を乗り出して唇を、変わらぬ想いを伝えるように重ねた。

「馬鹿な心配はしなくていい。俺から嫌いになるなんてある筈がないだろ？」

伸ばした掌で涙のこぼれ始めた頬に触れる。

その温もりに感情が溶けだすように、溢れ出した涙は止まることはなかった。

「・・・うん・・・うん・・・」

泣きじゃくるユキコの頭を胸に抱き寄せる。

「こうするのも久しぶりだな。遠慮なく泣いとけ」

ようやく落ち着きを取り戻し始めたのか、ユキコはそっと体を起こし恥ずかしそうにうつむいた。

「ダメだね、私。すぐ先生に頼っちゃう」

「そのほうが俺は嬉しいけどね」

肘掛けを間に挟んでの抱擁はさすがに体勢に問題があったようで、腰が痛み運転席で軽く伸びをする。

「大体、根本の原因は俺にあるんだから、こっちが謝らなきゃいけないくらいだ」

原因は宗教と恋愛の板挟みに間違いない。

「どうして？」

そのことに自覚があるのかないのか不思議そうに返される。

「だって俺とのことが原因だろ」

少し考え込む。

ポーズなのか本気なのか、本当に病気と直結して考えたことが無かったのか、その辺りは分からない。

「・・・そうなのかな、分からないけど・・・でもそんなことはないよ、全部私が悪いの。私が弱いからこんなになっただけだから・・・」

「いや、全部俺の責任だからお前は悪くない」

なんとなく意地になって言い張る。

「・・・でも、もし本当にそのことが原因でも先生は普通の人と同じように当たり前の様にしてただけで悪いことはしてないよ。悪いのは流されて「教え」を守らなかった自分自身だから」

例えそうであっても元々人の所為にするような彼女ではなく、そしてまた神様の所為にするこ

とも無かった。

現状を自らの行いの結果として真摯に受け止めている姿がいじらしく、それでもやはり「教え」が彼女を縛っていることには苛立ちを覚える。

「そう言ってくれるのはありがたいけど、責任は俺にしておけ」

本当にそのほうがずっと気が楽だった。

「でも・・・」

「そうしたら「責任とって結婚する」って言えるだろ」

少し呆気にとられ、あはは、何それと声をあげて笑う。

久しぶりに聞く彼女の笑い声。

力は弱く、翳りがあり、切なく感じるものの、それでも尚愛おしかった。

「別に冗談で言ったわけじゃないんだけどね」

拗ねたように trying みる。

「分かってる。先生、ありがとね・・・」

突然だった。

急に苦しそうに表情を変えて胸を押さえる。

「どうした？」

「・・・うん・・・ちょっとはしゃぎ過ぎたかな・・・発作みたい・・・」

パニック障害は突然起きる。

薬を飲めば治まるから、と苦しそうに前屈みの姿勢のまま鞆の中を探るユキコをそのまま、少し離れた自動販売機に飲み物を買いに外に出る。

【 コーヒーなどカフェインを含む飲料は、煙草と共にパニック障害を引き起こす原因になりやすい。

その為カフェインを含むコーヒー・紅茶・緑茶・烏龍茶・ココア・栄養ドリンクの類は除外したほうがいい。

ちなみにチョコレートにもカフェインは入っている。】

好みは考えず、結局オレンジジュースを買って車に戻る。

飲み物無しでも薬は飲めたらしいが、とりあえず二口ほど口をつけた彼女を、シートを倒して姿勢を横向きに寝かせた。

抱えるように手を伸ばし背中を擦る。

パニック障害の発作に効果があるのかは不明だが、他に出来ることがあるわけでもなく、何もしないよりマシだろう。

十分前後で発作は治まった。

分かってはいるものの、初めて見る彼女の発作の苦しげな表情に改めて罪悪感を呼び覚まされ、彼女とは別の意味で胸は苦しく、その時間を随分と長く感じさせていた。

発作が起こるのが怖くて外出はあまりしなくなった。

キリスト教の集まりにもあまり出ていない。

家業の事務仕事も自分の部屋でやれる範囲でしている。

日に日に得体のしれない不安や恐怖は増大し、夜発作が起き眠れないことも多い。

現状をぼつぼつと説明する。

まだ胸の動悸が治まらないのか、時折胸を押さえて表情を歪める。

「今日も寝ようとしたら発作が起きたの。それからずっと不安な気持ちで、落ち着かなくて・
・ずっと我慢していたけど、そうしたらどうしても先生に会いたくなって」

顔を上げ、そして涙をこぼした。

「もう会わないようにしようって決めてたのに・
・変だよ、やっぱり逢うとほっと
する・
・」

「ごめんな」

何に対して謝っているのか自分でもよく分からない。

たぶん全部に、なのだろう。

「ごめん」

かける言葉が見つからず、彼女にとっての元凶であることを十分に自覚しながら馬鹿みたいに
同じ言葉を繰り返す。

「ううん、こっちこそごめんね、勝手なことばかり言って」

「
・
・
・もっと我儘になってくれたほうがいい・
・必要になったらいつでも呼べ」

それでも結局は同じような台詞になる。

ユキコは何かを言いかけ、「うん」と一言だけ答えた。

また疲れたのか、休ませてと断りを入れたユキコは身体をシートに預けた。

その手を握り、同じようにシートにもたれ車の天井を見上げる。

手の温もりに穏やかな時間が流れ、しばし微睡む。

静寂は携帯電話の着信音で破られた。

「
・
・
・母からだ・
・」

ゆっくり起き上がると鞆の中から携帯電話を取り出し、バツの悪そうな顔で電話に出る。

「母が心配して私の部屋を覗いたら、居ないから驚いたみたい」

電話を切ると意外に落ち着いた声で説明を始める。

夜中の発作は頻繁に起こる為、親としても心配なのだろう、何かにつけてはこまめに様子を見
に来ていたらしい。

困ったことにそれを知りながら夜抜け出すことに慣れていない彼女は、布団の中に毛布やら丸
めて寝ている様に偽装することを怠ったようである。

「ごめんね。もう帰らないと・
・」

「このまま二人で遠くに逃げる？」

このまましがらみを捨て、誰も知らない場所にでも行けば何か変わることが出来るかもしれない。

「・・・できたらいいな」

呟いた彼女も同じ気持ちだったのかもしれない。

出来る筈もない提案にお互い目を合わせ寂しそうに笑い、そして車を彼女の家へと走らせた。

玄関は灯りをつけず、母親は中でひっそりとユキコの帰りを待っているようだった。

箱入り娘の夜遊びはさすがにご近所への体裁もあろうことで、目立たぬようにするのは仕方がないことだろう。

「謝りに行きたいのだが」

一応申し出ては見たものの、聞きに行ったユキコの口から母はもう遅いし寝間着だからと断られたことを伝えられる。

案外会いたくないだけかもしれないが、何しろこれで親の好感度は下がるだけ下がったに違いない。

「必要になったら我慢せず呼べよ」

別れ際の彼女への言葉はそれが精一杯だった。

【 パニック障害の人の接し方については、まず「病気」であることを認識すること。「気の持ちよう」などの精神論は論外であり、「症状」として捉えることが必要になる。

他人の言葉や態度に敏感になりやすい為言動には注意を払い、常に「安心」を与えるように配慮することが必要である。外出などでも不安を感じるのであるから付き添うことにより安心させることも出来るだろう。

発作時においては周囲は必要以上に騒ぎ立てないこと。本人が一番不安定な状態であり、周りの反応によりその不安や恐怖が増長し悪化する恐れがあるからだ。そばに付添い、体の一部に触れ「安心」であることを強調するのが望ましい。

精神病患者に対しては「励ます」ことも注意しなければならない。「がんばれ」などは言うてはいけない言葉として代表的だが、これは本人が努力し病気を克服しようと頑張っていることを忘れてはならず、そこへさらに過度のプレッシャーを与えることになり逆効果となるからだ。すくなくとも周囲は気長に回復を待つ余裕を持たなければならないだろう。】

ユキコに対する気持ちは変わらずにいるとはいえ、今後の対応にはそれなりの注意を払わなければならないのは確かだろう。

問題なのは彼女の病気の原因、克服すべき対象が自分であることだ。

仮に病気の回復を望み彼女との関係を断ったとしても、回復はおろかそれが原因で孤独により不安や恐怖が増大し、症状の悪化を招くとも限らず躊躇われる手段である。

またその場合は本来彼女の拠り所である宗教に関しても、会うことが無かった長い間、日常の

傍らにありながら症状の回復や精神の安定に何の役にも立っていなかったようでありあまり当てにはならない。

かといって現状の維持が徒に症状を長引かせることも考えれば、このままでいいとも考えてられない。

とにかくこれからは、これ以上の進展は望んではいけない。

精神が不安定な今、下手に関係を深めようとすることは弱みにつけこむようで自分自身も納得がいかず、例え求められても歯止めを利かすのが男の役割だろう。

何が正しく最良なのかは分からないが、それでも結局は今の関係を保ち続けることを選んだ。

以前と変わらず必要と求められれば応じるだけ。

そして新たにユキコが完治するまで「待つ」意志を固めた。

差し当たっては接骨院に行く時は必ず母親に言ってから行く。

黙って抜け出されるよりはいいからと、両親とはあれからそんな処で話は落ち着いたようである。

親として内心は行かせたくはないだろうが、ユキコの病気から来ているであろう「不安感」や「孤独感」を考えると首を縦に振らざるを得なかったようだった。

そんな彼女は相変わらず名目は「施術を受ける」為に、最近はまだ週に一、二回のペースで通っている。

周囲の宗教仲間には二人の関係は秘密のままだが、親には本当のことを言えたこともあり以前の追い詰められたような表情も幾らか柔らかくなった気がする。

とはいえ「先生とは結婚できないよ」「早く先生に頼らないで生きていけるように頑張るね」などとこれは相変わらずであった。

それでも他人の様に平静を装いながらも来る彼女に、今のところは頼られ、愛されているのは間違いないだろうと自惚れている。

勿論こちらが愛していることに変わりはないが、最近では保護的な父性愛にも近い感情で接しているような気がしないでもない。

日曜日の昼飯時。

「昨日は随分遅かったみたいだな」

そう言って祖父は好物のカレーを口に入れる。

どことなく不自由そうなのはやはり脳出血の後遺症だ。

話し方もどことなく舌足らずではあるが、一時を思えば随分と回復したもので、まだ麻痺は見られるものの日常生活にそれほど不便なく過ごしている。

「全然気が付かなかったけど何時に帰ってきたの？」

これは祖母だ。

昨日、土曜日は午前中で終わりだったが、月の初めは健康保険への療養費支給申請書「レセプト」の作成をしなければならなかった。

一ヶ月にかかった施術費の医療保険者負担分を計算して請求用紙を作成、保険者ごとに仕分けし発送する。

今ではパソコンに入力すれば自動的に計算してくれる為それなり楽にはなったのだが、その入力を普段からさぼっていた為、昨日はそれなりに時間がかかった。

「帰ってきたのは夜中の一時過ぎだったか」

起きたのはたった今だ。

起き掛けのカレーは少々胃に重たいが、祖母の手作りに文句は言わず口に運ぶ。

「それより悪かったな。午前中買い物に行けなくて」

いつもは午前十時に祖母を車に乗せて買い物に行く。

最近はずねの具合も悪く、歩いて買い物に行くのが辛いらしい。

自転車も危ないこともあり週に一度、まとめ買いに荷物持ちも兼ね連れて行っていた。

以前はちょっとしたものは祖父が買いに行っていたが、脳出血を起こしてからはそれも控えるようになっていたこともある。

食事を終え、祖母の片付けが終わるのを見計らい買い物に連れて行き、何かと用事を済ませた頃には午後二時をまわっていた。

五時半には晩御飯なのでどこかに出掛ける気も起らない。

仕事で平日は無理として、せめて日曜日くらいは祖父母と一緒に食事をしようと決めているのだが、昼は十一時、夜は五時半と高齢者にありがちな早い時間の食事は、いつも昼は一時過ぎ、夜は八時過ぎのサイクルのこの胃にとっては厳しく、ともすれば腹の調子を崩しやすい。

できれば食事は決まった時間に食べたいものだ。

まだ腹にカレーが溜まっている気がして、本屋にでも散歩ついでに行こうかなどと考えていると携帯電話の着信音が鳴る。

ユキコからだった。

「今日、付き合っただけで貰いたい所があるんだけど・・・」

思いもよらない初めての日曜日の誘いだった。

考えてみれば日曜日に二人でどこかに出掛けるなどといったデートらしきことは一度も無い。

何しろ周囲に隠している関係上、人目に付きやすい休日に会うのは抵抗があることは当初から言っていた。

また大概はキリスト教関連の用事で彼女の予定は埋まっていることが多い。

こればかりは仕方がないと諦めていたものだ。

【 日曜日が安息日のイメージだが、正しくは土曜日である。

旧約聖書の創世記に、神は六日で天地創造を終えて七日目は休んだとある。この七日目が土曜日にあたり、安息日としてユダヤ教では神を礼拝する日とし、また戒律で家事を含め労働を厳しく禁止している。

キリスト教も初めは土曜日に礼拝していたようだが、後にキリストの復活、金曜日に処刑され三日目の日曜日に復活した逸話から、日曜日を「主の日」として礼拝するようになった。「主の日」は安息日と同様の扱いのようだが、ユダヤ教のそれと違い厳格な禁止事項があるわけでもなく、普段より心静かに過ごし娯楽などに興じることが多いようだ。

また年に一度、キリストが処刑されてその後復活した日を記念する日は別に「復活祭」「イースター」と呼ばれるものがあり、カトリック・プロテスタントなどの西方教会では「春分後の満

月の次の日曜日」と定めた年毎にその日付が変わる移動祝日がある。】

【 暦関連でひとつ。

カレンダーでよく見る大安・仏滅などは仏教を連想しそうな言葉であるが、これは占いの類であり仏教とは全く関係がなく、中国で生まれたとされる「六曜」というただの占術で何の根拠もない迷信の類である。

本来仏教、それにキリスト教もであるが占いは認めていない。】

「あのね・・・今から病院に行くのに付き合っただけで貰えないかな・・・」

まあ、デートの誘いでないことは予想していた。

声の様子からは不安感と鬱状態が伝わり、あまり精神状態は良くなさそうに聞こえる。

一緒に病院になど言われると、俺の子か、などと身に覚えのない冗談の一つも言ってみたくなるものだが、彼女には通じそうにないので止めておくことにした。

「いいよ、どっか調子悪いの？」

ある程度は察しているが一応聞く。

「違うの、そうじゃなくて心療内科なんだけど・・・」

「分かった。二十分くらいでそっちに行くから」

頼られるのに悪い気はしない。

電話を切り、支度を済ませて部屋を出る。

居間では祖父母がソファーに座り、テレビを見ながら二人ともうつらうつらと船をこいでいた。

「ちょっと出掛けてくる」

声をかけると二人とも驚いたように目を覚ます。

昼寝の邪魔をして悪いことをした。

「遅くなるかもしれないから、夕飯は先に食べといて」

「なんかあったのか」

さも今まで寝ていなかったように取り繕い祖父が尋ねてきた。

どうも年寄りには昼寝していたことを隠す傾向にあるようだ。

「ああ、業者が来るから接骨院に行ってくる」

祖父母にはユキコの話をしていない。

まず、孫の結婚を切望している節があり余計な期待を持たせたくない。

それとどうやら二人ともキリスト教が嫌いらしい。

かなり前だが祖父の二番目の姉の旦那の葬式に行った際、その旦那の一家がクリスチャンで、葬儀もキリスト教方式で執り行っていたらしい。

大きな違いと言えば「御霊前」は宗教に関係なく使えるとして「香典」が「御ミサ料」「お花料」となり、焼香は無く、読経の代わりに聖書の朗読や聖歌を歌うといったところか。

肌に合わなかったようだ。

文化の違いとはいえ祖父母達の目にはふざけているようにでも映ったらしく、大層ご立腹され、帰ってきてからしばらくの間文句が尽きなかった。

当分は内緒にしておくのが無難だろう。

「あんた夕飯はどうするの？」

今度は祖母が不満げに口にする。

それなりに孫に料理を作ることや、一緒に食事をすることを楽しみにしてはくれているようである。

「遅くなるかもしれないから、いらない」

心苦しいが優先順位は彼女が上だ。

夜には帰ることを伝え、尚も何か言いたげな二人をあとにして急いで車を走らせた。

家の前に着いたことを携帯電話で知らせ、待っている間に外に出て煙草を吸う。

パニック障害には煙草も誘因の一つであるから、彼女の傍では当然吸えなくなる。

念の為、来る時は窓を全開にして走らせながら換気し、今も煙草用の消臭スプレーをかけておいた。

「おまたせしました」

家から出てきたユキコはいつもより小奇麗な格好をしているように見える。

病気のこともありタイトな服装は避け、淡い色を基調としてゆったりとしたTシャツにカーディガン、下は相変わらず膝下までのロングスカートだが、普段見慣れた服装よりも色合いや造りが良く、その上に乗った顔の化粧からも気合の入り具合がうかがえる。

「今日は化粧が濃いな」

素顔、またはそれに準じた薄化粧が好みの為、つい口にしてしまう。

すぐに顔色の悪さを隠し、血色よく見えるように化粧しているであろうことを察して後悔する

。

「おかしいかな？ちょっと街中に出るからきちんとしてみたんだけど」

それは身だしなみと同時に彼女の周囲への気遣いだった、などと断言したら惚れた欲目の過大評価に聞こえるだろうか。

それでもたぶん、そうなのだと思う。

「いや、よく似合ってかわいいよ」

月並みな台詞が恥ずかしい。

とりあえずご近所の目もあることなので早々に車に乗り込む。

「それにしても街中って？」

「あ、今ね、隣の〇〇〇市の心療内科に通ってるから」

そうやって口にしたのはここより都会の隣町である都市の名前だった。

この辺りはどちらかというとベッドタウンにあたる。

初めは近所の精神科に行っていたそうだが、薬があまり効かず、性格的に担当の先生と合わなかったようで、人づてに隣町の心療内科の話を聞き転院したそうだ。

「今行っているところは日曜日も診療していて、いつもは母が仕事休みだから付き添ってくれるんだけど・・・」

その母はどうしても断れない急な用事が出来て夫婦で出掛けてしまった。

母親としては心配だったのだろう。

今日病院へ行くことは止めるようにとは言っていたが、本人は最初調子が良かったこともあり独り車で行くつもりだったようだ。

予約をしていたこともある。

それでもやはり、いざとなると不安感に襲われたらしくどうするか悩んだらしい。

片道でも三十分はある距離だ。

病気、特に発作のことを考えれば不安になるのも無理はない。

「ごめんね。ちょっと遠いけどいい？」

独りで留守番していたことにも不安があったのだろう。

頼ってくれたことは素直に嬉しい。

「構わないよ。じゃあ行こうか」

病院の住所をカーナビに入力して車を走らせる。

「そういえば予約の時間は大丈夫なのか？」

「えーっと、五時半」

時計はまだ三時前だ。

「だって、せっかく一緒なんだから・・・」

車を病院から少し離れた立体駐車場に入れて外に出る。

こういった街中に出てくるのも何年ぶりだろうか、田舎者の習性か立ち並ぶビル街におもわず見上げてしまう。

「先生、あっち」

この辺の地理は把握済みのようで、ユキコは細い路地を指差し歩みを進める。

予約時間まで二時間程度。

買い物に付き合っ欲しいと、すでにどこに行くかは決めていたらしい彼女の案内のまま、十分くらいでその店に辿り着く。

布生地のお店、五階建てのビルの大きな店だ。

「母とこの前来た時はゆっくり見れなかったから」

日曜ということもあり人の多い店内は彼女にとって大丈夫か心配だったが、問題ないように混雑した中でも器用に人混みを避けながらお目当てのコーナーまで辿り着いていた。

「部屋の入口にのれんみたいに掛けたいの」

自分で作る、少しだけ自慢げに他にもスカートや簡単な服ならたまに作ると微笑む。

その為の生地も探しているらしい。

「こんなのはどうかな？」

そう言って選り分けた候補の生地を広げて見せる。

隣町ということで人目を気にすることもない所為か、珍しくデートらしい雰囲気になっているのは嬉しい限りだ。

普段なら女の買い物など面倒に思うところだが、久しぶりに見る彼女の楽しげな姿に今日とはとことん付き合おうと腹を決めた。

たまにはいいだろう。

どうもピンとくる生地が無いようで他のコーナーも周ることになり、結局は店内の一階から五階を二往復することとなる。

発作が気懸かりだったが彼女自身の精神状態もそれなりに良好だったのだろう。

時折苦しいのか胸を抑える仕草を見せ、一度薬を飲んだものの、回復したのか心配をよそに休むことなく店内を歩きまわっていた。

自分なりにいくつか候補を見つけたようだがなかなか決められない、というよりどうやら選んで貰いたいらしい。

しきりに意見を求められるのだが、なかなか答えが彼女の趣味と合致しない。

もう一度上の階にとエスカレーターへ向かう途中、彼女の足が止まった。

今迄棚に陳列してある商品しか目が行かずに気が付かなかったが、レジ正面の柱を飾る様に掛けて広げてあるアジア系の柄の生地が目に残ったようだ。

連れ回されて覚えた彼女の好みの傾向と照らし合わせれば、確かに趣味に合いそうだ。

キリスト教といえばカトリックやプロテスタントが盛んなヨーロッパをイメージしていた先入観があり、ユキコの趣味も西洋系だと決めつけていたところがある。

だから小物など全般的にアジア系のものが趣味だったことは意外だった。

もっとも聖書や聖地などは西アジアなど中東に出自を持つ。

イエス・キリストの生まれた場所もパレスチナのベツレヘムで、ヨーロッパ寄りとはいえアジア系の民族であるといった説が有力のようだ。

キリスト教も仏教と同じアジアの宗教であった、だから彼女の趣味もアジア系なのかと納得するのは余りにこじつけ過ぎだろうか。

「これ綺麗だね」

そう言ってユキコは手を伸ばし感触を確かめるが、それでも値札を見るとすぐその手を引っ込めた。

「気に入ったんじゃないの？」

「うん、でもだいぶ予算オーバー」

名残惜しそうにその場を立ち去ろうとするユキコを引き止め、思っていたこと口にする。

「じゃあそれは俺がプレゼントするから」

「そんな、私全然買って貰うつもりなんてないよ」

驚いたように断り続ける彼女を無視して店員を呼び、寸法を伝えるように促す。

一応生地の長さを決めて裁断して貰わないといけない。

このことさえなければ、あとで買ってサプライズも出来るのだが仕方があるまい。

まだ何か言いかける彼女を、贈り物の支払い金額を見るのはマナー違反だと強引に追い払い会計を済ませた。

店外に出て時計を見るとかなり時間は経っており、今から病院に向かえば予約時間に丁度といったところだった。

「本当にいいの？」

「身に着けるものか、部屋に飾れるようなものを前から贈りたかったんだ」

考えてみれば初めてのプレゼントになる。

相変わらず「同じクリスチャンじゃないと結婚しない、だからつきあえない」というスタンスの彼女は、意識して避けているのか誕生日やクリスマスなどのイベント周辺の時期には接骨院に顔を出すことがない。

そんなこともあり何か贈ろうと考えてはいたものの、なかなかきっかけも無く贈り物を買うまでには至らなかった。

とはいえそれは言い訳にもならず、やはり怠慢だったと思っていたところに今回の買い物だった。

「今回は俺の我儘ってことで素直に受け取って貰えると嬉しいんだが」

「そんなこと・・・ありがとう」

嬉しそうに笑顔で礼を言い、小走りで横に並ぶとユキコは腕を絡ませてきた。

人目を気にしなくていい所為か、今日はやけに積極的だった。

「私達、やっぱりこうしてると恋人同士に見えるかな」

「初々しさが足りないから夫婦あたりに見られているかもな」

三十過ぎのいい歳だ。

「そっか、夫婦か・・・」

その言葉がどこか嬉しそうに、ユキコはもう一度「夫婦か」と小さく呟いた。

病院に着いたのは予約時間の五分前だった。

受付を済ませ待合の椅子に座るとユキコは小声で囁く。

「たぶん一時間くらい待つと思うよ」

予約時間に入っても診察がすぐに行われないうで、近くにあった本屋で時間を潰して来たかどうかと勧められたが、独り置いて行けるわけがなく断り一緒に待つことにする。

診察にはかなり長い時間を割いて話を丁寧に聞いてくれると言う彼女の言葉通り、一人が入って出てくるまでの時間は二十分から三十分はかかっていた。

それなりに広く明るい造りの待合室には、まばらにまだ四人ほど患者が座って順番を待って

いる。

何番目なのか分からないが確かに待つことにはなりそうだった。

一時間以上待ってようやくユキコの名前は呼ばれた。

「外で待っているから」

診察室へ入る彼女に断りを入れ見送ったあと、外に出て玄関から少し離れた喫煙場所へと向かう。

懐から煙草を取り出しジッポで火をつける。

数時間ぶりに吸う所為か軽く眩暈を感じ、それでも肺一杯に煙を吸い込み満喫した。

パニック障害の誘因になる為と我慢していたが、喫煙者としてはやはりこれがたまらない。

カウンセリングの内容に予想がつくとはいえ気になりながら、診察が終わるまでこのまま暇を潰すつもりでいた。

【 パニック障害の発作を直接抑えるものとしては薬物が必須だが、やはりそれだけではなく病気に対する理解と対処法を学ぶことが必要である。

それが医師の行う「精神療法」なのだが、これには「認知療法」や「行動療法」などがあげられる。

認知療法とは自分が今いる場所・時間などに対して周囲の状況と関連して、注意・知覚・判断・記憶などを総合して正しく理解すること。

行動療法とは行動理論に基づいて、症状を誤って学習された不適応行動と考え、不適応行動の消去・適応行動の学習を目指す治療法である。】

結局三十分、四本目の煙草を吸い終わったあと、診察を終えた彼女が姿を現した。

時刻的に一応晩飯でもと誘ってみたが、親が帰る九時前には戻っていたいと聞き、諦め素直に帰ることにする。

八時過ぎには着くだろう。

車に乗る頃にはすっかり日も沈み、ユキコは疲れたのか助手席のシートに深く沈み込むようにもたれかけている。

着いたら起こすから寝ていたらどうかと勧めてみたが眠れそうにはないようだった。

「診察でもやっぱり俺が原因って言ってなかったか？」

慣れない街の狭い路地を抜けて国道に出ると、ようやく会話をする余裕もでてきた。

「・・・そんなこと・・・」

おそらく気を悪くさせないようにと気遣いながら、ユキコは歯切れ悪く言葉を選びながら肯定する。

心療内科の先生にはキリスト教や接骨院でのことを話せる範囲で話してあるそうだ。

自分のことを彼女主観ではどういった対象として他人に話しているのか興味はあるが、どう聞

いたにしる病原と断じることには疑いはないだろう。

「やっぱりいつまでも先生に甘えてないで、独りでも生きていけるように頑張らないと駄目だよね」

目標を持つのは良いことだが、その中に自分との決別が入っているのが切ない。

「相変わらず悲しいことに俺と一緒にいるっていう選択肢は無いんだな」

言われて自分の言葉の意味を理解したのか「ごめんなさい」としおらしく謝る。

いつもながら悪気がないだけに苦笑が絶えない。

「俺としちゃあ妙なこだわりを捨てて、俺と結婚するって言って欲しいところなんだが」
返事がない。

返答に困る様なことをつい言うってしまうのは悪い癖だ。

「まあ今のところ、俺が入信でもしないといけないわけだ」

「形だけだと意味ないんだからね」

見透かしたように、寂しそうな笑顔でたしなめる。

「先生が聖書を信じることができないことは分かってる。考え方を換えられないでしょ？」

確かに宗教的な考え方には未だ馴染めない。

話題に上るたび否定的な意見を唱えることで、どれだけ彼女を傷つけていたのだろうか。

彼女のあきらめにも似た台詞が胸に刺さる。

「そうだな・・・ごめん」

彼女の為に信じるといった選択肢はどうしても選ぶことが出来ない。

格好をつけるつもりはないが、やはりそれは生き方の問題だからだろう。

「ううん、いいの。先生頑固だもんね」

「お互い様だ」

「・・・うん」

妥協してキリスト教に入信するか、彼女がキリスト教をやめるか、それとも互いが互いの宗教観に干渉することなく添い遂げるか。

単純で明快な解決法が示されていても現実に実行出来なければ何の意味も無い。

こと宗教に関しては交わらぬ平行線のまま、落とし処が見つからずに堂々巡りを繰り返すばかりだった。

「いつまでも駄目だよね、このままじゃ・・・」

鬱が入り始めたのか、またひとりで悩み考え込むような物言いと共にうつむくユキコの右手を握る。

「細かいことはもういいから、とりあえず病気が治るまででも俺の傍に居ろ」

「でも・・・」

彼女の声が震え始めている。

見なくてもわかる、また涙を流しているのだろう。

繋ぎ、握りしめた手に力を込める。

「結論を出すのは病気が治ってから。今は悩んだところで悪いほうにしか考えられないだろ？」

生真面目な性格は、悩み自分を追い込んで結局は自滅を繰り返す。

「でも、それでも私治っても先生との結婚はできないし、何もしてあげられないよ」

「そんな時になってもそうなら素直に受け入れるよ。別に慰謝料とか請求するつもりもないから心配するな」

「でもいいの？今も私、先生のこと好きかどうか自分の気持ちも分からないんだよ？それなのに振り回して迷惑かけてばかりで・・・」

数学の定理の様に理屈で説明出来ない感情は否定する性格も、根拠も無く「好き」を連発されるよりは好ましく思える。

「俺が「好き」で「愛してる」からいいんだよ。お前は気が済むまで甘えてればいい」

でも、は続かなかった。

「今はこうやってお前に必要とされて、頼られているだけで充分なんだから」

「・・・うん・・・ありがとう・・・」

ユキコの家の前に着いたのは午後八時三十分。

まだ彼女の両親は帰っていないようで、玄関の灯りも点いてはいない。

「遅くまでごめんね」

「親が帰ってくるまで独りで大丈夫か？」

「うん、家に入ったらもう横になって休んでおくから。今日はいっぱいありがとう」

布生地の入った紙袋を腕の中に抱え込んで頭を下げる。

喜んで貰えているようで何よりだ。

忘れ物がないか確認し、ドアを開けようとしてから思い出したようにユキコは振り返った。

「先生、ちょっと目をつぶって」

「何？」

この状況なら、とある種の期待を込めて言われるままに目を閉じる。

頬にユキコの唇が触れる感触。

「今日のお礼」

頬を染めて、照れ隠しの様に勢いよく助手席のドアを開け外に出る。

「おやすみなさい」

「・・・おやすみ」

そのまま玄関の鍵を開け、もう一度振り返り、手を振り中へと入っていった。

考えてみれば頬とはいえ、初めてのユキコからの口づけであった。

彼女の香水の香りが残った車内で、甘酸っぱくもこそばゆい気持ちに包まれながら自宅へとアクセルを踏み出す。

妙にいい気分だった。

夕方の六時前後からは会社帰りの患者で少しだけ混み合う。

この時間受付嬢は帰ってしまい一人になる為、受付の仕事もやらなければならず少々的人数でも慌ただしくしてしまう。

今はベッドに二人、待合室に一人。

また一人入ってきた音が聞こえ、切りのいいところで施術の手を止め受付に向かう。

「すいません、初めてなんすけど・・・」

髪の毛を茶色く染めた中背中肉の作業服姿の若い男だ。

細く吊り上がった眼に少し厚い唇、色男とはお世辞にも言えないが全体的に見るとそれなりに整った顔立ちはしている。

昔は真面目な優等生、では確実になかったであろう雰囲気をもつ今風の若者だ。

「交通事故で追突されて首が痛いんすよ、診て貰えますか？」

ふてぶてしい口調の中に妙な人懐こさがある。

「それではこちらにお名前、ご住所、電話番号と、下は分かる範囲で結構ですのでご記入ください」

問診表を渡し、その間に他の患者の施術を行う。

「書きました、置いときまーす」

受付のほうから男の声が聞こえた。

一人の施術を終えて受付のカウンターに行き、問診票を確認する。

見覚えのある苗字に、ある女性の顔が脳裏をかすめたが、同姓など珍しくも無く、見知った相手とは顔つきも違えば歳も一まわりは違う。

何よりキリスト教が欠片も似合いそうにない。

普通に應對し、普通に施術し、普通に帰した。

「弟来たでしょ」

一週間振りに接骨院に姿を現したユキコは悪戯っぽく笑う。

病院に付き添った日から一ヶ月余りになる。

未だ「頼りにしない」と気張ってはいるが、一週間おきに来るところを見ると目標の達成はまだまだ難しいようだ。

無理に意地を張らずにもっと頼り、甘えて欲しいものである。

心配な病状は変わらずで、あれから体重もまた一キロ落ちたらしい。

あいかわらず発作も起きて度々寝込んでいると話に聞くが、今日は調子が良さそうだった。

「あの子そうなのか。おまえと同じ追突されたってのが来たけど」

コウスケ、という同じ苗字を持つ患者の顔を思い出す。

「全然似てないな」

どう違うかはさて置いて、素直な感想を漏らす。

「そうなの。私は父親似で弟と妹は母親似になるから」

弟とは十一歳、妹とは三歳違う。

妹は嫁にいき、家に住んでいるのは彼女と両親と弟の四人であるらしい。

「弟はキリスト教じゃないのか？」

想像はつくが一応聞いてみると、とんでもない、とでもいうように施術中にも拘らず首を横に振る。

「あの子だけ違うの、父も母も妹もみんなキリスト教なのに。小っちゃい頃はいい子だったのよ、ちゃんと洗礼も受けたのに」

【 洗礼とはキリスト教に入信する際に全身を水に浸す、もしくは簡略化して頭部に水を触れさせる儀式である。

これは水の中に完全に浸されることでキリストの死に預かり、そこから引き上げられることによってキリストと共に復活するという意味が込められている。

洗礼によってキリストの死と復活に預かり、原罪と自罪と及びその罰とを赦され、恩寵によって永遠の生命を受け継ぐものとなる、とされている。

原罪とは解釈が各教派によってかなり違うのだが、一例として挙げておくと「創世記」で蛇にそそのかされたイブが善悪の知識の実を食べて、主の怒りによりアダムとイブがエデンの園から追放され、その罪が子孫に引き継がされたことを指しているようだ。

自罪とは人間が生まれてから犯した罪のことである。

また洗礼を受ける時に洗礼名、クリスチャンネームを授かる。】

「あの子が中学生や高校生の時、大変だったんだから。何度も警察のお世話になって」

施術中、うつ伏せなので表情は見えないが、さぞ立腹した表情をしているのだろう。

どうやら身内だけに評価は厳しいらしく、普段と違い若干語気が荒い。

「高校でたら就職も一人で勝手に決めちゃうし、昔から心配ばかりかけて勝手なの、あの子は」

歳が離れている所為かまるで母親が息子のことを話すかのような口調だが、それでもやはりかわいいうで、言葉の中に愛情の響きを感じないわけでもない。

「まあ、今は真面目に働いていることだし」

「でもね、先生聞いて。夜は毎晩お酒飲みについて遅いし、週末はいつも遊びに行ってるから、一緒に住んでも全然会えないんだよ」

子離れ出来ない親のようだ。

「そんなに目くじら立てるようなことでもないだろ？男なんだから」

「・・・やけに肩を持つけど先生もそうなの？」

急に矛先がこちらに向いた。

「先生もコウスケみたいに夜遊びしたりして家にいない人？」

とぼっちりだ。

「そういうわけじゃ・・・」

「やっぱり普通の男の人ってみんなそうなのかな」

彼女の家族と周りと同じクリスチャンの人間が大多数を占めており、身近な普通の一般男性のサンプルはどうやら弟のようだ。

彼女のクリスチャン以外の男に対しての一部偏った男性観は、どうもやんちゃな弟の影響を多大に受けているような気がしてならない。

他に患者がいなかったこともあり、ユキコの弟への不平不満だらけの思い出話は施術が終わるまで続くことになるが、久しぶりに楽しそうなので話すに任せていた。

「そういえば弟は俺とお前の関係を知ってるのか？」

午前の受付時間はとくに終了して二人きり、帰り支度を始めた彼女に問いかける。

一応は確認しておかないといけないだろう。

「・・・内緒にして貰える？」

今のところは知っているのは母親と親しい友人・知人のみとのことだ。

ちなみに我が接骨院の受付嬢にも内緒にしている。

ユキコと顔見知りではないが何分近所ということもある。

関係上あまり口外出来るようなものでもなく、特に宗教という集団にある彼女にとっては嫁入り前ということもあり、確かに関係を知る人間は極力少数なのが好ましい。

「分かった」

わざわざ言いふらすことでもない。

「ありがとう。じゃあ先生、コウスケのことお願いね」

「はいはい」

結局最後まで弟の話で今日の逢瀬は終わった。

コウスケは車で四十分程かかる市外の工場に勤めており、仕事が終わって直行した二度目の来院は午後七時を過ぎた辺りであった。

「首がまた、だいぶ痛いんっすけど・・・」

最初の施術で幾らか首の痛みが和らぎ喜んでいたが、翌朝にはまた戻っていたことで不安もあるようだった。

初めのうちはそんなものであり、特に朝方は血の循環も悪いこともあるから悪い箇所はよく痛むことを説明する。

「時間はかかるけど徐々に治まってくるから大丈夫」

もっともある程度治まっても、気候や体調によってまた痛みが現れることを付け加え説明する

。

ムチウチなどは後々も痛みが出るので完治するとは言い難いのが辛いところだ。

「そういえばユキコさんの弟だって？」

座らせて、背後から首に手技を施しながら聞いてみる。

「そうなんスよ。姉ちゃんから聞きました？」

タルそうな喋り方だが妙に人懐こい。

「やんちゃで夜遊びと女遊びが酷い、手のかかる弟だと聞いた」

女遊びは言ってなかったかもしれない。

「ひでえ、そんなことまで喋ったんスか？」

「今でも真面目に働いてるのか心配だそうだ」

「勘弁してくださいよ、どっからどう見てもマジメな好青年じゃないスか」

姉のこともあり打ち解けやすかったのか、苦笑いしながらも冗談を返す余裕はあるようだった

。

「まあ弟のことが色々気になるようで」

「昔から口うるさいんスよ、あの第二のかーちゃんは」

幼い時分、仕事で忙しかった母親に代わり面倒を見ていた姉は、歳が離れていることもあってか扱いは「かーちゃん」のようだ。

「だいたいハタチ過ぎたってのに未だガキ扱いッスからね。困ったもんッスよ」

屈託なく笑う辺りはそれほど嫌でもないようで、これでなかなか姉思いなのかもしれない。

「あの行かず後家は」

一言多い性格のようだが。

どうやら気が合いそうではあるが雑談ばかりしているわけにもいかず、ここは痛むか、動かすかどうか、などと接骨院の先生らしく尋ねながら手技を加える。

途中、隣のベッドの患者が電気治療を終えたので、今日はこれで終わりと会計を済ませ見送り戻ると、コウスケは思い出したように口を開く。

「そういや先生も宗教やってるんスか？」

他に患者も受付嬢もない状況で聞いてきたのは彼なりの配慮だろう。

「違うよ、そうみえるか？」

「いや、全然みえないッスけどね」

どうみえているのか気になるところだ。

「ただねーちゃんがやけに勧めてたし、ほらここの大家さんも同じ宗教じゃないッスか」

大家のツジ家とユキコの家族とは同じキリスト教であり家族ぐるみでの交流があるそうで、コウスケも小学生くらいまでは家を行き来し、その手の集まりにも一緒に行くことがあったらしい

。

「やっぱり苦手なんッスよ。いや、いい人達なんだけど宗教のあの考え方にはついていけないもんで」

うんざりした声には、自分以外の家族がキリスト教という環境で生活を送ってきたが故の実感がこもっている。

「洗礼とやらは受けたらしいのにな」

「あれは反則ッスよ、生まれたばかりの物心つく前にやられたんですから。無効です、無効」

【 乳児や児童に授けられる洗礼を幼児洗礼または小児洗礼という。

元々は成人に対してのみ洗礼を行っていたものを、起源は定かではないがキリスト教初期あたりにはカトリック教会において幼児洗礼を基本とし推奨していたようである。

「成人」といっても二十歳以上を指すのではなく、各教派によって違うので明確な区分けは難しいが「教理を理解し本人の信仰の意志が確認出来る」年齢、おおよそ学生以上であれば成人洗礼にあたり、それ以下の年齢であれば幼児洗礼にあたと解釈しておく。

幼児洗礼は本人の信仰の意志を確認出来ないこともあり、認めていない教派・教会も多い。】

教派の方針や、母親が熱心な信徒であったことでコウスケは幼児洗礼を受けたわけだが、これにはかなり不満があったようだ。

反抗期の頃には家族はもとより宗教への反発が著しく、元々の性格もあったろうがグレることに時間はかからなかったと笑いながら言う。

それでも幼少より身に付いた宗教の道德観や倫理観により犯罪に手を染めるような真似はせず、それなりに真面目であったとは本人の談で、どこまで本当か定かではないが一応半分くらいは信じておくことにした。

紆余曲折あったとはいえ高校卒業と同時に就職し本人曰く立派な社会人になった。

家族との関係も良好ではあり、宗教に関して許容することは出来ないまでも、無関心でいることにより平穏は保たれているようである。

「身内だから縁切るわけにもいかないし。大変なんスよ、いろいろ」

ある意味キリスト教との共同生活経験者としてはかなり年季のはいった先輩の実感のこもった苦労話に、自分の現状を重ねてしまい奇妙な親近感を覚える。

いつの間にか通常の施術時間を超過し会話が弾んでいたのはその所為だろう。

適当なところで手技を切り上げ首回りの調子を聞いてみる。

「スゲー、だいぶ楽になりましたよ」

他の患者がいないのをいいことに三十分以上の手技を行っていたのだから、それなりに調子も良くなって貰わないと立つ瀬がないものだ。

素直な感情表現と感謝を述べる笑顔にも何ともいえぬ愛嬌があり、なるほどユキコが可愛がるのも分かる気がするかと納得した。

「先生、一度私達の集まりに来てみない？見学だけでも」

携帯電話の向こうでユキコが探る様に聞いてくる。

以前に一度断ってからは、その後口に出すことは無かった。

またそのうち誘われることもあるだろうと思ってはいたし、初めの頃であれば一度くらいは付き合っていくことも仕方がないかと考えていたこともある。

それでもここは丁重に断ることに決めた。

「やめとくよ」

べつに嫌で行かないという理由ではなかった。

躁鬱状態が頻繁に見られていた時期、「接骨院の先生」との関係を彼女は周囲の親しい人間に相談していたことがあると聞いている。

勿論、同じキリスト教の仲間にある。

聞いただけでも母親を筆頭に接骨院の店舗の大家、一度接骨院に連れて来た娘を含む同世代の二人の友人には程度の差こそあれ事情を話しているらしい。

それ以外には洩らしていないとは言うが、精神疾患によるものか記憶の欠落がまま見られる為当てにはならないこともあり、その場の雰囲気や他の人間に話している可能性は否定出来ない。

またそうでなくとも狭い集団内のことであるから噂程度にしろ広まってもおかしくはなかった。

噂の中身はユキコと一般男性との交遊と、同時期に精神疾患が加わっている為、醜聞に近い何かがあったと勘ぐられている可能性もある。

「そんなことは無いと思うけど・・・」

さすがにそれは反論があるようだが、こちらとしてはクリスチャンだからといってそれほど人間性を高く評価しているわけでもないのだから、「温かい目で優しく見守ってくれている」などと楽天的な考えも無い。

そこで問題なのは共に連れ立って教会に行くことにより一部噂が真実へと変わってしまうことである。

ユキコの相手の男を知らない人間にまで認識させてしまうことで、根も葉もない噂に拍車をかけかねないような気がするのだ。

最も恐れるのは純潔や貞操に関して懐疑的な目で見られることにあり、一般的な考えならさして問題にならないのだろうが、キリスト教内の狭い社会に対してではやはり必要以上に警戒してしまう。

「考え過ぎじゃない？」

「俺もそう思うんだけどね」

あまり望ましくない話だが将来ユキコが仲間内、同じキリスト教の男性と結婚する道を選んだとすれば、過去の男との妙な噂話は邪魔にしかならない。

その場合、その後も宗教社会で生きていくことになるのだから知る人間は少ないほうが良く、彼女の以前からの希望通り隠せるなら隠し徹したほうが良い。

「結婚でもしたあとなら幾らでも付き合うから、今はまだ止めとかないか？」

「・・・先生が一人で来て離れたところにいるとかは」

「それは勘弁してくれ」

ユキコと同じキリスト教の人間がご近所にはそれなりに住んでいて患者として結構来ている。信者になるつもりも無く独りでいった日には碌な結果になりそうにない。

「とにかく今は時期尚早。前向きに検討しておくからあせらずにいてくれないか？」

「・・・はい」

納得したような、していないような声の返事は仕方がないだろう。

また数ヶ月が経ち、季節が変わり、肌に寒さを感じ始めた頃。

パニック障害は癒えぬまま、ユキコは週一回程度の間隔で接骨院に顔を出している。

やはり今はそれくらいが逢わずに耐えられる時間のようだった。

このところ目に見えて衰弱が激しく、不眠・食欲不振による体重減少、頬はこけ目の下には隈、袖から見える手と腕は痩せ細っていた。

以前であれば躁状態には必要以上に元気に見える時もあったものだが、今では鬱状態であることが多く、その姿にさらなる暗い翳を落としている。

病気前の彼女しか知らない人間なら、すれ違っても気付くことは難しいかもしれない。

病院にはまた二回ほど付き添った。

どちらも違う病院だった。

医師に対しての不満、薬が効かなくなったことでの医者に対する不信、なかなか治ることのない病気へのあせり、理由は様々だが他にも何度か病院を変わっているらしい。

パニック障害、躁鬱病、強迫性障害、自律神経失調症など病院が変わるたびに病名も変わり、また経過によって薬も変わる。

このことにもストレスを感じて、あたかも得体のしれない病気を患っているかのように不安に苛まされていた。

あまり頻繁に病院を変えるのはどうかと思う。

ある程度は仕方が無いにしろ、一つ所で腰を落ち着けて経過を見るのも必要なことだ。

だいたい精神科・心療内科などまだ途上の分野である。

下される診断は問診によりその症状からあてはまる疾患名を提示するわけだが、明確に疾患名を特定出来るようなものではなく、その時の二次的な症状や医師の解釈によって病名が違うなど珍しい話ではない。

問診以外の検査なども内臓や代謝などに異常がないか、症状の原因がそこからのものでないかを確認するだけのもので、精神疾患そのものを対象としているわけではない。

そもそもパニック障害や鬱病など精神疾患は脳内の神経伝達物質の異常ではないかと言われてはいるが完全に解明されたわけでもないのである。

確実な診断、必ず治せると過大に評価し期待を持たないほうがいい。

カウンセリングで原因の特定、対処法、どのようにして克服していくのか、納得のいく明確な説明を受けているなら充分ではないか。

薬は症状が治まらなければ変えて貰えばいい、また効かなくなってくるのは耐性が出来るからで、強い薬に変えるのは早期回復を目指す為にもやむを得ないと割り切ることも必要ではないか。

三回目の病院に連れて行く車の中、病院を変わればいいのかというわけではないと考えを口にする。

「そうなのかな」

納得はっていない表情。

「今の病院はどうなの？」

「先生が女性で話しやすいから、しばらくは通ってみるつもり」

そう言った彼女は、しばらくしてまた病院を変えた。

先月十二月の初めにまた祖父が転んだ。

以前倒れた時から右半身が動かさづらく、そのこともありバランスを崩したようだ。

同じように頭を打ったのだが、今回は自力ですぐに起き上がったこともあり本人としては「大丈夫」の一点張りであった。

それでも傍から見ると動作は鈍いしろれつがまわらないのも悪化したように感じる。

掛かりつけの医院での、とりあえずの診断では問題なかったとはいえ、精密検査を受けるべきだと言ったのだが聞く耳を持たない。

心配で駆け付けた叔母からもかなり口やかましく言われていたが、暖簾に腕押し糠に釘、どうも昭和初期の生まれは頑固でいけない。

しばらくの間も体調を崩すなど、なんだかんだと目を離せない状況だった。

そんななか正月が過ぎた頃、叔母が仕事を辞めて帰ってきた。

祖父母を心配して、だけでなく色々あったらしいが、昼間何かあった時のことを考えれば心強く、今迄も頻繁に来ていた為、特に問題も無く同居が始まった。

このところ仕事以外の時間は祖父母にかかり付けだった為、これには助かり、おかげで心配なく家を空け、再び接骨院に泊まり込むようなことも出来るようになっていた。

土曜日、接骨院は午前中で受付終了。

シャッターを閉めると気が抜け、早々に二階でビール片手にくつろいでいた。

叔母の引越しも落ち着いてからは、土曜日の夜は接骨院に泊り、日曜の朝に家に帰る生活を送っている。

年末年始におざなりにしていた事務や雑用を片付ける為と祖父母や叔母には説明したが、半分は独りで過ごす時間が欲しかったこともある。

集中すれば一、二時間で終わる程度の事務も今日は気分も乗らず、アルコールがほど良く回った頃にはテレビを見たり、雑誌を読んだり、眠くなったので昼寝して、関係のないことにうつつ抜かしてすっかり遅くなっていた。

ようやく事務仕事を始めようとパソコンの前に座ったが、しばらくすると今度は仕事と昼寝でべたついた体が気持ち悪い。

席を立ち、先にシャワーを浴びてようやくやる気がでてきた。

時間はすでに午後九時をまわっている。

ビールを一本だけ飲み、再びパソコンの前に座り、事務を再開したところで携帯電話が鳴り響いた。

ユキコだ。

十二月に入ってから携帯電話での連絡は取っていたが、直接会ってはいなかった。

祖父のことなどがあり、また彼女が年末年始周辺にあったキリスト教の行事を優先して参加していたこともある。

彼女の体調も気になっていたがすれ違いが多く、慌ただしさからメールが来ても返すことすら怠りがちであり、年が明けてからは電話もメールでも連絡が来ることは無かった。

数週間連絡がないことは珍しくないが、やはり心配もあり、こちらからは連絡しないといった制約に幾らかもどかしい気分であったところの電話だった。

「お久しぶりです」

病状があまり思わしくないような低い声。

挨拶もそこそこにユキコは本題を切り出した。

「今から来てもらえないかな？」

両親が仕事の付き合いで地方に泊りで出掛けたいらしい。

弟コウスケが帰ってくる予定だったが土曜の夜だ、飲み会で明日の昼には帰ると連絡があったとのことで、家に独りで一夜を過ごすことが決定したらしい。

「急に不安で発作が起きたの」

息が荒いのは治まってまだ間がないからだろう。

アルコールが入っていたこともあり、歩いていくので少し時間がかかると伝えて電話を切る。

事務の残りはまた時間を作ってやることにしようと諦めた。

道路脇にポツポツとある店舗のシャッターも閉まり、民家も寝静まった時間は街灯があるとはいえ圧倒的に暗がりの占める割合が多い。

一月中旬の深夜にしては軽装であったことを歩きながら後悔する。

普段は車ばかりの移動でTシャツの上にコートだけでもそれほど気にならないが、歩いての移動ではその寒さが異様に身に沁みていた。

少しばかり歩みを速めたその頬に冷たい感触を感じ、空を上げれば微かに見える程度の雪が舞い始めていた。

家の前に着いたことを携帯電話で伝える。

正面の玄関は店構えの大きな造りで出入りには少々目立つ為、家の右横の奥まったところにある勝手口から入るように言われた。

指示通り家と家の狭い隙間に、周りに気を配りつつ侵入する。

まるで夜這いにでも来た気分だ。

「ごめんなさい」

そう言って申し訳なさそうに出迎えたユキコは赤のチェックのパジャマに薄いカーディガンを羽織っている。

いつもなら彼女は寝床に入っている時間だ。

促されるまま二階に上がる際、念の為に靴はビニール袋に入れて持って行く。

用心にこしたことは無い。

二階の、玄関から見て一番奥の部屋がユキコの部屋であり、引き戸を開けると見覚えのある布が垂れ下がっていた。

「覚えてる？あの時の生地」

一緒に行った店で買った布生地だと、正直柄は忘れかけていたが見たら思い出した。

大きさを合わせて、端を綺麗に処理して、旨い具合に暖簾風に仕立てあげていた。

夏の暑い日には風通しをよくする為、戸を開けた時などに便利だろう。

なんとなく仕舞い込むのが惜しくて冬の間も掛けっ放しだと言う。

贈り物のその後などあまり気にしたことがないが、こうやって使って貰っているところを見ると妙に照れくさい。

部屋の中は女性にしては殺風景な、無駄なものが見当たらないよく整理整頓された部屋だった。

入口から入って右手には壁に沿ってベッドがあり、奥の枕側の横に同じ高さの低い棚には目覚まし時計とライトスタンドとミニコンポが置いてある。

向かいの壁際部屋の一番奥に学習机があり、手前には並んで化粧台が、六畳の部屋の中央には小さな丸テーブルがあり、それで目につくものは全てである。

本棚は整理され、机や化粧台の上には目立つような小物は無く普段不要なもの引き出しなどにきちんとしまっているようだ。

ここまで見た目片付けが行き届いていると押入れの中なぞ勘ぐってみたくなるのが人情だが、彼女の性格を考えればさして意外性のある結果にはなりそうにもない。

「紅茶でいい？淹れてくるから座って待ってて」

急ぎ足で階下に降りていく足音を聞きながら、言われるままに空いている場所に腰を下ろす。

テレビはおろか暇をつぶせそうなものが何一つ無い部屋では大人しく待つより他はなく、暖房の暖かい風と抜けきっていないアルコールの所為もあり適度な睡魔が襲ってきた。

「おまたせ」

戻ってくるのが一分遅ければ涎の一つも垂らしていたところだ。

丸テーブルの上に紅茶の入ったティーカップを二つ、ご丁寧に受け皿付きで置き、砂糖とミルクを添える。

ふとカフェインはと思いだし口に出かかったが、まあいいだろうと思直す。

今夜はずっと傍にいるつもりだ。

すぐ横に座り紅茶に何か入れるか尋ね、いらないと答えると自分のカップにミルクを入れて一口飲むとフーと小さく一息ついた。

「こんな夜遅くに、男の人を部屋に入れるのも初めて」

恥ずかしいような嬉しいような、そんな表情を浮かべている。

規律の中で育ってきた彼女にとってはちょっとした冒険のように思えるのかもしれない。

そんな初心な心根が感染でもしたのか妙に照れくさく、思わず目を逸らしカップに口をつける

。

温かい紅茶が胃に流れ込むと気持ちよく身に沁みて、改めて冷え切っていた自分の体を自覚した。

ようやく人心地がついた気分でコートを脱ぎ無造作に後ろに押しつけると、ユキコは当たり前の様に立ち上がり、コートを拾い上げハンガーを取出し壁に掛ける。

几帳面にもしわを伸ばしている姿が妙にほほえましい。

何を見てるのと言いながら元の位置に座る。

どうも見過ぎていたようだ。

「そーいやこのところ連絡無かったけど調子はどう？」

「調子は・・・相変わらずかな」

病気のことを尋ねるといつも辛そうに笑顔をつくる。

そんな姿が痛々しい。

「年が明けてからはちょっとダウンしてたの。年末は家の仕事で忙しかったからそれでかな」

どうも自分の体調を考えずに許容以上の仕事量をこなしていたようだ。

元々の性格に加え病気のことで引け目もあり、無理していたのかもしれない。

「まあ正月休みとでも思ってゆっくり休め」

たぶん気休めにもならない言葉だ。

何かの役に立ちたいと常日頃強く願う彼女にとって現状はもどかしさで身を切る想いだろうことは理解している。

かける言葉を探す間の沈黙のなか、ユキコの体が大きくよろけた。

咄嗟に手を伸ばし支えようとするが、すぐに回復したように姿勢を伸ばして顔を上げる。

「ごめんね、ちょっと眩暈がしただけ」

明らかに大丈夫じゃなさそうな顔で大丈夫だよと笑いかける。

考えてみれば謙虚な彼女が「ちょっとダウンしていた」だ。

現実には体調を崩し起き上がれず寝込んでいたことを指すのに等しい。

そして今も尚その状態であり、表には出さないように努めていたことを今更ながらに気付いた

。

「調子が悪いなら早く言えよ」

「・・・余計な心配をかけたくなかったから」

実は座っているのも辛いと、ここでようやく申し訳なさそうに小さく呟いた。

呼び出された時点で心配はしているわけで、今更の気遣いだ。

この辺りは根本からズレているとしか言いようがない。

性格か病気の所為かはこの際問うまい。

「もう大人しく寝ときな」

問答無用で抱きかかえる。

ひとりで立てる、歩けると抵抗はされながらも無視して運びベッドに下ろすと、ユキコはむくれたような顔をしながら布団に潜り込んだ。

ベッド脇の床に腰を下ろして布団の中のユキコの手を握る。

「今夜はずっとこうしてやるから安心して寝てろ」

思いつく限り紳士的に振舞おうとは思っていた。

どうせ不安になって呼び出したはいいが、どうやって一晩ふたりで過ごすかまでは考えていないのだろうと高をくくっての配慮だ。

元々今回の訪問に何かを期待していたつもりもなく、彼女の宗教的倫理観をまた無用に刺激しないように初めからこうするつもりだった。

「ずっとそうしているつもり？」

「おう」

おあつらえ向きに暖房はついていることだし寒ければコートを羽織ればいい。

座りながら寝るのは学生時代の授業中の要領で慣れている。

下手をすれば疲れていたこともあり、このまま彼女よりも先に寝てしまいそうだ。

「・・・こっちにきて」

手に引っ張る力が加わった。

「無理するな、これ以上は・・・」

「いいから・・・横にきて」

どうしたものかと迷いはした。

それでも特に固辞するほど固い決意だったわけでもなく、言われるままに布団の中に潜り込み腕枕などしてみる。

彼女の頼みでもあり、このくらいまでなら大丈夫だろうと判断しておく。

「これでいいか？」

「・・・電気消して欲しい」

なら布団に入る前に言え、とぼやきながら照明の灯りを消しに布団から出ると、ユキコは寝たままの姿勢でエアコンのリモコンに手を伸ばして停止のボタンを押しながら、寝る時には真っ暗にするから、と注文を付け加える。

言われた通りに垂れ下がる紐を三回引っ張って完全に消灯してから、再度布団に潜り込んだ。

そのやりとりの間、隠しているつもりなのだろうが、かなり調子が悪いことは声に含まれた響きで嫌でも気付く。

何が出来るわけでもなく、大したことも思いつかず、馬鹿の一つ覚えのように向かい合うように抱き寄せて背中を擦り始めた。

嫌がる素振りも無くされるがまま、自分から身を寄せ、体を密着させて足を絡ませてきた。

鼻腔をくすぐるシャンプーの香りと、薄い布越しからも感じる肌の温もりと感触。

自重していた下腹部の男の部分が彼女の太腿の位置で次第に固さを増していた。

さすがにユキコも何が当たっているのかに気付いたようで少し身を固くする。

「襲ったりしないから安心しろ。気になるなら少し離れたほうがいいぞ」

健全な男子の反応で、こればかりはしょうがない。

行為に及ぶつもりはないとはいえ反応に抑えが効くほど下半身とは従順なものではないのが厄介だ。

とりあえず身を離そうとした。

気にしない、とでもいう風にユキコは無言のまま、改めて体を密着させて胸に顔をうずめてきた。

「先生は私の、宗教のことがあるから我慢してくれてるんだよね・・・」

苦笑で答える。

困ったことに元々それほど禁欲的でもない。

確かに宗教を考えなければ、この状況なら遠慮なく頂いてしまう自信があるので否定が出来ない。

それでも彼女に対しては結婚しない限りその行為に及ぶことが出来ない、許されないことは言われるまでもなく理解しているつもりであり、何を今更と背中を擦り続けて聞き流す。

「でも・・・今は忘れて・・・我慢しなくていいよ」

その言葉がどういう意味をもつのか理解するまで数瞬かかった。

背中を擦る手を止め頭の中を整理する。

「いいのか？しても」

たいがい野暮な台詞だが、相手が相手なだけにおもわず聞き返す。

「・・・してもいいなんて言えないけど・・・」

けど、に続く言葉は肯定にしかないだろうが口にはしない。

それでもキリスト教に縛られた彼女にとっては、それが言葉に出来る限界であることは容易に察することが出来る。

目が慣れてきた暗闇のなか、胸の中で顔を上げたユキコと目が合う。

その表情は不安と幾らかの怯えを浮かべながら、それでもその真っ直ぐな眼差しに意志は固く、強い決意を込めていた。

顔を近づけるように体を動かすと抱きしめていた腕から緊張が伝わる。

熱く荒い吐息を感じる距離までゆっくりと近づく。

目を閉じた彼女に唇を重ねると受け入れ、呼応するかのように舌を絡ませる。

幾度口づけを繰り返しただろう。

初めの頃はぎこちなかった舌の動きが今では滑らかにこちらの動きに反応し、時に驚くほどの技巧を見せ、貪るように求めている。

飽くことなく続けられる行為の中、まるで離れるのを恐れるかのように身を摺り寄せ、いつのまにか背中にまわされた彼女の腕には、感情の昂ぶりと共に次第に力が込められていくのを感じ

じる。

熱く火照ったユキコの肢体を強く抱きしめ、その頬から首すじに唇と、舌をゆっくりと這わせていき、なかごろで大きく吸う。

「あっ・・・」

身体を起こしてユキコの髪を撫でる。

「やっぱりやめよう」

「・・・え？」

呆気にとられた表情が暗闇の中で浮かぶ。

「どうして？」

「さっきから震えっぱなしだ、それに・・・」

親指で目の下の頬を拭う。

我ながら気障な振舞いだ。

「こんなこと、泣きながらするもんじゃないだろ」

我慢していた、それでもこぼれていた涙だった。

張りつめていた糸が切れ、堰を切ったように涙を流して声をあげながら泣きじゃくり始める。

深夜に響くその声が隣近所に聞こえないか、それが心配だった。

腕の中でユキコが落ち着きを取り戻したのはかなりの時間が経ってからのことだった。

「随分らしくない真似をしたもんだ」

あれから背中を擦り続けていた所為か少し腕が怠い。

「だって、私には何もできないから・・・」

思い詰めたように口を開く。

「先生は優しく、色々としてくれて、私は迷惑をかけっぱなしなのに・・・」

好意による優しさはいつも不安が付き纏う。

行動に見返りを求められるのは怖い。

それは過去のストーカー行為により受けた心的外傷に含まれる。

「あれだけしてやったのに」は男の動機の言葉だった。

「最初は先生に優しくされることも不安だったの」

それが杞憂だったと分かる頃、あまりにも相手の優しさに甘え頼りきっていた自分がいたことに気付いた。

想いに応えたい、その気持ちに報いたい。

それでも交際は、結婚は出来ない。

そのことが相手の為に何かしたいと言う心に歯止めをかける。

関係を断つことが出来ずに、甘えたままでいる弱さが嫌だった。

清算を決意し、最後に何かを遺してから終わらせようとした。

出来ることは思い浮かばずに、その時初めて今の自分自身には何も無いことに気付いた。
病のこの身体しかなかったと彼女は語った。

「今の私には・・・これしかないから」

悲しそうに眼を伏せる。

「一度だけ先生の好きなようにして貰って、できるか分からないけど終わりにしようと思ったの。
そうしたらあとは一生独りで生きていくつもりで」

「独り？」

「相手は同じクリスチャンの人じゃないと、っていうのは変わらないの。だけどそう言っても、
こんな病気の人もらってくれる物好きもないでしょ。だから結婚は諦めたの。だから・・・」

背にまわしてきた腕に再び自らの決意を示すかのように力を込める。

「だから・・・先生、続けて」

断る理由は無い。自らの意志で抱かれることを選んだのだ。ここまで言われて相手に恥をかかすこともないだろう。抱いたからといって責任を負う必要もない。

そんなことを考えなかったと言えは嘘になる。

それほど人間が出来ちゃいない。

それでも答えは決まっていた。

「やめとく」

男としての機能に問題があるわけでもない。

「どうして・・・もう泣かないから」

そう言いながら今にも泣きだしそうな表情で顔を上げる。

「それともこんなになった私じゃ、する気も起こらない？」

痩せ細った身に乾いた唇と肌。

いつ始まるか分からない発作といつ終わるか分からない鬱。

まるで価値が無いとでも言うように自分を卑下して諦観したような言葉は、これまで独り悩み苦しんだ悲痛な想いの叫びにも等しい。

だからこそ出来るわけがない。

「したいのは山々だけどね。でもそいつは結婚してからの楽しみにとってある」

「結婚はできないって言ってるのに・・・だから・・・」

切実な眼差しと目が合い、静かに呟く声が耳に届く。

「希望を持つのは自由だろ？まかり間違っただけで添い遂げる可能性も無くは無いんだ。その時は気兼ねなく、この身体を思う存分楽しませて貰うつもりだから楽しみにしておけ」

背中をポンとたたく。

慰めることより未来を語ることが彼女の救いになるような気がした。

「だからお前は気兼ねなく処女のままでいればいい。ちゃんとヴァージンロードを胸張って歩け」

るようになってな。こいつはもう俺自身が決めたことだ」

それでもまだ彼女は続けることを止めなかった。

「でも私がもう会わなくなったり他の男の人と結婚したらどうするの？報われなと思わない？
そうになったら幾ら先生でも恨んだり憎んだりするでしょ？だからせめて一度だけでも・・・」
だから身体を許して免罪符の代わりにでもしようというのか。

変わる事のない哀切の願いを断ち切るように一度、唇で口を塞いだ。

言葉を発することが出来なくなった代わりに涙が溢れ出したユキコから、ゆっくりと身体を話して静かに、穏やかに尋ねた。

「お前は俺のこと、まだ好きか分からない？」

まだ彼女は頑なに言葉にはしたことが無い。

「こんな時に何を・・・」

今迄は分かりきっていたことだから追及する気も起きなかったが今は違った。

「答えて」

濡れた頬に手をあて真っ直ぐに見つめると、躊躇いながらも口にした。

「好き・・・かもしれない」

「愛してる？」

「・・・愛してる・・・とおもう」

初めて口にした言葉に恥じらうように目を伏せる。

「充分、その言葉で報われた」

呆気にとられたように顔を上げる彼女が愛おしい。

「見返りなんてその言葉で充分、もっとも言わせなくても分かったから今迄も報われていたけどな。だからそれ以上を望むってのは、それこそ過ぎた話だ」

愛したことだけで幸せになれていた、愛されていたことでなお報われていた。

「俺も、愛してる」

今はただそれだけを伝えたい。

「愛して、愛されて、それで充分だ。例え今の関係が一生続いても、愛し続けることを約束する」

再び声をあげて泣き出す彼女が落ち着くまでには、また暫らく時間が必要だった。

「ごめんね、もう大丈夫」

パジャマの袖で涙を拭うその顔に、今は穏やかな表情が浮かび始めている。

「大体散々事前説明されているんだ。今更お前がどんな結末を選ぼうと恨みやしない、それこそ余計な心配ってもんだ」

「信じていいの？」

もう疑っての言葉ではなかった。

「おう、だからもう二度と変なことは考えるなよ。その代り今日はキスなら飽きるまでしてやる」

から、それで我慢してくれ」

我慢なんて、と少し怒ったように反論しかけた口を唇で塞ぐと、すぐに応じるように自ら積極的に求め始めてきた。

まるで何か吹っ切れたかのように。

腕の中で全てを委ねるように身体を預ける彼女が愛おしく強く抱きしめたと喘ぐように囁く声が耳に届いた。

「せんせい・・・あいしてる」

まだ陽も昇らぬ冷え込みの厳しいなか、街灯に照らされながら接骨院へと帰る道筋を辿る。

午前五時頃の人気のないうちにユキコの家を出たのは、両親が何時頃か分からないが朝方に帰ること、ご近所の目のことも考えてのことだ。

寝不足気味の霏がかかったような頭で昨夜のことを思い出すと随分と恥ずかしい台詞を連発していたものだと赤面する。

あまり深夜に語るような真似をするもんじゃない。

妙な高揚感は気分流されて碌でもないことを口走る。

それでも帰り際のユキコの表情を思い出せば、それなりに甲斐はあったのかもしれないと前向きに考えてみることにした。

「最近は調子がいいみたい」

発作が出ることが少なくなってきた、そう近況を説明するユキコの表情は明るく、以前のような屈託のない笑顔が戻り始めてきたように感じる。

このところメールや電話、接骨院に来る回数も増えだし、大したことを話すわけでもないが明るい話題が多くもなってきた。

小さな声で体重が増えてきたとの報告もあった。

食欲も幾らか戻り始めたこともあり顔色も前に比べて随分いい。

一時期寝込んでいたこともあって体力が落ちているとはいえ、家の仕事の手伝いは出来るようになってきたとのことだ。

以前の彼女に戻りつつある。

すべては自分のおかげ、などと考えてはいない。

彼女自身の病気の克服、家族や周りの人間の支え、もしかしたら少しばかりはキリスト教の支えなどもあったかもしれない。

それでもあの夜を境にであれば、幾らかは自分の功績もあったと自惚れても構わないだろう。

自惚れついでに考えれば二人の関係も随分距離が縮まったような気もする。

その態度や言動から今まで感じていた壁の様なものが無くなり、まるでさらけ出すかのように心を許している様にさえ感じる。

宗教の問題が片付いたわけではなく、未だに周囲には関係を隠しているとはいえ、表立っての交際宣言や結婚もそう遠い日の話でもないのかもしれないと夢想し期待してしまうほど、ユキコは大きな変化を見せていた。

まだ時折朝夕には冷え込みを見せる四月初旬の木曜日。

陽も落ちて暗くなった午後七時半頃。

接骨院内に今は患者が二人ベッドに入っていた。

片方に腰と右膝に低周波などの電気をあて、その間にもう片方の患者の手技に取りかかる。

こちらは寝違いのようで朝方から痛むらしい。

夜寝ている時や朝などの血が行き渡っていない身体の冷えた状態で筋肉に負荷がかかると、ちょっとしたことで筋肉の損傷は起こりやすいので注意が必要だ。

悪い状態であれば下手に揉みこむと悪化する恐れがあるが、軽い状態であれば力を入れない軽いマッサージで痛みも和らぐ。

無論それなりの技術は必要なので家庭でやるのはお勧めしない。

今日の患者であれば、ある程度痛みも消えそうなのでマッサージを選んだ。

押さえて痛くないかと手技を進めていると扉の開く音がする。

覗くとユキコのにこやかに手を振る姿があった。

最近では受付嬢のいない夜七時過ぎに来て、他に患者がいなければ受付終了の八時、それ以降まで居座り逢瀬を楽しむことも少なくない。

とりあえずしばらくお待ちくださいと接客仕様で対応し、ベッドに戻り手技を再開して五分が経った。

電話が鳴った。

受付嬢がいないから出なければならぬのだが、施術中は中断してまで出ることはいない。

すぐに留守番電話に切り替わるが、一分と経たずに再び電話が鳴り始める。

「すみません、しばらくお待ちください」

施術中の患者に断りを入れ電話に向かう。

いつもなら無視している。

予感があったのかもしれない。

「もしもし・・・おじいさんがたおれた」

取り乱し叫ぶような声は祖母の声だった。

脳出血で倒れてから、多少の障害は残ったものの祖父は元気だった。

身の回りのことも誰の手を借りるわけでもなく一通り一人で済ますことが出来ていた。

今日も七時になると風呂に入ると一人で風呂場に行き、とくにおかしな様子も無かったらしい

。

異変に気付いたのは叔母だった。

二十分以上経っても戻ってこない、いつも烏の行水の祖父にしては遅過ぎる。

風呂場に行くと祖父が意識を失い倒れていた。

救急車を呼び、とりあえず叔母だけが付添い市民病院へ向かう。

その後だった、祖母が電話をかけてきたのは。

手が空き次第帰ると答え、まだ死んだと決まったわけじゃないからとなだめて電話を切ってはみたものの、楽観出来る状態ではないだろう。

施術中の患者二人は終わるまで残り十分もかからない。

待合で座るユキコに近づき小声で事情を話し、帰らなければならないことを伝える。

「悪いな、せっかく来てくれたのに」

「私は大丈夫、それより先生こそ大丈夫？」

言われて初めて顔が強張っているのを自覚する。

「済まない、あとで連絡する」

祖母を車に乗せ市民病院に着き、薄暗いロビーでしばらく待つと叔母が姿を現した。

告げられた言葉に祖母が泣き崩れる。

祖父は死んだ。

取り乱すことは無かった。

八十を過ぎれば大往生だ。

とりあえず携帯電話で父に連絡する。

伝え、必要なことだけ決めた短いやりとりを終えると電話を切る。

明日の朝一番の電車で来るとのことを祖母に伝えるが、さすがにこちらは返事もままならない

。

死因をはっきりさせる為に解剖するかとの医師の問いに辞退し、簡単な説明と手続きを終えると、祖父の遺体を納めた棺は葬儀屋の用意した車で家に運ばれる。

感傷に浸る間もなく葬儀屋との打ち合わせは始まり進む。

悲しみに落ち込む気分を紛らわすには、確かに休むこと無く慌ただしく葬儀の打ち合わせや準備に追われるのはいいかもしれない。

とはいえ早急に相応の物や手間が必要であるから頼らざるをえないのは事実だが、浮足立った遺族へ矢継ぎ早にプランやオプションを薦めてくる葬儀屋に煩わしさを感じないわけでもない。

もっとも嫌なら本人と生前細かく決めて手配をしておくべきであるから文句を言っても始まらない。

一通り決まり葬儀屋は帰り、叔母と二人きりになると緊張の糸が切れた様に倦怠感に襲われる

。

時計を見ると十二時近い。

祖母は病院から帰るとそのまま寝室に入ったが、寝ることが出来たのだろうか気にかかり、しばらくして部屋を覗きこむと微かな寝息が聞こえたので胸をなでおろす。

あとは接骨院に戻って片づけ、通夜と葬儀がある以上二日は院を休む必要があるからシャッターに貼り紙でもしておかなければならない。

そのまま接骨院に泊り朝帰ってくると、叔母に告げて家を出た。

接骨院に着き、何げなく携帯電話を確認するとユキコからメールがきていた。

余程心配かけていたようで、大丈夫かと不安げな文章が液晶画面に映し出される。

祖父が他界したことを返信すると間をおかずに電話が鳴った。

「悪いな、起こしたか」

とっくに寝ているものだと思っていた。

「ううん、寝れなかったから起きてた」

もしかしたら寝ないで待っていてくれたのかもしれない。

改めて祖父が他界したことを伝える。

「結局生きてる間、大したこともしてやれないまま逝っちゃった」

気が緩んできた所為か自嘲めいた愚痴が口をつく。

「でも最後に先生と一緒に暮らせていて、お祖父さんは幸せだったと思うよ」

慰めの言葉に今はすがりつきたくなる。

「ああ、そうならいいな」

何かが胸にこみあげてくる。

心の弱さを曝け出しそうになる。

なんとなく意地を張り誤魔化すように、事務的に今後の予定、明日は通夜で明後日は葬儀であるから金・土、そのまま日曜日と院は休むことを伝える。

「月曜に再開するからまたおいで、その時に今日の埋め合わせはするよ」

「そんなこと気にしなくてもいいよ、それに今日はそれほど体調は悪くなかったから」

こんな時に不謹慎とでも思ったのか、会いたかっただけと申し訳なさそうに小声で呟く。

こんな時でもその言葉は嬉しい。

そんな今の気分を紛らわしてくれる他愛のない会話をまだ続けていたい気持ちもあったが明日の朝は早い。

これから接骨院の片づけもしなければならぬからと告げ、名残惜しいが切り上げる。

疲労が気力と余裕を奪っていた。

「無理しないでゆっくり休んでね」

気遣う普通の言葉がやけに心に沁みた。

そのまま掃除を始める気力は湧かず、治療用のベッドに横たわる。

やめておけばよかった。

疲労の溜まった躰が一気に虚脱状態に陥り、指先ひとつ動かすのも億劫な気分であら暗い天井を見上げた。

じわりじわりと滲み出るように悲しみが湧き上がり口煩かった祖父の顔が浮かぶ。

一緒に暮らし始めて七年が過ぎていた。

接骨院もそこそこ軌道に乗り、これから孝行でもしようかという時だった。

何もしてやれなかった、そんな思いばかりが頭に浮かぶ。

飯を食いに連れていったり、たまに遠出をしたり、家に帰ればマッサージなどをしたりはしていた。

そんなささやかな積み重ねが孝行なのかもしれない。

それでも今はそれが孝行に値するものだったかわからない。

今の自分を納得させるにはまるで足りないような気がした。

ただ何も出来なかったと罪のように自分を責め後悔することしか出来なかった。

何かしてやれていたのだろうか。

死のあとでは何の意味もない後悔は更に続く。

知らず、涙がこぼれた。

大した睡眠もとれないまま朝を迎え、八時過ぎに家に戻った。

しばらくすると父と母が到着した。

朝早くに出て高速道路を数時間、離れて暮らしているところな時が大変だ。

父が長男であるから当然喪主を務めるため、休む間もなく葬儀屋と今後の段取りなどの打ち合わせを始める。

次第に近所からは祖父の親戚縁者が手伝いにと集まり始めた。

近くにこれだけよく居たものだが、この辺りの人間関係には関与していなかった為、挨拶をし相槌は打つものの誰が誰だかさっぱり判らず多少の煩わしさを感じる。

それでも傍らで交わされる祖父の思い出話はどこか耳に心地よかった。

祖父の葬儀は当然ながら仏式で執り行う。

やはり葬儀などは一番宗教色がでそうなものだが、形式化されている為、どの宗教も基本的な流れは変わらないようだ。

通夜などもキリスト教には無いものだが「柔軟な対応」により一般の参列者の為に行うこともある。

勿論細かな違いは幾らでもあり、言葉からして「成仏」「供養」などは仏教用語として神道・キリスト教などでの使用は厳禁とされているなどがある。

通夜は近所の斎場で行った。

本来通夜は夜遠しで行うらしいが、今では一般客を招き午後六時頃から始めて数時間で終わる半通夜が一般的である。

遺体と共に斎場に移動すると、ただっ広い和室の控室で祖母と一緒に茶をすする。

会場の用意は業者が、受付は親戚が、弔問客への対応は喪主である父と叔母がしているので特にすることも無く手持無沙汰にくつろいでいた。

葬儀が始まる三十分前になると叔母が来て祖母を手洗いに連れて行く。

そろそろ式場に入らなければならないが、独りになったところでその前にと外の喫煙場へと向かう。

辺りはもう薄闇に包まれ始めていた。

正面の入口は照明の光が眩しく、背を向けて少し離れた喫煙所で煙草に火をつけ、苦い煙を吐きながら何気なく顔を上げると見覚えのある車が目に留まった。

駐車場を越えた道路の脇、数十メートル先の街灯から少し離れた暗がりに浮かぶ白い車体、ガラス越しのかろうじて女性と分かるシルエットが妙に気にかかる。

あれは・・・

「兄さん」

背後からの声に不意を突かれて心臓の鼓動が跳ね上がった。

振り向くと、妹だった。

「なんだ、お前か」

地方で働いている妹は仕事が休めそうになく、来れるかどうか分からないと聞いていた。

どうにか今日は昼から休めたらしいが、それでも通夜が終わればそのまま帰ららしい。

忙しい話だ。

「なんとか間に合って良かった。そろそろ時間でしょ？はいろ」

煙草を消して歩き出した妹を追いながら、確かめようと後ろを振り返ると、もうその車は消えていた。

思い過ごしだ、似たような車など幾らでもある。

通夜が始まり会場に読経が響き始めた頃にはそれも忘れ、焼香の手順を思い出すことに努めていた。

翌朝目を覚まし居間に向かうと、父と叔母が葬儀屋相手に葬儀のあとに僧侶に支払う戒名料がどれくらいかかるのか聞いている。

「相場では・・・」などと曖昧に返すあたりが気にかかる。

戒名料など初めから決めておけば余計な気を遣わせずに済むだろうに、と朝から苛立つ。

【 戒名とは本来生前に戒を受けて仏門に入った者に与えられる名前であり、元のインドには無く中国で発生した風習である。キリスト教で洗礼を受けた際に授かるクリスチャンネームと同様の性質のものだったが、これがいつの間にか死後に付ける名前として定着したらしい。

意味合いが変わった理由に、死ねば誰でも仏になるという思想や、信者でない者を仏式の葬儀で行う為には死後戒名を授け仏門に入ったことにしてから行う必要があったことが挙げられる。

どちらにせよ後付けの理由に過ぎず、戒名をつけなければ成仏出来ないなどと言うことは無く、ましてや高い金を払い、文字数を増やしたからと言って極楽に行けることなどありえる話では無い。

坊主の小遣い稼ぎのようなものだ、と断ずるのは穿ち過ぎだろうか。】

時間になる頃には親戚も集まり、僧侶が到着すると葬儀・告別式が始まる。

僧侶は風邪でも引いているのか読経の途中で度々咳き込み中断する。

掠れた声が耳障りに感じ、祖父の死に疲れた心が苛立ちを始める。

意味の無い戒名に金を取り、肝心の読経はこの体たらく、この僧侶に本当に死後の世界を信じているのかを一度聞いてみたい。

全てとは言わないが、今時の僧侶などは宗教と言う空想産物の既得権益の上に胡坐をかき、分かる筈も無い死後の世界をさもあるかのように語り商売とする欲にまみれた俗物くらいの認識しかない。

勝手にすればいいと普段なら関心も無いが、身内の葬式なら粗が目立てば腹も立つ。

気分は悪いがそれでも場をわきまえなければならぬ。

面に出さず、口をつぐみ、ただ大人しく祖父を偲びながら早く読経が終わることを待ち続けていた。

葬儀を終えると火葬場に向かい遺体を火葬する。

肉体が焼かれ小さな壺に骨が納められると、何もかも終わったように寂しさと悲しみが胸に去来した。

その後精進落としの食事を終え、親戚が帰り、父と母も帰る。

叔母は疲れたからと自室で休んでいる。

あまり寝ておらず、率先して雑務をこなしていたので無理もない。

残された居間に祖母と二人でソファーに腰を下ろして一息ついた視線の先に肘掛椅子が目に映り、空っぽの椅子の風景にいつも座っていた祖父の姿が想起された。

全てを受け入れるにはまだ時間が足りない。

「そういえばお塩でお浄め忘れてたわ」

思い出したのか疲れた声で祖母が呟く。

【 清め塩とは死を「穢れ」とする神道の風習にあたる。

一般的に行われているが本来死を不浄としない仏教・キリスト教には無い風習である。

またこの風習自体戦後からのようで、やらなければならないようなさしたる根拠や歴史は無い。】

「もう手遅れだからいいだろ」

家の中に穢れを入れないよう玄関先でやるものだ。

そんなことより肩でも揉むかとテレビを点けて祖母の背後にまわりこみ、首や肩に触れるといつも以上の張りを触知する。

当たり前の話だ。

夫と死別した祖母が誰よりも悲しみが深く、また高齢の身体には負担が大きい。

ここ二日で急に老け込んだような祖母の小さな背中は今なお泣いている様に見えた。

葬式などは結局遺された人間の為のものなのだろう。

故人を偲ぶ場、準備の慌ただしさで遺族の悲しみを紛らわせる場、そしてその人間が死んだことを認め成仏・往生・昇天・帰天したと納得させる為の場で、生きている人間の自己満足に近いように思う。

故人の為などおこがましい。

だからと言って余計なことを口にして「自分の葬儀の時はどうなるのだろう」などと祖母や親達を不安にさせるつもりは無く、とくに要望が無ければ逝ったあとは一般的な葬儀を行うつもりでいる。

それでも自分が死んだあとのことなら葬儀は不要にして貰いたいとおもう。

読経も、戒名も、仏壇も、何もいらぬ。

ただ火葬場で焼いて墓にでも入れてくれたらいい。

身内だけで見送ってくれたらそれでいい。

気になるなら般若心経でも唱えてくれたらいい。

どうしても戒名を付けたければ本やインターネットで簡単に付けることが出来る。

祖父の葬儀に初めて自分の死後のことを真剣に考えてみた。

【日本の葬式費用は世界一高い。

他の国では数万から高くても数十万程度である。

これは偏に宗教団体と葬儀屋の営業努力の賜物なのだろう。

過剰な装飾、不自然なほど高価な道具類、式においては日本独自の慣習や風習を寄せ集めてさしななければならないように様式化されたことで更に費用は跳ね上がる。

まるで金をかけることが供養とでも錯覚させ、死んでから墓に入れるまで、そしてその後も見事なまでに金を吸い上げる流れを構築してある。

非難・否定をしづらいのは葬式の在り方を問題にしているにも拘らず、そのこと自体が故人に対する不敬や冒瀆とも捉えられ論点がすり替えられることにあり、まるで型通り行わなければ悼み弔う気持ちまでもが故人に伝わらないかのように逆に責められるからだろう。

またここで「ならどうすれば故人が安らかに逝けるのか」といった疑問も出てくるのだが、突き詰めれば死後のことなど証明出来るわけもなく、ただ推測による水掛け論に無意味な時間を浪費することになりかねない。

他に確実な証明が出来ない以上、不安であれば、結局臆面も無く死後の世界を口にしてしている宗教にすがり既存の様式で葬式を行うより他ないのが不幸な話だ。

とはいえ宗教を排すると割り切れるのなら「直葬」という方法がある。

死んだあと、余計な儀式をすることなく火葬場に送るといったもので費用も二十万円前後で済むらしい。

注意という程ではないが、特定の伝染病以外は死後二十四時間を経過しないと法律上、埋葬・火葬は出来ないなのでその間は安置しておく必要があることや、菩提寺などがある場合はそこで葬儀を行わないと墓に入れて貰えないなどと狭量なことを言い出すところもある。

これだとあまりにも素っ気無いというのであれば、親族・家族・親しい知人のみで行う家族葬や、自由に内容を決められる無宗教葬・自由葬などもあるので選択肢もあることはある。

宗教は嫌いどうでもいいとはいえ、遺された者のことを考え、負担にならないように生前から自分の葬式を決めておくことも必要なのかもしれない。】

【日本の仏教では故人の魂は四十九日間あの世とこの世の間に留まり、七日毎に生前の罪の裁きがあり、四十九日目に最後の審判が下されて極楽行か地獄行か決まると考えられている。

この間を「中陰」と言い、罪を軽くし善行を増やす為に行うのが追善供養である。七日毎に法要を行い四十九日目「満中陰」を境に忌明けとする。】

祖父の四十九日の法要も終わり納骨も済ませた。

ユキコとは祖父が他界した時の電話以来、来院も連絡も無い。

相変わらず自らが連絡をとろうとするのは「こちらからしない」と約束したことが枷となり、また今の自分の心理状態では、祖父の死による心の隙間に彼女を求めるような気がして抵抗があり出来なかった。

意図的ではないにしろ弱音を口にして相手の気を引くような真似などしたくはないと、妙なところで意地を張る。

どうしたのか気懸かりもあったが、このところ祖母の体調が急激に落ち込み、そこまで気がまわらなかったことも事実だった。

祖母には祖父が死んだ翌日から毎晩一時間ほどマッサージを含む施術をしている。

接骨院を終えて家に帰ってから祖母の施術で夜十時をまわり、休みの日は祖母に付きっきりの生活に他のことをする気力も体力も失われていた。

なにしろ祖母の精神的なショックと肉体の疲労は激しく、何もしなければおそらく倒れるだろうと、冷静に診立ててもそう思う程にその身体は衰弱していた。

一般的には夫が死ぬと妻は元気になり長生きすることも多い。

これは夫に抑圧された生活から解放され自分のやりたいことが出来るようになる為や、女性のほうが社交的あること、元々家事などで日常的に身体を動かしていることなどが考えられる。

しかし祖母は取り立てて趣味や生きがいを持っていなかった。

併せて内向的の性格は祖父の死により塞ぎ込んだ精神をさらに落ち込ませていた。

両膝が悪いこともあって病院以外の外出を嫌う。

まだ家の中のことでも出来ればいいのだが、氣遣ってか叔母が家事の一切を取り仕切ってしまった。

祖母の「仕事」が無くなる。

もっとも叔母も祖母の為にといい、またそうすることで自分自身の悲しみを紛らわしているのだからあまり文句も言えないのだが、今迄日常行っていた食事や洗濯など「誰かの為に」などといった僅かでも遣り甲斐を感じ、立ち直るきっかけにもなりそうなものまで奪ってしまうのはやはりいい影響は与えない。

落ち込み、することのない生活は毎晩の施術にも拘わらずその身体に悪い影響を及ぼしており

、運動不足に手足はむくみ、内臓機能の低下で便秘などが現れ、体自体は疲れることがない為眠りは浅く睡眠不足、土気色の顔に目の下の隈は濃い。

祖父に続き、そんな不安を胸に抱きながら、後悔だけはしないように持てる知識と技術を使い出来ることをするしかない祖母に対して施術に励む。

図らずもそれは自分が立ち直るきっかけになり、四十九日を迎える頃、まだまだ祖母は身体の回復や悲しみが癒えるまでに時間がかかりそうだが、自分自身はこの日常によりやく慣れ始めていた。

依然ユキコから音沙汰は無く、症状の回復を見せていただけにどうしたのか気懸かりだった。

キリスト教の彼女が祖父の為に喪に服し、忌明けを待っていたわけでもないだろう。

情報提供者に足りえる弟のコウスケは接骨院に来ている。

交通事故のムチウチの回復に信頼を得たようで、その後も度々何かあれば人懐っこい顔で保険証を片手にやって来ていた。

患者に、その家族についてこちらから尋ねるなどプライバシーに立ち入る様な真似は普段なら極力避けてはいるのだが、それこそ彼以外に聞けるような相手はいない。

施術中他に患者のいない時を見計らい、さりげなく聞いてみることにした。

「ああ、ねーちゃんならここンところ、ずーっと部屋で寝込んでますよ」

また、精神疾患が悪化した。

発作は頻繁に起きるようになり鬱状態が酷い。

食事もまともに摂れないような状態が続いている。

「宗教なんかやってるからおかしくなるんスよ」

そんな突き放した物言いでも、その声に隠せぬ姉への心配が、不安を纏って響いていた。

「何かあったのか？」

「分かんないスよ、母ちゃんは何か聞いているみたいなんですけど。こっちには何も説明してくれないもんスからね・・・」

弟には私たちの関係のことは黙ってて、そんな台詞を言っていたユキコの気持ちを考えれば、確かに詳細は聞かせにくいだろう。

「とにかく四月から急におかしくなったんスよ。ホントに何があったんスかね」

どこかで予測していた症状の悪化、祖父の通夜直前に見かけた白い車がユキコだったと何故か今は確信している。

頭の中で全ては繋がり一つの推論が成立した。

祖父の死後、ユキコに対してひとつ懸念があった。

結婚を僅かにでも考えていたかもしれない相手の近親者の死が彼女に与える影響についてだ。

異なる宗教の「死」に対する異なる概念が色濃く浮き出たこの時、彼女は何を思うだろうと。

葬儀の場に居ながらも車から出てくる事が出来なかった。

その後の症状の悪化が答えを示している。

受け入れられなかった。

そして姿を見せなくなったのは決めたのだろう。

結論として、それは彼女が恋慕を諦め宗教を選んだことを示していた。

【 死に対する概念は宗教によって大きく違い、例を挙げるなら基督教の「復活」と仏教の「輪廻」「成仏」が代表的だろう。

基督教においてはキリストが再臨する「最後の審判」の日に全ての死者は甦り、永遠の命を与えられ天国に迎えられる者と地獄に墮ちる者とに分けられる。この復活には魂だけでなく肉体も含まれている為、葬儀の際には火葬を嫌い土葬にすることが多い。

これらは死後から最後の審判までの間は各教派によって解釈の違いがあるとはいえ、聖書にもある基督教の統一した見解であるようだ。

仏教になると特に日本では極楽や地獄といった概念で通っているが、これには神仏習合による神道の影響や基督教の天国と混同されており、明確な定義を求めるのは難しい。

あくまで日本における仏式の死後の定義を考えれば、ひとつに「輪廻」の言葉のように生き死にを繰り返し生まれ変わる事。もうひとつの「成仏」とは悟りを開いた仏に成るというよりは死後そのまま極楽浄土に往くことの意味合いのもの。これについては行いにより地獄に送られることもある。

仏教は混合された思想が、更にそれぞれ宗派や民間の解釈の上に成り立っている為、統一された見解は無いように思える。】

ユキコはあまりにも宗教に真面目過ぎた。

基督教では死後、最後の審判で選ばれれば個の存在を有したまま永劫に尽きぬ肉体を持ち楽園に迎え入れられる。

宗教の意義を未知である死後の不安や恐怖に対して道を示すことが出来ることに他ならないと考えれば、彼女はただその一点を信じているからこそ、聖書を読み、信仰して、戒律を守っているのだろう。

そうやってユキコは穏やかに聖書を信じていた。

二人の出会いで綻びが生じた。

最後の審判の日に選ばれる為にひたすら日々を務めてきた彼女にとって、その恋愛を成就することが約束された楽園を失うことと同義だとすれば、そこにどれだけ不安と恐怖を覚えるのか計り知れない。

加えて彼女が、無宗教の愛する相手が地獄に墮ちることに恐れを抱いていたと考えるのは自惚れだろうか。

「今生で無理なら来世で添い遂げよう」と言った時、来世など信じていない彼女がどんな気持ちで聞いていたのか、今は知る術は無い。

宗教と恋愛の間で悩み苦しむ、精神疾患で己の死を考え、客観的に異なる宗教の死を見たことで、ようやく彼女は自分自身の答えに辿り着けたのだろう。

そして天秤は宗教に傾いた。

だからこそ改めて想いを断ち切ろうと決意した結果が、彼女の現状であることに疑いはなかった。

もう来ることはないだろう。

確信めいた予感が、吸い込んだ煙草の煙と共に胸に広がるのを感じた。

九月の下旬。

祖母が体調を崩したり、叔母と口論があったりとはいえ、とりあえずは大した問題も無く、接骨院も順調で平穏な日常が続いている。

ユキコからの音沙汰がない日々は、それでもまだ平常心を保っていた。

確信と言っても勝手な推論、面と言われたわけでもなく、長く姿を見せないことも珍しいことではなかった。

今でも心変わりを期待し、再び姿を現してもおかしくない、まだ希望を持っていた。

完全な終わりを認めたくはなく、現実から逃避していたのかもしれない。

それでもそんな楽観的な観測は久しぶりに姿を現した弟コウスケの、悪気無い一言で打ち碎かれた。

「ねーちゃん、婚約したんスよ」

その男が姉の見舞いに現れたのは七月頃だった。

彼女と同じキリスト教の団体、コウスケも昔から顔は見知っていた男だった。

それから毎日のように見舞いに来ていた。

そこで何があったのか知らない。

九月に入り突然母親から姉が婚約したことを知らされた。

「それで三ヶ月後には結婚って話ッスから、何考えてるのか分からないッスよ」

コウスケが施術中でベッドにうつ伏せでいることが幸いした。

今の顔を見られたくはない。

「お姉さんの体調はもう大丈夫なのか？」

情けなくも動揺し、幾らか上擦った声だが気付かれてはいないようだ。

「まだ寝込んではいらぬみたいッスよ。あんなんで大丈夫なんですかね」

それでも一時期よりは回復した、食事の量も増え、時折家事をする姿を見かけると言うコウスケの言葉に安堵し、まだ相手を気遣う余裕のある自分に安心する。

早過ぎるとはいえ彼女が同じ宗教の相手と結婚をすることなど予測の範囲内だった。

これが彼女の決めた未来ならただ受け入れるだけ、そう決めていた筈だ。

それでも思考とは裏腹に心臓の鼓動がやけに早く聞こえる。

口の中は乾き、手が微かに震えていることに気付く。

鳩尾の辺りに僅かな痛みが走る。

平常心と言う名の仮面を被り直すには、今しばらくの時間が必要だった。

シャッターを下ろして、急な用事が出来たから今日は泊ると電話に出た叔母に告げる。

とてもじゃないがこんな気分では帰れない。

冷蔵庫から常時冷やしてある缶ビールを取出し一気に飲み干す。

空きっ腹の所為かやけに胃に沁みるのを堪えながら続けて煙草に火をつける。

二本目のビールを半ばまで飲んでも酔うことは無かった。

接骨院の目の前の路を時折通る車の音しかしない部屋の中で、椅子に身を任せ、中空を見上げて放心する様は傍から見ればさぞ滑稽だろう。

これでユキコは幸せになれるのだろうか。同じキリスト教同士の結婚は彼女が自ら望んでいたものだ。相手も昔ながらの宗教屋で知らない仲じゃあないらしい。それでも本当にこれは彼女の望んだ結果なのだろうか。鬱で弱った心に耐えかねて逃げただけなのではないか。弱った心に付け込まれての結婚なのではないか。彼女は本当に愛した相手と結婚するのだろうか。

客観的にみれば精神疾患を患った相手を嫁に望んだのだ、そのことだけでも相手を悪く言う謂れは無いのは分かっている。

それでもまるで、その相手の男が悪意を持っているかのような疑念さえ湧き上がる。

ユキコが本当に愛した相手と望んで結婚し、幸せになるなら身を引くことは厭わぬ覚悟だった。

それだけに違うのであれば正に身を切られるような思いになる。

あらぬ妄想や空想が泉の如く湧き上がる。

いつしか暴力的な衝動に包まれ、自制するように拳を強く握りしめた。

それでも彼女にしてきたことを想えば耐えるしかない。口約束でも立てた誓いを破る気はない。彼女の意志で決めたことなら、受け入れるより他はない。

気が昂ぶっていたのか午前三時をまわるまで、幾ら目を閉じても眠りにつくことは出来なかった。

それでもとうとうとして、目が覚めたのは午前五時。

あまりにも早過ぎる目覚めに二度寝を決め込むが、全く眠れそうにはない。

原因は考えるまでもない。

心の動揺に、自覚したことのない精神の脆さを感じて我知らずに苦笑する。

このまま寝転がったままでもいいが、おそらく今はもう眠れないだろう。

諦めて起き上がり煙草に手を伸ばす。

これでよかったんだろう。

その結婚はユキコが望んだことで、宗教が優先なら例え愛が無くても幸せじゃないとは限らない。

癪だが現に精神疾患も回復の兆しを見せているとの話だ。

これで俺も吹っ切れる。

虚勢を張るように嘯きながら今はただ静かに夜明けを待っていた。

待つ必要が無くなった。

ただそれだけの変わらぬ日々が過ぎていく。

何も変わることはない、そう思っていた。

あれからまともに睡眠がとれない。寝つきが悪く二・三時間ですぐ起きる。起きて口の中が血だらけになっていたのは歯軋りの所為で、その音で度々目が覚める。

食事を身体が受け付けない。胃が悪いのか鳩尾の辺りがキリキリ痛む。食べても戻すか下すかの二択に、固形物の摂取は必要最低限に控えて栄養剤の世話になる。どこまで吸収されているか判らないが一ヶ月で五キロは痩せた。

表情がうまく作れない。顔は強張り、意識して口角を上げようとしても引きつり無表情を強制する。

以前はそれなりに社交的な会話を操り、接骨院内においては患者との談笑や無駄話に興じていたが、あれから業務以外のことは口にしなくなった。冗談や明るい話題さえも付き合う余裕が無くなり、単純な相槌程度はするものの症状の説明が限界で会話が思いつかない。

かろうじて施術は今迄通りにおこなってはいるものの、無表情に無口、どこか病的な様相にまともな対応が出来ずに空回りするばかりで患者は離れ、受付嬢も退職を願い去っていき、いつしか接骨院では独りの時間が増えていた。

客観的に診るまでもなく鬱状態を含む精神疾患に罹ったのだろう。

そう追い込まれるほど祖父の死で弱った心に彼女の結婚の報せは予想を遥かに超える衝撃で、その喪失感は初恋の時のそれ以上でもあったようだ。

ユキコを病に追い込んだ自分が、彼女のことで鬱になるなど因果応報もいいところだった。

頭では、理性では受け入れていたつもりでいたが、感情は別のモノだとつくづく思い知らされる。

彼女が出したどんな答えも黙って受け入れる、この有様で今思えば随分と安請け合いをしたものだ。

仏教書に極楽や地獄について集められた三巻十章からなる「往生要集」がある。

その地獄の描写の中、八大地獄のひとつ衆合地獄に、淫らなことを繰り返した者に与えられる責苦で「刀葉林」がある。

その林にある木の葉は刀の刃の様に鋭い。

地獄に落ちた男が木を見上げるとそこに美女の姿がある。

美女を求めようと木に登る男の身体を葉の刃が切り刻む。

抗えないのか抗う気がないのか全身の筋肉を引き裂かれながら頂上に登りきると、そこに美女の姿は無い。

見下ろすといつのまにか木の下に美女がいる。

男がまた求めて降りようとするすると再び葉の刃が全身を切り刻む。

降りると美女は木の上に現れ男はまた登りはじめる。

これを永劫とも呼べる時間、何度も繰り返す。

失ってもまだユキコを愛し想う己に刀葉林が重なる。

叶わぬ恋に手を伸ばし自分自身が傷つく。

思えばユキコも同じ、会いたいと求める心が自分自身の心を傷つけていた。

求めなければ傷つくことも無いのに、ただそれだけのことが難しかった。

ユキコの結婚を迎える日が近づくごとに心は病に蝕まれ、その病状は悪くなるばかりだった。

いっそ仕事も何もかも投げ出し、この地を離れれば楽になれるのかもしれない。

それでも今日も朝から接骨院のシャッターを開ける。

鬱に任せてこの場所から消えることは、彼女と過ごした時間を否定するような気がして出来なかった。

彼女が離れたことにより何かが変わることを許さずにいた。

独りよがりのユキコへの想いが鬱に屈することに抗い、かろうじて生業を続ける為の心の平衡だけは保っている。

現状を知れば彼女は重荷とし、自分の所為だとまた思い詰めかねない。

知られてはならない。

面と向かって会えば異常に気付かれる。

だから会わずにしよう。

いつか会う時に心の底から結婚を祝い、幸せを望むと笑って言えるよう、今はただ平穩を装った日常を、足掻きながら意地でも送り続けようとしていた。

十二月、ユキコの結婚式当日。

初めて彼女と会ってから三年の月日が経っていた。

今年一番の冷え込みを報じるニュースを聞きながら、今日は天気がいいからと祖母を墓参りに連れ出す。

祖父の墓は家から近く、車で十五分程の小高い丘の上の霊園の一画にあり、祖母の気晴らしにでもなればと、納骨後は毎月必ず祖父の月命日前後の日曜日に連れて来ていた。

まばらに生えた雑草を引っこ抜き、花を供えて線香に火をつける。

コウスケから聞いた時間通りなら今頃式も始まっている頃だろう。

未だに断ち切れぬ想いに、自覚する病状は頂点に達し、胃の腑の辺りが握りしめられたように痛む。

いつもであれば祖母の前ではおくびにも出さずにいられるが、ここ数日はさすがに辛く知らずの内に顔が強張る。

たまらず空を見上げた。

こんな気分の時は誰でもするだろう。

やるせない心を映したかのような空の青がやけに目に沁みた。

祖母の呟くように拝む声が聞こえる。

墓参りや拝むことに意味を求めるのは野暮だろう。

これで祖母が慰められるなら、それなりに価値があるというものだ。

後片付けを済ませて帰り際、墓を振り返る。

宗教は嫌いだ。

死後の世界も信じちゃいない。

それでも

「また来るよ」

墓に声をかけた。

季節がいくつか移り変わった。

あれから一時的に酒も煙草も止め、毎晩走り込み身体を鍛えることで鬱だった精神との平衡を取り戻すことに努めた。

今では少しだけ作り笑いが出来るようになった。

受付時間を過ぎ、残った患者の施術も終えて院内の片付けでもしようかと腰を上げた午後八時半。

ほんの数分前にマナーモードを解除した携帯電話は、懐かしい名前を液晶に映し出しながら着信音を鳴り響かせた。

「御久し振り・・・です」

姓が変わった　—ユキコのぎこちない挨拶。

「ああ、元気か？」

「はい、お陰様で」

「調子はどう？発作とか」

「だいぶ良くなりました。発作は・・・まだ、たまに出ます」

「なんだか他人行儀な喋り方だな」

「・・・もう人妻ですから」

改めて本人の口から聞く言葉に、少しだけ胸が痛む。

「今、大丈夫ですか？」

「構わないけどそっちは今一人なのか？」

「主人は今日、帰りは九時過ぎだから」

主人などという言葉も出来れば聞きたくないものだ。

「コウスケから元気がなかったように聞いたんですけど、先生は調子、大丈夫ですか？」

「まあ、とりあえずは」

コウスケ相手には極力平静を装っていたつもりだ。

その程度で伝わっているのなら彼女が気に病むことはないだろう。

「それで？久しぶりに声が聴けて俺は嬉しいけど、何かあった？」

「うん・・・実は来月引越しすることになったの。主人の仕事の都合で」

「そうか・・・どこへ？」

「一一県」

遠くの県の名前を口にする。

「遠いな」

今でも近くにいるからといって会うことは無い。

それでも何故か離れることに寂しさを感じた。

「だからその前に謝りたくて」

「何を？」

「先生のお祖父さんが亡くなってから、私が何も言わずに会いに行かなくなったことを・・・」

「心配しなくても気にしてないよ」

「でも先生が辛い時に見捨てたようで、本当は私、傍にいようと想ってたのに・・・」

「でも、通夜に来てくれてたんだろ？」

電話の向こうで息を飲む音が聞こえる。

「知ってたの？」

彼女はこちらに気付いていなかった。

思い返せばあの位置からは逆光で、こちらの顔は分からなかったろう。

「駐車場脇の道路の白い車、自信無かったけど多分そうじゃないかと思ってた」

「うん・・・入れなかった・・・」

言葉少なに答えたのは異なる宗教の祖父に配慮してのことだろう。

何を言い訳にしても否定につながる。

「まあそのあとじゃ嫌でも気付くよ、なんで来なくなったのかくらい」

「・・・そうだったんだ」

「お前の病気のこともコウスケ君から聞いていたから悩んでいたことも分かってる。だから俺も我慢した。予想外なのは結婚くらいか、あれには驚いた」

「落ち込んだ？」

「いや、素直に受け入れたよ」

少しくらいの見栄は許されるだろう。

「恨んでない？」

「全然」

これは本当だ。

「恨むようなら最初から好きになったりしないよ」

「ありがとう、嘘でも嬉しい」

いつのまにか以前のような自然な口調で話している。

「今、幸せか？」

あまり聞きたくないが、聞けば安堵出来るような気がした。

「分からないけど、穏やかには暮らしてる」

相変わらずの彼女らしい答え方だ。

「主人もいい人よ。こんな身体の私を受け入れてくれたし、婚約する時、先生のこと話したの。それでも構わないって」

「旦那のことは愛しているのか？」

聞きたくもないが、自分が身を引いただけの甲斐があったのかを知りたかった。

「いい人・・・だと思う。でもほら、女は愛されているほうが幸せになれるって言うし・・・」

「違うのか？」

「・・・どうなのかな」

何か引っかかる煮え切らない答えは、彼女の幸せに疑心を湧き上がらせる。

「本当にお前が望んだ結婚だったのか？」

意に沿わぬ結婚ではないかと考えていたこともある。

「同じ宗教って理由だけで結婚したのか？」

ただ流されての、病から逃げる為の結婚も、彼女が望む結婚の形であればそれが幸せに繋がるのかもしれないと自分を納得させていた筈だった。

「素直に受け入れられたわけじゃない。本当は全部捨ててもお前を奪いに行きたかった。それでもお前の意志で決めたことならと耐えていただけだ」

否定も肯定も無く沈黙を続ける彼女に、抑え込んでいた想いが噴き出す。

「それが幸せだと、お前が笑ってられるならと、そうじゃないなら・・・」

「だって分からないよ」

彼女に声を荒げ遮られたのは初めてだった。

「先生がいなかったから・・・寂しくて・・・苦しかったから・・・」

次第に嚙り泣くような声が変わっていく。

「不安で・・・怖くて・・・逃げ出したかったから結婚って言われた時にわたし・・・」

「・・・悪かった」

「いまでもわたし・・・せんせいのが・・・すきなのに」

かすれた声でむせび泣く彼女にかける言葉が見つからなかった。

「あいたい・・・あいたいよお・・・」

「ごめんね、先生。また困らせちゃったね」

結局最後まで泣かせてばかりだった。

これではとても幸せになど出来なかったのだろう。

「いや、俺のほうこそ・・・済まなかった」

「けどもう、これが最後だから・・・」

「ああ」

漂う寂寥感が偽りない終焉を迎えたことを胸に告げる。

「まあ、嫌になったらいつでも離婚して戻っておいで、貰ってやるから」

「知らないの？キリスト教は離婚できないんだよ」

多分、寂しそうに笑いながら言っている。

「分かったよ」

離婚出来るようにと、イギリスをローマカトリック教会から離反させたヘンリー八世のような権力は、無い。

「じゃあね、先生」

「ああ、愛してるよ」

「・・・うん」

どちらが先に切ったのか覚えてはいない。

話し相手のいなくなった携帯電話を机の上に置き、揺れる煙草の煙をただ眺めていた。

— 終 —

施術日誌 一接骨院にクリスチャン

<http://p.booklog.jp/book/74549>

著者：藤 雅道

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fujimasamichi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74549>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74549>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ